

山王廃寺

～平成21年度調査報告～



山王廃寺出土複弁蓮華紋軒丸瓦

2011.2

前橋市教育委員会



1 33トレンチ全景(真上から)



2 33トレンチ遺物出土状況(西から)



3 33トレンチ完掘状況(西から)



4 33トレンチ礎石据え付け根石



5 34トレンチ全景(真上から)



6 34トレンチ中門北縁辺瓦出土状況(北から)



7 40・41トレンチ全景(真上から)



8 B-5号掘立柱建物跡(西から)



9 B-6号掘立柱建物跡(西から)



10 41トレンチ切石出土状況(北から)



11 P-4132半截 磁板瓦出土状況



12 P-4132磁板瓦上面出土状況



13 P-4132磁板瓦下面出土状況

はじめに

山王庵寺がある總社・元總社地区は、宝塔山古墳に代表される總社古墳群をはじめとして国府、国分僧寺、国分尼寺などの諸施設が立ち並ぶ古墳時代から律令制の中核地域といえます。

今回、報告書を上梓する山王庵寺は、大正年間に五重塔の塔心礎が発見され、昭和3年に国史跡に指定されました。また、昭和56年度の調査で、「放光寺」とヘラ書きされた瓦が出土しました。一片の文字瓦の発見により史跡山上碑、上野国交替実録帳にてくる「放光寺」と山王庵寺が見事に一致しました。

また、伽藍配置についても東に五重塔、西に金堂が並ぶ、奈良斑鳩法起寺式の様式を採用したものと推定されています。出土品には、全国的にも稀有な石製鶴尾や根巻石をはじめ、綠釉陶器セット、銅椀、建物の屋根に葺かれた多量の瓦が発見されています。さらに、平成9・11年度には、塑像をはじめ壁画や天蓋、須弥山など塔本塑像を構成していた破片が3,000点以上も発見されました。これらの塑像はその種類、内容から法隆寺の塔本塑像に匹敵することが判明し、山王庵寺の歴史的価値を再認識する資料となりました。

しかし、古代東国を代表する山王庵寺については、その詳細な実態が把握できていない状況です。この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するため基礎的な資料を得るために文化庁、群馬県教育委員会の指導を受け「山王庵寺等調査委員会」を平成12年に発足させました。毎年検討会を開催し、平成18年度から5カ年計画で継続的な確認調査を行うことになりました。

今回、報告を行う第4年次の調査は、前年に引き続き南辺回廊と中門の調査を行い、幸いにも今回の調査によって確定することができました。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の總社町山王自治会はじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成23年2月

前橋市教育委員会

教育長 佐藤博之

例　　言

1. 本報告書は、「総社・元總社地区の古代遺跡整備に伴う山王庵寺範囲内容確認調査計画書」に基づき、5ヵ年の調査計画（平成18~22年度）の4年次調査として、平成21年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市総社町総社2408番地ほかに所在する。
3. 発掘調査は、山王庵寺等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。
 - ①発掘調査期間　平成21年8月24日～平成21年12月24日
 - ②整理・報告書作成期間　平成22年1月5日～平成23年1月14日
 - ③調査組織（平成21・22年度）
　山王庵寺等調査委員会
 - (1) 委員会
　　指導　渡辺丈彦（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）、西田健彦（群馬県教育委員会文化課保護課長）
　　顧問　佐藤博之（前橋市教育委員会教育長）
　　委員長　松島榮治（前橋市文化財調査委員）
　　副委員長　阿部義平（国立歴史民俗博物館名誉教授）
　　委員　須田勉（国士館大学文学部教授）、阿久津宗二（前橋市文化財調査委員）、梅澤重昭（同）、井上唯雄（同）、右島和夫（専修大学文学部講師）
　　幹事　飯塚聰（群馬県教育委員会文化材保護課文化財活用指導主事）、深沢敦仁（同埋蔵文化財係指導主事）、戸塚良明（前橋市教育委員会管理部長）、齊藤明久（同總務課長）、栗原和彦（前橋市教育委員会文化財保護課山王庵寺担当）、右島和夫（21）、能登健（22）、篠田薫（21）、松村親樹（22）
 - (2) 調査部会
　　幹事　松田猛（高崎市立倉渢川浦小学校長）、田中広明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団主査）、出浦崇（伊勢崎市教育文化財保護課埋蔵文化財担当主査）
 - (3) 事務局（担当課 前橋市教育委員会文化財保護課）
　　課長（幹事）　松村親樹　文化財整備指導員　右島和夫（21）、能登健（22）
　　課長補佐　小島純一（兼文化財保護係長）、前原豊（兼埋蔵文化財係長）
　　係員　山下歳信、丸山展久、神宮聰、坂本高弘（22）、福田貫之（21）、阿久澤智和（22）
 - ④発掘・整理担当者　山下歳信、福田貫之
4. 本書の編集は山下・福田・阿久津が行った。原稿の執筆分担は下記のとおりである。
I・II・IV・V・VI・VII…山下　III…福田　VIII…栗原和彦
5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。
青木あづ子、青木麻耶、石倉稔夫、神山早苗、須田博治、須藤豊、高澤京子、渡木秋子、中澤光江、庭山皓正、平林しのぶ、星野和子、矢島忠、山田哲也、湯浅たま江
6. 発掘調査にあたり、都丸甲子郎氏、阿久津善男氏、都丸準之助氏、阿久津勲氏、都丸春巳氏、都丸晴好氏、阿久津芳枝氏、都丸美子氏、谷田豊二氏、加藤明美氏の土地を借用した。また、総社町山王自治会および同会長・阿久津勲氏の全面的な協力があった。
7. 調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった。
文化庁記念物課、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県立歴史博物館、財團法人埋蔵文化財調査事業団
阿久津宗二、阿部義平、出浦崇、井上唯雄、岡部央、岡本東三、近藤義雄、坂井秀弥、須田勉、高井佳弘、田中広明、富沢敏弘、南雲芳昭、原田昌幸、深沢敦仁、松島榮治、松田猛、右島和夫
8. 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図に建設省国土地理院発行の1:200,000地形図(宇都宮、長野)、1:50,000地形図(前橋)を使用した。
3. 本遺跡の略称は、18A135である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。本文中では、トレンチの略称としてTを用いた。
4. 道構及び道構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳～奈良・平安時代の竪穴住居跡　　B…建物跡　　W…溝跡　　D…土坑
P…ピット・柱穴・貯蔵穴
5. 道構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

道構　　全体図・道構配置図…1:100、1:150、1:200、1:300、1:400などを適宜用いた
道構断面図…1:60　　住居跡…1:60(竪…1:30)
遺物　　土器…1/3・1/4　　鉄製品…2/3　　瓦…1/2・1/4・1/5・1/6を適宜用いた。
6. 計測値については、()は現存値、〔 〕は復元値を表す。
7. 遺物観察表については、以下のとおり記述した。
 - ①層位は道構出土の場合、「床直」・「底面」：道構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」：床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。
 - ②口径・器高の単位はcmである。現存値を()、復元値を〔 〕で示した。
 - ③胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。
 - ④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焰焼成によるものは「酸化焰」と記載した。
 - ⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』(小山・竹原 1967)によった。
8. 土層注記中に使用した略号は下記のとおり。

B…ブロックの略　　C・FP…As-CやHr-FPなどの白色軽石
9. 道構平面図の―――は推定線を表し、- - - - -は堅緻面の範囲を表す。
10. スクリーントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに凡例を設けた。

道構平面図　　版築…■■■■■　　粘土分布…■■■■■　　炭化物分布…■■■■■　　灰分布…■■■■■
道構断面図　　構築面…■■■■■　　版築…■■■■■
遺物実測図　　須恵器断面…■■■■■　　煤付着…■■■■■
11. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B (浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年)
Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉)
Hr-FA (榛名二ッ岳洪川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭)
As-C (浅間C軽石：供給火山・浅間山、4世紀前半)

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	4
1	遺跡の立地	4
2	歴史的環境	4
III	調査方法と経過	7
1	調査方法	7
2	調査経過	9
IV	基本層序	10
V	伽藍の調査	13
1	回廊	13~15
2	中門	15~18
3	各トレンチの状況と検出遺構	18・19
VI	寺域の調査	20~30
VII	出土瓦	
1	はじめ	31
(1)	軒瓦	33
(2)	丸・平瓦	36
(3)	道具瓦	39
(4)	文字瓦など	39
(5)	B型瓦帽と伽	40
2	瓦整理作業から	
(1)	重弧紋軒平瓦	43
(2)	出土瓦から見た山王庵寺（軒丸編年案）	51
(3)	創建瓦について	55
(4)	安中市秋間資料館所蔵瓦、秋間古窯探集瓦の調査	56
VIII	その他の遺構と出土遺物	
1	堅穴住居跡と出土遺物	66
2	その他の出土遺物	81
IX	ま と め	
1	成果と課題	84
2	結語：今後の課題	86

挿図目次

Fig. 1	山王庵寺位置図	2	Fig.25	重弧紋軒平瓦 2	45
Fig. 2	推定伽藍配置と過年度調査	3	Fig.26	重弧紋軒平瓦 3	47
Fig. 3	周辺遺跡	6	Fig.27	重弧紋軒平瓦 4	49
Fig. 4	2 m小グリットの呼称	7	Fig.28	秋間古窯跡出土軒瓦	58
Fig. 5	グリット設定図と平成21年度調査区	8	Fig.29	丸・平瓦の比較 1	60
Fig. 6	基本層序模式図と各トレントチ層柱状図	10	Fig.30	丸・平瓦の比較 2	61
Fig. 7	平成21年度主要伽藍調査全体図	11・12	Fig.31	H-41号住居跡・出土遺物	67
Fig. 8	33トレントチ調査区平・断面図	14	Fig.32	H-42号住居跡・出土遺物	68
Fig. 9	34トレントチ調査区平・断面図	16	Fig.33	H-43号住居跡・出土遺物	69
Fig.10	34トレントチ調査区断面図	17	Fig.34	H-44号住居跡	70
Fig.11	35a、35bトレントチ断面図	19	Fig.35	H-44号住居跡・出土遺物	71
Fig.12	38・39、42～44トレントチ全体図	21	Fig.36	H-45号住居跡・出土遺物	73
Fig.13	40・41トレントチ全体図	22	Fig.37	H-49号住居跡・出土遺物	74
Fig.14	B-5号掘立柱建物跡平・断面図等	24	Fig.38	H-50・51号住居跡	75
Fig.15	B-6号掘立柱建物跡平・断面図	25	Fig.39	H-50・51号住居跡出土遺物	76
Fig.16	41トレントチ柱穴・土坑平面断面図	28	Fig.40	H-55号住居跡・出土遺物	77
Fig.17	41トレントチ土坑・溝平面断面図	29	Fig.41	H-56号住居跡・出土遺物	79
Fig.18	軒瓦	34	Fig.42	H-58号住居跡・出土遺物	80
Fig.19	丸瓦	36	Fig.43	H-60号住居跡・出土遺物	81
Fig.20	平瓦	38	Fig.44	H-61号住居跡・出土遺物	82
Fig.21	面戸瓦	39	Fig.45	33・34トレントチ出土遺物	83
Fig.22	文字瓦など	40	Fig.46	トレントチ出土遺物	84
Fig.23	B型瓦窓と伽	41	Fig.47	山王庵寺伽藍復元図	89
Fig.24	重弧紋軒平瓦 1	44			

表目次

Tab. 1	これまでの調査経過	1	Tab. 9	平成21年度調査出土軒平瓦分類集計表	35
Tab. 2	調査区の面積と調査目的	7	Tab.10	出土文字瓦一覧	39
Tab. 3	平成21年度検出遺構の概要	9	Tab.11	波状紋・戯画など	39
Tab. 4	B-5号掘立柱建物跡 P 2上面出土遺物 観察表	25	Tab.12	秋間資料館所蔵古窯跡採集瓦一覧	63～65
Tab. 5	B-5号掘立柱建物跡柱穴計測表	25	Tab.13	H-41号住居跡出土遺物観察表	67
Tab. 6	B-6号掘立柱建物跡柱穴計測表	26	Tab.14	H-42号住居跡出土遺物観察表	68
Tab. 7	出土軒瓦一覧	31	Tab.15	H-43号住居跡出土遺物観察表	69
Tab. 8	平成21年度調査出土軒丸瓦分類集計表	35	Tab.16	H-44号住居跡出土遺物観察表	72
			Tab.17	H-45号住居跡出土遺物観察表	72

Tab.18	H-49号住居跡出土遺物観察表	74	Tab.23	H-60号住居跡出土遺物観察表	81
Tab.19	H-50・51号住居跡出土遺物観察表	76・77	Tab.24	H-61号住居跡出土遺物観察表	81
Tab.20	H-55号住居跡出土遺物観察表	77	Tab.25	33トレンチ出土遺物観察表	82
Tab.21	H-56号住居跡出土遺物観察表	80	Tab.26	34トレンチ出土遺物観察表	83
Tab.22	H-58号住居跡出土遺物観察表	80	Tab.27	その他トレンチ出土遺物観察表	84

図版目次

巻頭図版

1	33トレンチ全景（真上から）		8	B-5号掘立柱建物跡（西から）	
2	33トレンチ遺物出土状況（西から）		9	B-6号掘立柱建物跡（西から）	
3	33トレンチ完掘状況（西から）		10	41トレンチ切石出土状況（北から）	
4	33トレンチ礎石据え付け痕根石		11	P-4132半截礎板瓦出土状況	
5	34トレンチ全景（真上から）		12	P-4132礎板瓦上面出土状況	
6	34トレンチ中門北縁辺瓦出土状況（北から）		13	P-4132礎板瓦下面出土状況	
7	40・41トレンチ全景（真上から）				
PL. 1			4	43号住居跡（38T南西から）	
1	33トレンチ遺物出土状況（西から）		5	39トレンチ全景（西から）	
2	33トレンチ完掘状況（西から）		PL. 5		
3	33トレンチ遺物出土状況（南東から）		1	49号住居跡（39T西から）	
4	33トレンチ遺物出土状況（近影）		2	50・51住居跡（39T西から）	
5	33トレンチ礎石据え付け痕根石（北から）		3	50号住居跡遺物出土状況（39T南から）	
6	33トレンチ礎石据え付け痕根石近影		4	同住居跡遺物出土状況近影	
PL. 2			5	53号住居跡（39T南から）	
1	33トレンチ北壁断面		6	54号住居跡（39T南から）	
2	33トレンチ版築との境断面		7	B-5号掘立柱建物跡（40T北西から）	
3	34トレンチ完掘状況（北から）		8	同建物跡P ₁₁ ・P ₁₂ の布堀り（40T南から）	
4	34トレンチ西壁北側断面（近影）		PL. 6		
5	34トレンチ中門版築断面		1	B-5号掘立柱建物跡全景（40T西から）	
PL. 3			2	B-6号掘立柱建物跡全景（40T西から）	
1	34トレンチ中門北縁辺の状況（北から）		PL. 7		
2	34トレンチ調査区全景（北から）		1	B-5号掘立柱建物跡P ₁₂ セクション	
3	34トレンチ中門北縁辺の瓦等出土状況（北から）		2	P-4131・4132（41T南から）	
4	34トレンチ南方礎石据え付け痕根石（北から）		3	P-4132礎板瓦出土状況（真上から）	
PL. 4			4	P-4132礎板瓦上面出土状況（真上から）	
1	35aトレンチ全景（南から）		5	P-4132礎板瓦下面出土状況（真上から）	
2	35bトレンチ全景（南から）		6	B-6号掘立柱建物跡P ₂₂	
3	38トレンチ全景（西から）		7	D-4101切石出土状況（真上から）	

8	D—4102切石出土状況（北から）	PL.10 平成21年度調査出土平瓦
PL. 8		PL.11 平成21年度調査出土丸瓦
1	D—4101・4102切石出土状況（41T北から）	PL.12 文字瓦・切石
2	44トレンチ調査区全景（北から）	PL.13 トレンチ出土遺物 1
		PL.14 トレンチ出土遺物 2
		PL.15 トレンチ出土遺物 3
		PL.16 トレンチ出土遺物 4
	〔遺物〕	
PL. 9	平成21年度調査出土軒瓦	

I 調査に至る経緯

山王庵寺は7世紀後半の創建と考えられる古代寺院である。その存在は大正年間、塔心礎が偶然発見されたことにより明らかとなった。これを嚆矢としその後、2体の石製鶴尾や七弁の蓮華紋をかたどった根巻石などの精巧な石造品をはじめ塑像、綠釉陶器のセットや佐波理椀、金銅製飾り金具、堂宇に葺かれた大量の瓦などが耕作や工事の際に続々と発見された。

山王庵寺における最初の調査は、大正10年の福島武雄氏による塔心礎の調査である。塔心礎は昭和3年に「山王塔跡」として国の史跡に指定された。その後、昭和49年から56年にかけ7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査では、とくに6次調査での金堂の検出および「放光寺」箋書の平瓦の出土が注目される。この瓦の出土により、山王庵寺は「山ノ上碑」や「上野交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。また、平成9～11年にも山王庵寺周辺の下水道敷設に伴い調査が行われ、このときには土坑から大量の塑像が出土している。これらの発見や調査、研究により、山王庵寺の歴史的価値が広く認められることとなった。

Tab. 1 これまでの調査経過

年度	調査名	調査目的(原因)/面積 (m ²)	調査機要	文献
S49 (1974)	第1次調査	寺域の確認	斯の北110mで北門と考えられる孤立柱建物跡（4次調査で専用もしくは食堂とされる）の一部を抽出。	
S50 (1975)	第2次調査	寺域の施設の確認	寺院周辺遺構は掘出されなかった。寺院創建以前（6世紀前）を主とする東西穴住居群が調査された。	前橋市教委 1975
S51 (1976)	第3次調査	北東部遺跡の確認（塔址跡、施設施設の確認）	寺域内から発見するに連なるとみられる礎石建物（礎石群B）のほか、中世以降とみられる礎石群Aが検出された。	前橋市教委 1977
S52 (1977)	第4次調査	1次調査で検出された施設立柱建物群の調査	平行行間、東西3間の幅の孤立柱建物であることが判明した。僧房もしくは食堂と推定された。建物の面倒は円筒形を軸とした直角形状地盤が検出された。	前橋市教委 1978
S53 (1978)	第5次調査	4次調査の確認（立柱建物、施設施設の確認）	孤立柱建物跡の南北に並ぶがつくつとが確認された。また、この建物の間隔から6種の孤立柱建物を検出し、うち2つは南北方向が並び、4つは東西方向に並んで建物であることがわかった。	前橋市教委 1979
S54 (1979)	第6次調査	施設跡群（北・西側）	施設跡群（北・西側）の確認。寺域内に立派な施設跡群が存在するが、法事場（法事堂）、法事室（法事室）や「上野別院御茶殿御室」に記載される施設（平屋の茅葺き、笠置、瓦葺き）である可能性が示された。	前橋市教委 1980
S56 (1981)	第7次調査	塔・金堂の規模の確認、回廊の確認	施設の基礎については「ついで14mの間隔であることが判明した。また、施設跡群に設置された南北下から斜め下に走る踏道跡が確認された。このことより、9世紀代にかけて設置された可能の回廊性を示すものと判断された。」（前橋市教委、2004年）	前橋市教委 1982
H 9 (1987)	山王寺等 1通路	（下水管理設に伴う調査）	金堂、寶篋院堂などは以前の調査と異なった調査結果。さらに多く宝篋印陀羅（宝篋印陀羅）を調査。講堂は金堂・塔の30mから検出され、東西3m、南北22m以上の規模が検定された。金堂について東西4m、南北12mを越す規模になるとることが判明した。	前原1998
H 10 (1988)	山王寺等 H. 田道	（下水管理設に伴う調査）	寺院周辺の遺構は検出されなかった。	
H 11 (1989)	山王寺等 N. V. 道	（下水管理設に伴う調査） 礎石出土土坑の調査	平成元年に検出された埋蔵土上部を調査し、多量の瓦片に翼轡り女性像や輪舟持の頭部など2,000件（19・21年度合計）を割り出る結果が出土した。松原一郎らからの分析により、8世紀第2四分期の例で、斯の初期に安置される被服本尊像の一例であることが判明した。	前原・埋里文 2000
H 18 (2006)	東西内容確 認調査	講堂、回廊東・西端、寺域北 の確認	講堂の敷石基壇は南北約18m、東西24.5mであることを確認した。講堂東側で北面回廊を検出する。北面回廊は南北約18m、東西24.5mであることを確認した。北面回廊の北側には南北約18m、東西24.5mの施設跡が南北に位置する。北面回廊の北側には南北約18m、東西24.5mの施設跡が南北に位置する。	前橋市教委 2007
H 19 (2007)	東西内容 確認調査	金堂・西面回廊・南面回 廊・寺域北端と南端	金堂は基礎地盤に白い粘土を充填し、白い粘土の色相から基础構造は東西22.0m、南北16.4m以上と推測。また、金堂の北側に北面回廊を認めた建物の存在がわからなかった。西面回廊の北側の施設跡が2所確認され、回廊の東西横幅は7.9mであった。	前橋市教委 2009
H 20 (2008)	東西内容 確認調査	講堂、南面回廊、金堂北 側建物跡、今城跡・南面 の確認、750-1	講堂跡の南北の瓦片を確認し、基壇基礎の1-21.3mの範囲があることが判明。基壇基礎の裏壁は9.15m以降の急傾斜地基柱と推測される。南面回廊の規模が広くになり、回廊の南北横幅は82.4mとなった。金堂北側・南側に張り出し確認され、建物の存在が明らかになった。	前橋市教委 2010

前橋市教育委員会では平成12年度に、これらの調査成果を受け山王庵寺および関連遺跡を調査し、保存と整備の方策を立てることを目的に「山王庵寺等調査委員会」を設置した。以降、17年度まで計6回にわたり、文化庁・県教育委員会の指導や専門家・学識経験者等の協力を得て委員会を開催し、既出資料の集約、調査から保存・整備までの基本構想・確認調査計画の策定などを行った。平成16年度の委員会では、「山王庵寺範囲内容確認調査計画」が審議され、これに基づき平成18年度より5ヵ年計画の調査が実施されることになった。

18年度は、①講堂範囲の確定、②回廊東側の確認、③寺域北限の確認を調査目的とし、9ヶ所にトレチを設定し、674m²を調査した。19年度は①金堂範囲の確認、②西・南面回廊の確認、③寺域の確認を目的として10ヶ所にトレチを設定し、計405m²あまりを調査した。なお、調査終了後の平成19年度に、史跡の追加指定と名称変更を申請し、平成20年3月28日付けで官報告示された。この結果、史跡名称は「山王庵寺跡」となり、指定面積は8,277.25m²に拡大した。

I 調査に至る経緯

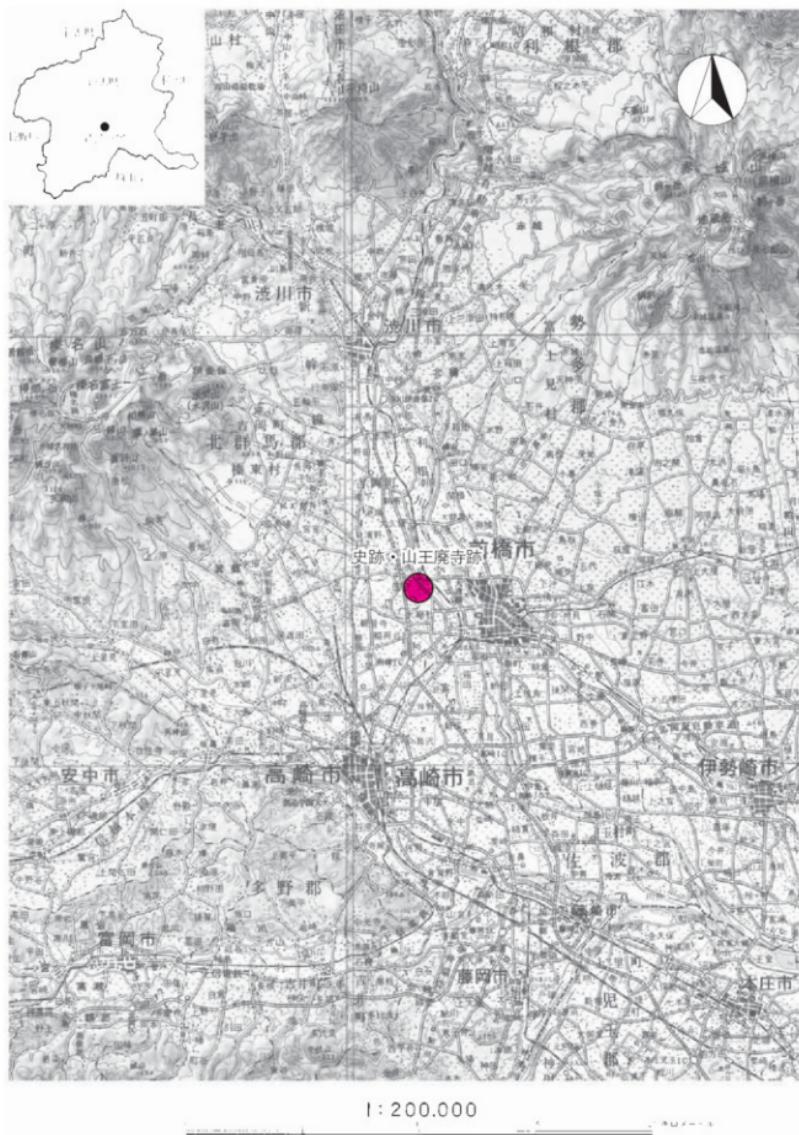


Fig. 1 山王庵寺位置図



Fig. 2 推定伽藍配置と過年度調査

II 遺跡の立地と環境

20年度は、①塔跡の範囲確認、②南面回廊の確認、③金堂北側建物跡（B—2号建物跡）の範囲確認、④寺域北・南辺の確認を調査目的として12箇所のトレチを設定し、計350m²あまりを調査した。

平成21年2月26日の調査委員会において、20年度の調査報告とともに21年度の調査計画が協議された。これにより21年度調査では、①回廊の範囲確認、②中門の範囲確認、③金堂南側施設の範囲確認、④寺域の確認を調査目的として12箇所のトレチを設定し、計640.5m²あまりを調査した。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

山王庵寺は、前橋市街地の西方、利根川を挟んで約4kmの地点、総社町総社2408番地ほかに所在する(Fig. 1)。前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。前橋台地は、約24,000年前の浅間山爆発によって引き起された火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。前橋台地の東部は広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。

遺跡地は、この相馬ヶ原扇状地から前橋台地への移行地帯に位置し、標高は127~130m付近にある。遺跡地北東縁辺には八幡川が、西側約300mには牛池川が自然地形に沿って北西から南東に向かって流下している。遺跡は両河川に挟まれた東西幅約600mの微高地にあり、これらの河川との比高差は3~5mを測る。遺跡周辺の微地形は北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。

現在、遺跡地周辺には、西へ約0.6kmの地点に関越自動車が南北に走り、南側には国道17号が、東側にはJR上越線が走る。遺跡地東側には八幡川を隔てて吉岡バイパス（通称産業道路）が南北に走り、この道路沿いには大規模小売店やオフィスビルの進出が著しい。ただ、幹線道路から少し外れた本遺跡地は、周囲に田畠が広がり、住宅地には古くから残る養蚕農家が立ち並ぶという静かで落ち着いた環境である。

2 歴史的環境

山王庵寺周辺の元総社・総社地区は、古代上野国の中心地として歴史的に重要な役割を果たしてきた場所であり、多数の遺跡が存在する。本遺跡の北東には総社古墳群があり、また南西1.2kmには上野国分寺、その東500mには国分尼寺、さらにその東側には上野国府推定地がある。以下、各時代の様相について、周辺の遺跡分布から概観してみたい。なお、本文中の遺跡名の前に付した数字は、Fig. 2に対応するものである。

縄文時代 関越自動車道建設に伴い調査された高崎市国分町へ北原町にかけての(5)上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下、中間地域）では、前期～晚期にわたる遺物が出土し、中期（加曾利E）を主体とする集落跡が検出されている。このほか(9)北原遺跡では中期後半頃の土坑が検出されている。区画整理に伴い近年継続的に調査が行われている(26)元総社蒼海遺跡群でも、前期（諸磕b）および中期（加曾利E）の住居跡が検出されている。これら、周辺で確認されている遺構・遺物は前期・中期のものが主体であるが、元総社公民館建設に伴う調査（平成18年度）では、晚期（大洞B C～C 2）の住居跡が検出されている。

弥生時代 弥生時代の調査例は少ない。中間地域では後期集落のほか、方形周溝墓2基が検出されている。(10)下東西遺跡でも後期の住居跡が検出されている。また、当時の稻作の様子を示す(30)日高遺跡があり、水田跡

のほか集落・方形周溝墓等が検出されている。

古墳時代 山王庵寺の北から東にかけて総社古墳群がある。この地域の首長墓と考えられ、5世紀末～6世紀末にかけて前方後円墳5基（遠見山古墳・王山古墳・二子山古墳など）が展開し、7世紀には愛宕山古墳（前半）・宝塔山古墳（第3四半期）・蛇穴山古墳（第4四半期）と3基の巨大な方墳が続く。

(14) 二子山古墳は全長92mと古墳群中の最大規模を誇るが、この地方では最終段階の前方後円墳の1つである。7世紀最初に出現する(15)愛宕山古墳は巨大な横穴式石室の中に朝拔式家形石棺を安置する。(16)宝塔山古墳では長大な載石積横穴石室の玄室に同じく朝抜式家形石棺が安置される。石棺の脚部は仏教文化の影響といわれる格狭間の手法で飾られている。(17)蛇穴山古墳は最終末の横穴式石室の古墳で、玄室壁面は一枚石で造られ、宝塔山古墳の石室と同様漆喰を塗布した痕が残っている。巨大な方墳という墳形、家形石棺の安置、石室石材の加工技術、漆喰の塗布などこの地方の他の古墳群には見られない特別なもので、中央政権と被葬者との強いつながりが考えられる。また、石材の加工技術では、山王庵寺の石造物の加工技術との共通性も考えられ、古墳の築造と寺院の建立が併行して行われたとも言われている。古墳の被葬者であり、山王庵寺の建立者である上野地方の氏族としては上毛野氏の名がうかびあがってくる。（右島1994・津金沢1983）

これに関連する集落跡では中間地域や(6)鳥羽遺跡などを中心に前期～後期の集落形成が見られる。また本遺跡の西側、八幡川の対岸に位置する(30)大屋敷遺跡では後期（6世紀～7世紀）にかけての集落が確認されている。

奈良・平安時代 奈良・平安時代に至ると、上野国府、国分僧寺、国分尼寺の造営と相まって、本地域は古代の政治・経済・文化の中心地としての様相を呈し、周辺一帯は遺跡数・内容において最も充実する。

寺院関連では、(1)本遺跡のほか、(2)上野国分僧寺跡、(27)上野国分尼寺跡がある。国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、発掘調査は昭和55年12月から開始されている。調査では、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認された。国分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレンチ調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。さらに平成12年の前橋市埋蔵文化財発掘調査による南辺の寺域確認調査で、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構を確認した。国分僧寺・尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物跡群が検出されている。

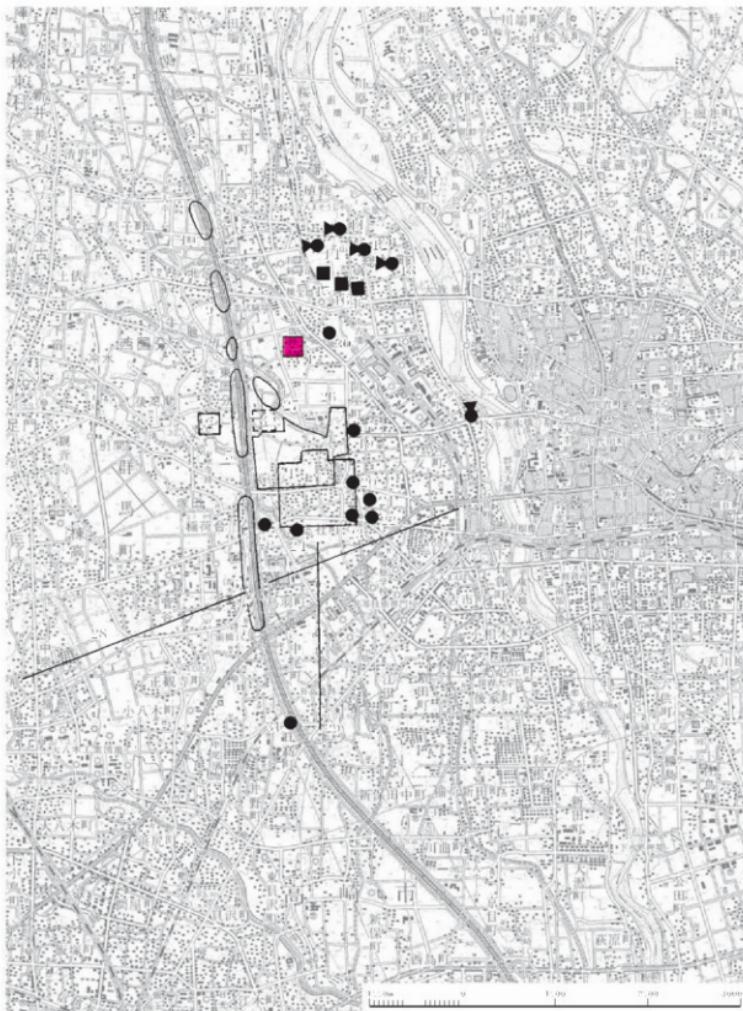
国府に関連する遺跡は、総社神社旧地を中心とする上野国府推定域周辺に広がる。県下最大級の掘立柱建物跡が検出された(23)元総社小学校校庭遺跡や、「國厨」・「曹司」・「國」・「色厨」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した(20)元総社寺田遺跡、律令期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴が検出された元総社宅地遺跡がある。また、大規模な東西方向の溝跡が検出された(19)関泉柄遺跡や元総社蒼海遺跡群（平成17・18年度の調査）と、南北方向の溝跡が検出された(22)元総社明神遺跡の調査成果により、国府城の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは官人の用いたと考えられる円面鏡、巡方（腰帶具）、綠釉陶器、平成20年度の元総社蒼海遺跡群の調査では「大館」「少」と書かれた墨書き土器が出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

また、群馬県や群馬町の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN-64°-E方向の(28)東山道（国府ルート）があることが推定されている。さらに、(29)推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

この時期、集落も急増し中間地域や鳥羽遺跡、国分境遺跡、中尾遺跡などで大集落の形成が見られる。近年継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群でも多数の集落跡が調査されている。これらは、国府城およびその周辺一帯に広がる「国府のマチ」として捉えることができる。

中世 中世 永享元年(1429)、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海城の縄張りは、牛池川と染谷川を外堀とする城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。近年、元総社蒼海遺跡群(25)の調査により大小2個体の完形な青白磁梅瓶が出土し、また、蒼海城の堀跡の検出が相次いでいる。

II 遺跡の立地と環境



1. 山王庵寺 2. 上野国分寺跡 3. 上野國分尼寺跡 4. 推定上野国府 5. 上野国分僧寺・尼寺中間地域
6. 烏羽道跡 7. 中尾道跡 8. 国分境道跡 9. 北原遺跡 10. 下東西道跡 11. 稲荷山古墳 12. 大小道山古墳
13. 遠見山古墳 14. 二子山古墳 15. 愛宕山古墳 16. 宝塔山古墳 17. 蛇穴山古墳 18. 王山古墳 19. 関泉橋道跡
20. 寺田道跡 21. 大友屋敷II・III 22. 元總社明神V道跡 23. 元總社小学校校庭 24. 天神道跡 25. 弥勒道跡II
26. 元總社蒼海道跡群 27. 上野国分尼寺北辺遺跡 28. 推定東山道 29. 推定日高道 30. 大屋敷道跡 31. 日高道跡

Fig. 3 周辺遺跡

III 調査方法と経過

1 調査方法

平成21年度の発掘調査は、①回廊の範囲確認、②中門の確認、③金堂南側施設の範囲、④寺域北・南辺の確認を目的に12ヶ所でトレント調査を行った。総調査面積は640.5m²である(Tab. 2)。調査は、調査方針を定めた「山王庵寺範囲内容確認調査計画書」および、これに沿って作成された「調査基準」に基づいて行った。以下、調査方法について要点を記す。

グリッド設定(Fig. 4) 調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は4 m四方とする。②国家座標第IX系(旧日本測地系)を用い、X = +44,800、Y = -77,200を基点(X 0、S 0)とする。③東から西へ4 mごとにXの数値が増大し(X157、X158、X159……)、北から南へ4 mごとにSの数値が増大する(S 44、S 45、S 46……)。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、本遺跡から南に1 kmほど離れた場所で、近年、区画整理に伴い継続的に調査が行われている元社社蒼海遺跡群のグリッド設定と共通するものであり、山王グリッド(X 0・S 200)が蒼海遺跡群グリッドの基点(X 0・Y 0)である。

トレント調査 各トレントの設定幅は、掘立柱建物の柱穴間隔を考慮し、原則3 m幅とした。トレント名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、18年度からの通し番号とした。

遺構の確認 遺構確認については、基本層序I層およびII層直下で行い、その後、山王庵寺遺構面が存在するIII層(Hr-FP・As-C混土層)を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレントを設定することにし、サブトレントの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

測量 遺構平面図については縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/10～1/50の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺1/20とし、遺構毎の図面とは別に、グリッド杭のあるトレント壁面ですべて作成することとした。

出土遺物の取り上げ 遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は4 mグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて4 mグリッドをFig. 4のように4分割し、2 mの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでA～Dとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

写真撮影 遺構の写真撮影については、35mmフィルム(モノクロ、カラーリバーサル)およびデジタルデータを常時使用した。

また、必要に応じて6×9 サイズフィルムを使用した。空中写真撮影には6×6 サイズフィルムを使用した。

埋め戻し 調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しをおこなった。

Tab. 2 調査区の面積と調査目的

トレント	調査面積(m ²)	調査目的
33	29.0	西面回廊(南西隅)の確認
34	17.0	確定中門・南回廊の範囲確認
35	1.5	金堂南側範囲の範囲確認
36	0.0	金堂北側建物(B-2)の範囲確認
37	0.0	金堂北側建物の東側対象地の遺構の確認
38	60.0	寺城南西側の遺構確認
39	128.0	寺城西側(北西部)の範囲確認
40	99.0	寺城北側の範囲確認
41	81.0	寺城北側の範囲確認
42	48.0	寺城南東側の遺構確認
43	102.0	寺城南側の遺構確認
44	75.0	寺城南側の遺構確認
計	640.5	

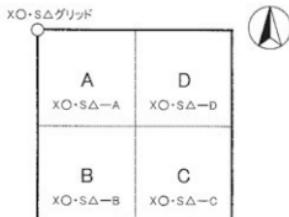


Fig. 4 2 m小グリッドの呼称



Fig. 5 グリッド設定図と平成21年度調査区

2 調査経過

本年度の調査は8月下旬から開始し、12月下旬に終了した。以下、調査経過を月毎にまとめた。

8月 26日、33トレンチ、34トレンチにて人力による掘り下げを開始するが、34トレンチのほぼ中央は別遺構で占めることが判明したため、34トレンチは西側へ1m拡張することになった。また、33トレンチ付近にスズメバチの巣があるため除去を行ってから調査を開始することになった。

9月 33・34トレンチの調査を継続した。4日から人力により35トレンチの掘り下げを行ったが、使われていない浄化槽やパイプに当たり、調査箇所を変更し再度掘り下げ、8日に調査が終了した。調査区の都合により15日から重機を用いて44トレンチの表土掘削を開始し、翌16日は39トレンチの表土掘削を開始した。29日に39トレンチの調査が終了した。

10月 1日から5日まで重機を用いて38トレンチ、40トレンチ、41トレンチの表土掘削を実施し、プラン確認後に調査を行なった。調査を続けていく過程で、38トレンチは多数の住居が重複していることが判明し、40、41トレンチからは布掘りの建物跡、切石、多数の柱穴などが確認された。

11月 33・34・38・40・41トレンチを中心に調査を行なった。4日から43トレンチの表土掘削、翌5日からは42トレンチの表土掘削を行なった。24日から40・41トレンチから確認された布掘り建物跡（B-5号）と重複する建物跡（B-6号）の全容を確認するため調査区の拡張を行なった。その結果、布掘り建物跡（B-5号）は南側に伸びず、ほぼ正方形を呈し、東柱を持つことなどが判明した。また、33トレンチは根石の存在、34トレンチは版築の範囲を確かめるため、ともに再度拡張した。30日に42・43トレンチの調査を終了した。主要な調査区について、一部図面や写真を残すほかは、ほぼ作業を終えたため、7日に現地説明会を開催した。天候にも恵まれ、約170名の参加者は熱心に調査成果に耳を傾けた。また、16日には調査部会が、26日には調査委員会が開催された。

12月 最終段階を迎え、各トレンチでの測量・写真撮影などを中心に調査を行ない、14日に34トレンチ、15日に38トレンチ、16日に35・40・41トレンチの調査を終了した。また36・37トレンチについては検土杖による土層の確認を行なった。その結果、平成20年度調査で確認された建物跡（B-2）は36トレンチまでは拡がらず、また37トレンチにより建物跡（B-2）に相対する遺構は検出されなかった。24日までには全てのトレンチで埋め戻しが終了し、今年度の発掘調査が終了した。

今年度の調査で検出された遺構は、最終的にTab. 3のとおりとなった。

Tab. 3 平成21年度検出遺構の概要

トレンチ	寺院施設等の確認	その他の検出遺構				
		住居跡	土坑	溝	ビット	その他
33	南面・西面回廊の版築土、礎石据付痕跡、溝跡			1		
34	中門の北縁辺、礎石据付痕跡			1	4	壁穴状遺構
35						
36						
37						
38		8		1		
39		6	1	1	4	
40	伽藍北東部の掘立柱建物群	3	3	6	51	
41		2				
42		2				
43		1			7	壁穴状遺構
44		1				
合計		21	4	10	66	

IV 基本層序

本遺跡周辺の基本層序は下の模式図に示すとおりである。これらの層中にはいわゆる指標テフラが含まれる。As-B 軽石(1,108年、浅間山供給)は一部で純堆積が確認できるが(II層)、ほとんどは I 層中に鋪きこまれた状況で確認される。III層中には Hr-FP 軽石(6世紀中葉、榛名山二ツ岳供給)、As-C 軽石(4世紀初頭、浅間山供給)が認められ、As-C 軽石はIV層中に主体的に含まれる。

各調査区の堆積状況は柱状図のとおり一様ではなく、めまぐるしく変化する。As-B 純堆積層(II層)は、今回の調査では検出されなかった。降下時に地形の低かった場所や遺構のくぼみなどに限定して堆積しているものと思われる。III層は古墳後期～奈良・平安時代の遺物包含層であり、山王庵寺の遺物および遺構築面もこの層中にある。ただ、この層の形成要因は様々であったとみられ、形成時期も古墳後期～奈良・平安時代と幅をもつこから、調査区によって遺物の包含状況や混入物に差異がみられる。主要伽藍内部の調査区では、遺物の混入状況などから創建期の整地層と廃絶期の堆積層に分層でき、さらに、平安時代前期（9世紀代）に形成されたと思われる層も一部で確認できる。IV層は As-C 鉢石を多量に含む黒色土で、古墳時代前期に形成されたとみられ、山王庵寺を含む奈良・平安時代の遺構調査時の指標（地山）となり、概ねこの層上面で遺構確認が容易になる。近年の調査ではIV層上面に Hr-FP 鉢石（6世紀初頭、榛名山ニツ岳供給）の堆積が17トレンチ、今回の調査した35b・34トレンチで確認されている。V層は、VI層（總社砂層）への漸移層で、上部の黒色土から下にいくにつれ黄褐色土（場所により褐色粘質土）へと漸移する。VI層は總社砂層と呼ばれる基盤層であるが場所により様相が異なり、24トレンチ東側および25トレンチではロームに近い色調・土質で、ほかの調査区では明褐色もしくは白色に近い明褐灰色を呈す粘質土である。後者は、堆積時に水の影響を強く受けたものと思われる。

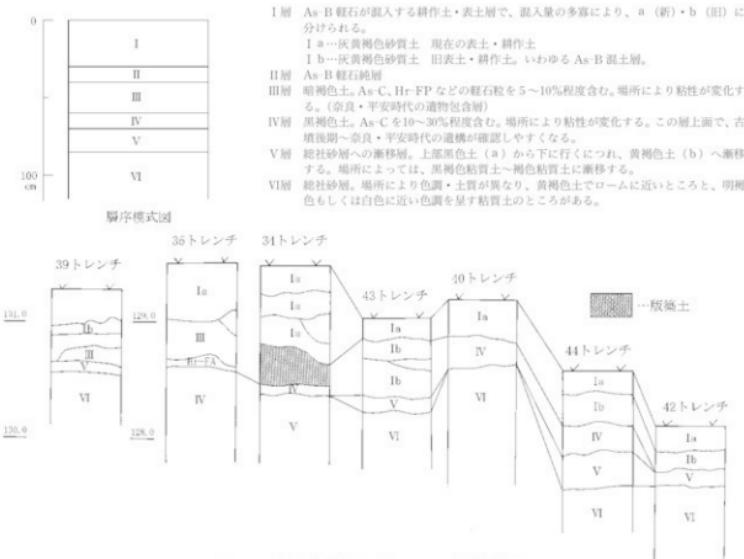


Fig. 6 基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図

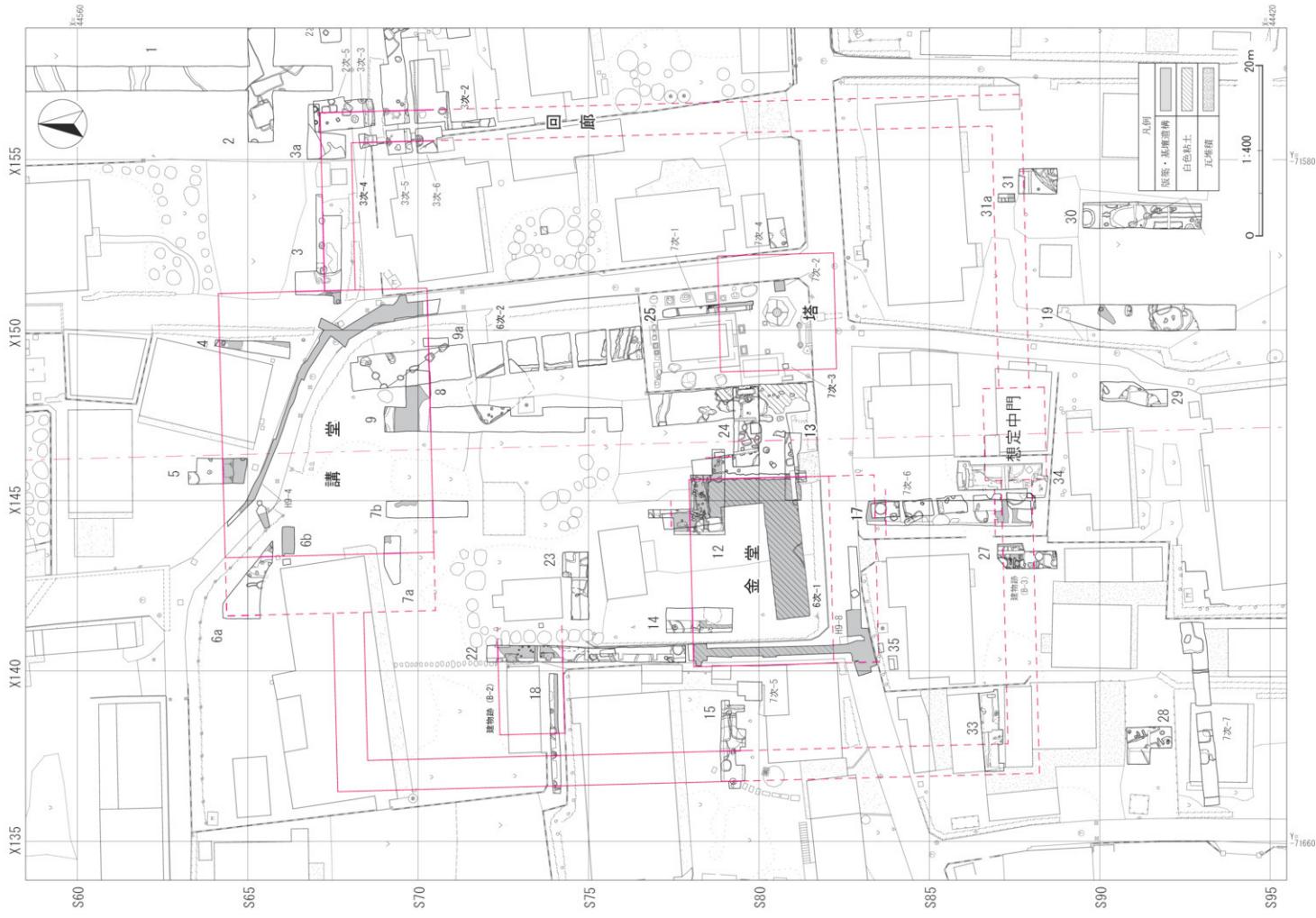


Fig. 7 平成24年度主要伽藍調査合体図

V 伽藍の調査

1回廊

(1) これまでの調査

昭和50年度調査（第2次調査） 昭和50年度の第2次調査（以下、2次）ではFトレンチの調査においてP1とP4の間に長径20~30cmの川原石を3個検出している（前橋市教委1976）。

昭和51年度調査（第3次調査） 昭和51年度の第3次調査（以下、3次）では2次のFトレンチの南側で、礎石群Aが発見された（前橋市教委1977）。

平成18年度調査 講堂東側で北面回廊の北側柱列と思われる礎石据付痕を3ヵ所検出した。また、2・3次の検討を行った結果、3次で検出されていた「礎石群B」が東面回廊となり、北面回廊につながることが分かった。規模については、講堂の掘り込み地業から推定される中軸線を中心に、北・東面回廊を西に折り返し、回廊の東西規模を72.6m（242尺）と推定した（前橋市教委2007）。

平成19年度調査 西面および南面回廊の検出を目的とした調査を行い、西面回廊については2ヵ所の調査区（15・18トレンチ）から礎石据付痕が確認され、一部で基壇版築も検出された。これにより回廊の東西規模は79.7mであることが判明し、平成18年度調査時に想定したよりも大きくなることが分かった。南面回廊については、確実な遺構は確認できなかったものの、2ヵ所でその候補となる遺構が確認された。塔の南を調査した19トレンチで確認された版築状の土層と、その北西に位置し、金堂の南側を調査した17トレンチから検出された版築土（B-3号建物跡）である。この調査段階では、伽藍全体（講堂前面の空間と金堂・塔前面の空間）のバランスから、19トレンチの位置に南面回廊がくる可能性が高いと推定された（前橋市教委2009）。

平成20年度調査 南面回廊の検出を目的とした調査を行い、昨年度19トレンチで検出された版築状土層をもとに推測された南面回廊のライン（以下、19年度推定ライン）に調査区を3ヵ所設定した（28~30トレンチ）が、回廊に関連する遺構は検出されず、この推定線上に回廊の存在を考えるのは難しくなった。また、昨年度金堂南側で検出したB-3号建物跡の範囲確認を27トレンチで行い、17トレンチで検出された版築土のつづきが確認され、さらに西側に延びることが判明し、この建物跡が南面回廊である可能性が高くなつたため、27トレンチの東、約40mの地点に31・31aトレンチを設定し調査した。31aトレンチで版築土が検出された。これによりB-3号建物跡が南面回廊である可能性が非常に高くなつた。このライン上に南面回廊を復元した場合、回廊の南北規模は82.4mとなる（前橋市教委2010）。

(2) 平成21年度調査の概要

目的 南面回廊の規模を再確認すること、また、構造や造営時期などの確認を目的とし調査を行つた。

調査区の設定 過去に於ける南面回廊想定地への調査は、居住空間の庭先等の調査可能な場所に小さいトレンチを複数設定しその追及が行われてきた。その結果、平成20年度の27トレンチで検出された礎石据付痕と31aトレンチで版築土が検出されたことから、南面回廊の可能性が非常に高くなつた。本年度は、19年度推定ライン上で回廊南西隅を想定して設定した28トレンチの北方12m、飼育小屋と納屋の間に33トレンチ（X137~139、S86~87グリット）を設定し、29m²を調査した。

遺構 検出された遺構は地業跡（積土）、礎石据付痕（根石）P1、溝跡である。地業の範囲は調査区の中央東の北側（X138・139、S86グリット）に多く出土した瓦等の分布を除く部分にL字形に広がる。西側部分は西面回廊の地業部分であり、東西長4.5m、最大幅2.6mを測る。西面回廊は基本層序のIV層であるAs-Cを含む黒褐色土上

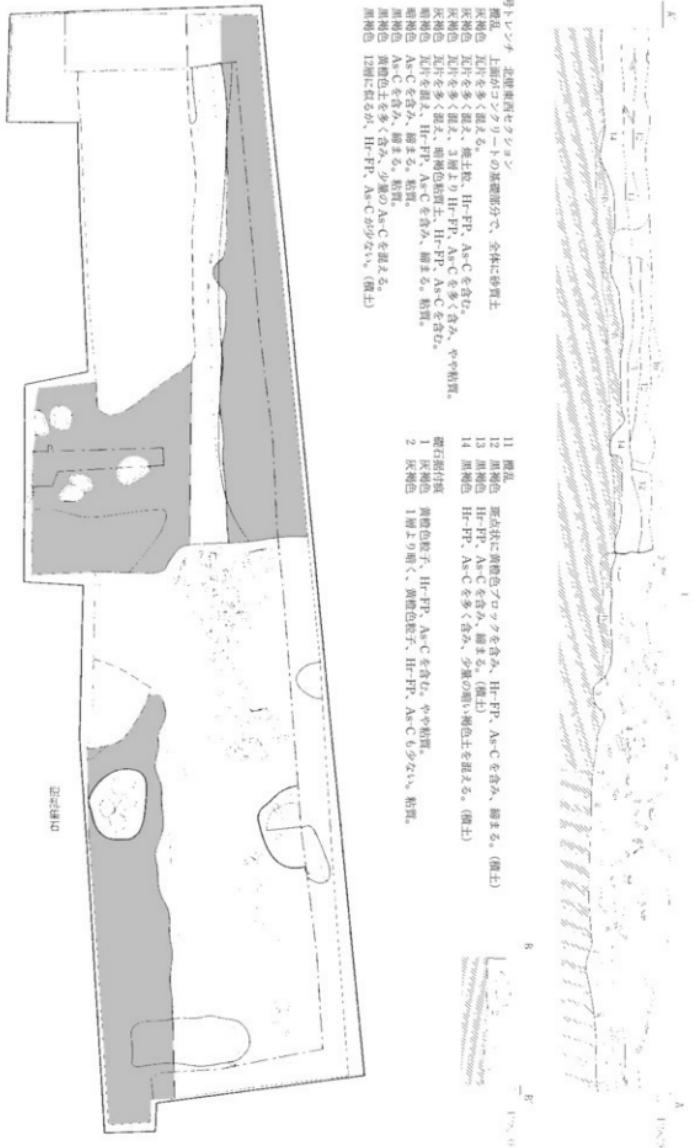


Fig. 8 33号トレンチ調査(北・断面図)

に積土を積み上げている。確認された積土は黒褐色土系の土層を2～4層で40cm前後に積み上げている。積土は縮まっているが丁寧な版築状況は見られず、比較的簡易な作りである。検出された積土の上面は128.10m前後の高さで、伽藍内部とは50～60cmの比高差を測り、垂直に近い積土築成から側面に板状工具があががわれた可能性が考えられるが、その痕跡は見出せなかった。また、外装についても不明である。伽藍内部からは瓦片を主体とし、羽口、坏、須恵器高台椀などが出土し、特にコーナー部に多く瓦片が集中している。

S 87ライン上の東側部分は南面回廊内側の地業であり、東西長4.8m、70cm幅の積土を確認した。積土検出面の黄橙色粘質土であり、レベルは127.95mを測る。後述記載する中門の積土に類似し、積土は10～20cm前後に積み上げている。南面回廊と西面回廊については、南面が黄橙色粘質土、西面が黒褐色土系で築成されている差異が見られた。この結果、この部分は南面回廊西隅と西面回廊南隅の内側部分が直角に交差する部分の地業と確認された。

礎石据付痕（根石）はX138、S87グリットポイント付近に検出され、回廊南西部の隅部に位置する。確認された川原石は計6個である。P₁では5石が検出され、20～25cm代の扁平な川原石を90cm前後の円形の周縁部にやや内傾させて配している。深さは10cm程度である。P₁のすぐ北側にも川原石が設けられている。

西側回廊の積土上面部分には、東西に横切り様に幅30cm最深部で10cmの溝状遺構が走行し、長さ4.5mを測る。掘り込みの内部には少量の瓦片が混入している。

(4) 回廊の構造・規模と時期

今回の調査結果と過年度調査の成果を勘案し、回廊の規模と構造についてまとめる。

平成20年度の27トレンチで検出したB-3号建物跡の礎石据え付け跡（P₁）の位置を南面回廊の北側柱とし、建物幅（梁行の長さ）を3.6mとして南側柱を復元して計測した結果、南北規模（北面回廊北側柱～南面回廊南側柱）は82.4mとした。しかし、礎石据え付け跡1ヶ所のみであるため不確定要素も多分にあり、今後の延長線上での調査を行って、検証する必要があろうした。本年度の調査により、回廊の南面と西面が交わる積土が検出され、南面回廊の検出面は黄橙色粘質土であり、西面は黒褐色土系で築成されている差異が認められた。西面回廊からは東西に横切る溝跡が検出された。礎石据付痕の川原石は5石見つかり、西面回廊の内側の柱筋（15トレンチ・18トレンチで検出された礎石据え付け跡）に一致すると見られる。回廊南西隅の内側礎石据付痕の検出から、南北回廊の規模は81mと推察される。また、回廊幅は、礎石据付痕より2尺ほど張り出すことから回廊建物の柱間12尺に3尺をプラスした18尺の5.4mと考えられる。

2 中 門

(1) これまでの調査

今回34トレンチで検出された中門に係わるとされる施設の西側では、数度の調査が実施されている。

昭和56年調査 昭和56年に実施された第7次調査でD区(Fig. 7 平成21年度主要伽藍調査区全体図の7次-6)と呼称し、金堂跡の規模と回廊の存在を確認する目的で、X145ライン沿いにトレンチ調査を実施しているが、中門に係わる施設は検出されなかつた。

平成19年度調査 金堂南側範囲および金堂南側施設（南面回廊等）の確認のための17トレンチ調査（調査区東側部分は第7次調査区）では、S83グリットラインの南2.9m付近まで金堂に係わると考えられる版築を検出した。さらに調査区の南側で版築土を確認し、基壇建物B-3号建物跡を想定したが、中門に係わる施設は検出されなかつた。

平成20年度調査 19年度推定ラインの中門および南面回廊の検出を目的とした28トレンチ調査では、中門と回廊に関連する遺構は検出されなかつた。同年に検出されたB-3号建物跡の版築層は、31aトレンチで検出され

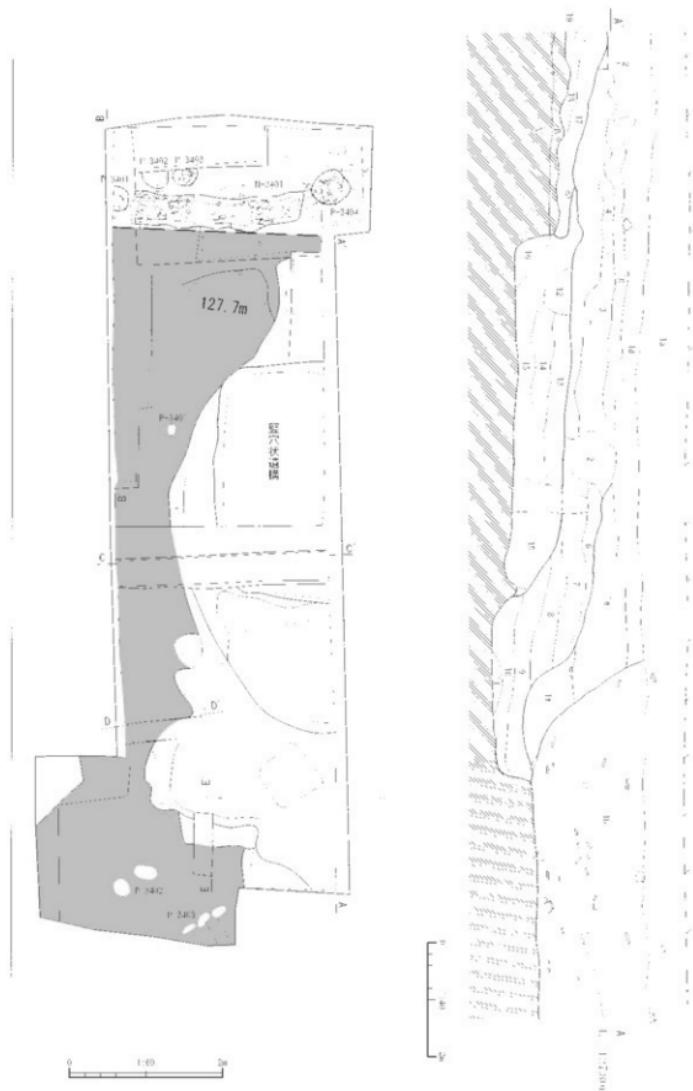
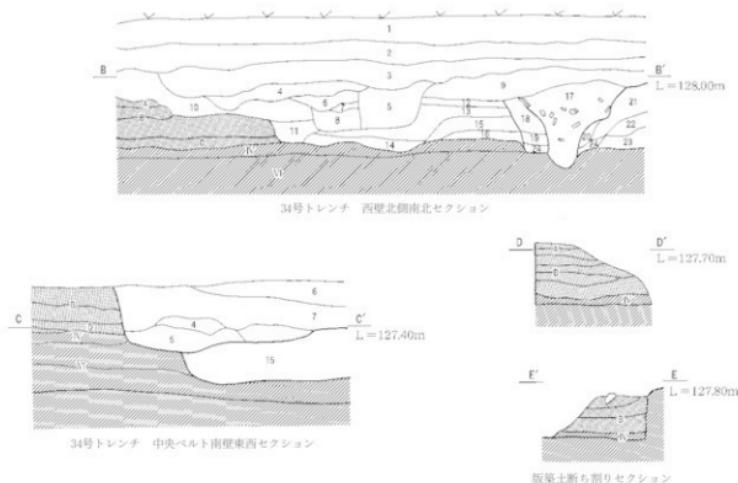


Fig. 9 34トレンチ調査区平・断面図



34号トレンチ 東壁南北セクション

- 1 a 暗褐色 ビニール、竹根、近現代の瓦片等を含む。
- 1 b 暗褐色 ブロック、ビン、瓦片を多く含む。
- 1 c 暗褐色 瓦片、鉄製物等を含む。
- 1 d 暗褐色 瓦片、炭化物等を含む。
- 1 e 暗褐色 4層に似るが、やや締まる。
- 1 f 暗褐色 目砂、礁土、瓦片、陶磁器を含む。
- 1 j 暗褐色 汚記漏れ。
- 2 褐色土
- 3 黒白色土 砂質土で、褐色土との混合土。淡黄色粘土ブロックを含む。
- 4 黑白色土 2層に似るが、淡黄色粘土ブロックを多く含む。
- 5 黑白色土 砂質土で、少量の淡黄色粘土ブロックを含む。
- 6 黑白色土 2層に似る。
- 7 暗褐色土 砂質気味で、灰白色砂質土と淡黄色粘土の小ブロックを含む。
- 8 土褐色 瓦片、礁、少量の灰白色砂質土ブロックを含む。
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色土 にぶい橙色粘土ブロックを含む。
- 11 暗褐色土 にぶい橙色粘土ブロック、黒褐色粘土を含む。
- 12 暗褐色土 淡黄色粘土ブロックを若干混入。
- 13 暗褐色土 砂土を含む。
- 14 暗褐色土 にぶい橙色粘土を含み、やや粘質を帯びる。
- 15 暗褐色土 8層に似る。
- 16 暗褐色土 8層に似るが、粘質が強い。
- 17 褐色土 少量の炭化物、Hr-FA, As-Cを含む。
- 18 褐色土 淡黄色粘土ブロック、As-Cを少量含み、締まる。
- 19 Hr-FA

34号トレンチ 西壁北側南北セクション

- 1~11 暗褐色 近現代の煙草、ジュース缶、瓦片、炭化物を含む。
 - 12 前褐色土 硬く締まる。
 - 13 前褐色土 Hr-FA, As-Cを含み、硬く締まる。
 - 14 前褐色土 As-Cを混入する黒褐色土を含む。
 - 15 前褐色土 版塗の積土のC層に似る。
 - 16 前褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む。
 - 17 底褐色土 瓦片・炭化物・As-Cを含む。
 - 18 前褐色土 19層よりAs-Cを多く含み、やや明るい。
 - 19 前褐色土 As-Cを多く含み、硬く締まる。
 - 20 前褐色土 As-Cを多く含む。
 - 21 褐色土
 - 22 前褐色土 20層に似る。
 - 23 褐色土 微量のAs-Cをふくみ、硬く締まる。
 - 24 褐色土 As-Cを混入する黒褐色土を含む。
 - A 版塗の積土 黄褐色の粘質土
 - B 版塗の積土 底褐色土で、As-C、黒褐色ブロック、黄褐色粒子を含み、締まる。
- D Hr-FA
- 34号トレンチ 中央ベルト南壁東西セクション
- 4~5・15 西壁北側南北セクションの番号に一致
 - 25 前褐色土 微量の黄褐色粒子を含む。
 - B 版塗の積土 底褐色土
- 版塗土断ち割りセクション
- A 版塗の積土 黄褐色の粘質土
 - B 版塗の積土 底褐色土で、5層の分層が可能。

Fig.10 34トレンチ調査区断面図

V 伽藍の調査

た版築層と一連のものと考えられ、南回廊と考えるに至った。

平成21年度調査

目的 中門などの遺構・確認

調査区の設定 日枝神社の南側道路を挟んで、西側に山王庵寺見学者のための駐輪場に設けられている。駐輪場の東・南・西側は宅地となり、北側が道路となっている。このなかで調査可能な場所は第7次調査で調査された西側のトレンチ部分を除く東側部分である。調査区は東と南隣地境界のブロック塀と沿って南北5mの34トレンチを設定し、遺構の追及のため、北東と南西の一部を拡張し、調査面積は17.2m²である。

遺構 調査区の東側はガラス瓶や養蚕道具、近現代の陶器等を含む搅乱が広範囲に及び、現地表から最深部で1.65mまで達し、地山のAs-C軽石を含む黒褐色土を掘り込んでいます。東壁中央付近には、南北3.06m、東西1.4m以上、深さ40cmを測る堅穴状遺構が検出され、砾石が出土しています。中世以降の所産と考えられます。

西壁沿いには、南北9m以上の版築による積土が検出された。上面は黄橙色粘質土（レベル127.75m）で、地山であるAs-C軽石を含む黒褐色土か部分的に残るHr-FAの上面（レベル127.40m前後）を地業底面として30~35cmの厚さで積土が残存する。地業底面のレベルは17・27トレンチで検出された版築の地業底面と同じであり、上面で検出されている黄橙色（粘質）土も、南回廊の33・27・17トレンチ南側の積土でも確認されていることから、一連のものと推察される。

西壁沿いに検出された版築の南北長は、33トレンチで回廊幅を5.4mと推察した長さをはるかに上回ることから、回廊以外の施設が考えられます。さらに34トレンチは伽藍中軸線のすぐ西にあり推定中門が想定される位置にあります。この版築の上面から3ヶ所（P-3401~3403）に川原石が検出されました。P-3401は1石、P-3402は2石、P-3403は3石が検出されました。P-3403はやや小振りの川原石が列状に配され、礎石据付に使用された根石とやや異にしています。

調査区の北側、S-86グリットラインの南40cm付近で瓦の小片を主体とする遺物が東西に分布し、その下から柱穴状と溝状の掘り込みが検出され、北壁の西側に蚕糞桥が設置されていました。溝状の掘り込み（M-3401）は、西壁セクションで幅80cm、深さ70cm前後、断面形はV字形を呈し、瓦片が流れ込んでいます。雨落としか基壇の北側に施された板模もしくは木造基壇の羽目板据付痕の可能性が考えられるが、その痕跡は見出せなかった。柱穴状掘り込みは4ヶ所（P-3404~3407）に検出されたが、基壇に係わるものかは、不明である。

これらの結果から想像をたくましくするとP-3401とP-3402が中門西側の梁行部分に相当する礎石据付痕と想定されます。この柱間は6mの20尺で、伽藍中軸線からは西方に6.3mの21尺を測ります。飛鳥・白鳳時代の中門の規模は2間×3間とされることから伽藍中軸線を軸にシンメトリーの建物を想定すると南北2間の梁行の柱間3m（10尺）の6m（20尺）、東西3間の桁行は6.3mの倍の12.6mの42尺となり、柱間は12.6m÷3の4.2mの14尺になります。中門の身舎は東西12.6m（42尺）、南北6m（20尺）となり、基壇の出を8尺とすると基壇規模は東西17.4m、南北10.8mとなります。

3 各トレンチの状況と検出遺構

35a・bトレンチ (Fig.11 PL.4)

金堂南側範囲の確認のため金堂南西隅に2ヶ所設定し、1.5m²を調査した。金堂に係わる調査は、昭和54年の第6次調査において金堂基壇の東・北縁辺および北東隅部が確認され、これまでの調査を踏まえて平成19年度の調査結果から東西22.0m、南北16.4m以上の基壇規模であることが判明しています。東西北の3辺については範囲がほぼつかめていますが、南側の範囲は明確ではありません。今回の調査では、35aトレンチでは現地表下95cmでAs-C軽石を含む黒褐色土で、35bトレンチでは90cm前後の深さよりCr-FA軽石（平成19年度の17トレンチで

3 各トレンチの状況と検出遺構



Fig.11 35a、35b トレンチ断面図

も確認されている)の堆積が確認されたが、その上層からは金堂に係わる白色粘土や17トレンチで検出されたS83+2.9mラインの版築土は検出されなかった。

36トレンチ 19年度の調査で検出された金堂北側の18トレンチで検出されたB—2号建物跡の東西規模を確認するために調査を実施した。20年度には18トレンチの東側に22トレンチを設定して版築土を確認した結果、南北7.7m、東西10.2m以上の東西棟の建物と想定されました。本年度の調査では、現地表下85cmでAs-C軽石を含む黒褐色土となり、建物に係わる版築土は検出されなかった結果から、B—2号建物の東西規模は12.5m以内と想定されました。

37トレンチ B—2号建物と対象となる建物を想定して調査を実施しました。現地表下90cmで純社砂層となり、その上層からは建物跡の地業に係わる版築土などは検出されませんでした。

VI 寺域の調査

1 これまでの調査

昭和の調査

寺域北側では、昭和49・52・53年度に調査が行われている（1・4・5次調査）。1次調査で塔の北約110mで掘立柱建物が検出され、このときは北門跡と考えられた。4次調査で、この建物が桁行9間・梁行3間の東西棟の建物であることが確認され、僧房もしくは食堂とされた。5次調査では、この建物の南北二面に庇がつくことが確認され、さらに周辺からは山王庵寺下層の遺構と考えられる掘立柱建物群が検出されている。

平成9年度調査

塔心礎の南西100mの地点から寺域南辺の築地跡と推定される版築土が検出された。このときには厚さ30cmの版築層が延長1mにわたって検出されている。

平成18・19年度調査

平成18年度調査で、寺域の北側を区画する可能性のある溝跡を検出した（W-1号溝跡）。平成19年度調査でこの溝の西側延長部を調査したが、溝は途中で途切れる（もしくは走行方向を変える）ことが分かり、これが寺域を区画する遺構である可能性は低くなった。この溝跡の走行方位は、南側に近接する北方建物の方位に類似していることから、この建物との関連性が示唆される。また、寺域南側では19年度調査で、平成9年度に版築土を検出した場所の西側47mの地点に南北トレンチを設定し調査したが、つづきの版築土を検出することはできなかった。

平成20年度調査

寺域の北側の区画施設などの確認のため、伽藍中軸線上で、講堂の北80mの北に40mの南北トレンチを設定したが、寺域を区画する遺構は検出できなかった。寺域南側では平成9年度に版築土を検出した場所の東側18mの地点に南北トレンチを設定し調査したが、つづきの版築土を検出することはできなかった。

2 寺域の調査

伽藍の周辺からは、下水道工事や耕作中に山王庵寺に係わる重要遺物が出土しています。本年度はこれらの出土土地の寺域施設や寺域の区画施設の検出を目的として調査を行った。

①38トレンチ (Fig.12, PL.4)

寺域南西部の調査区で塔心礎より約220mにあり、南北に延長20mのトレンチを設定し、60m²を調査した。過去に宝相華文がつけられた金銅製飾り金具が出土したとされる畑地である。

検出遺構は、トレンチ北方で中世以降の溝跡（W-3801）と古墳時代後期から平安時代の堅穴住居跡8軒（H-41～48）がある。本トレンチ調査により伽藍南西部まで古墳時代後期以降の集落の広がることが確認されたが、寺域の区画施設に係わる遺構などは検出されなかった（VII章参照）。

②39トレンチ (Fig.12, PL.4)

寺域の北西部の調査区で塔心礎より約180～210mにあり、東西に42.5mのトレンチを設定し、128.0m²を調査した。検出遺構は、平安時代の堅穴住居跡6軒（H-49～54）と永楽通宝が出土した中世の土坑墓（D-3901）1基、近世以降の溝跡（W-3901）1条があり、寺域の区画施設に係わる遺構などは検出されなかった（VII章参照）。

③40・41トレンチ (Fig.13, PL.6・7)

寺域の北東部の調査区である。伽藍北方では、僧房もしくは食堂とされる桁行9間・梁行3間で南北二面に庇

2 寺域の調査

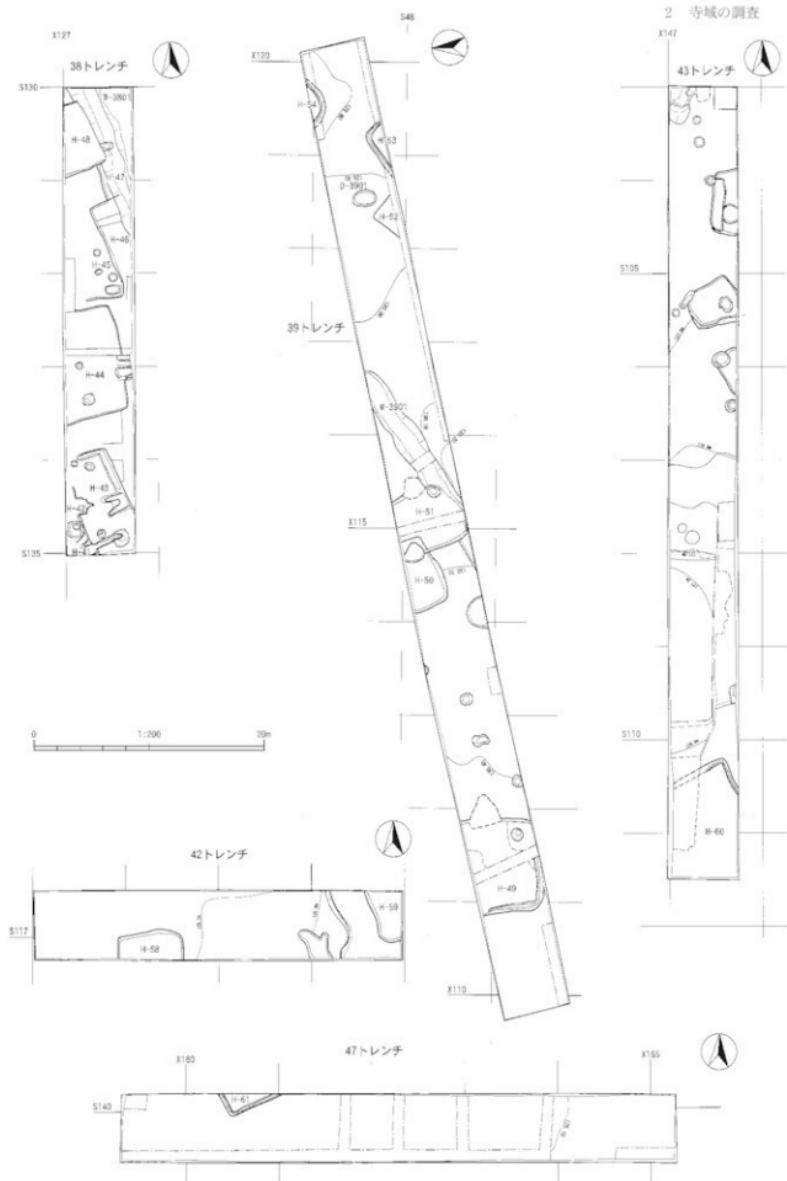


Fig.12 38・39、42～44トレンチ全体図

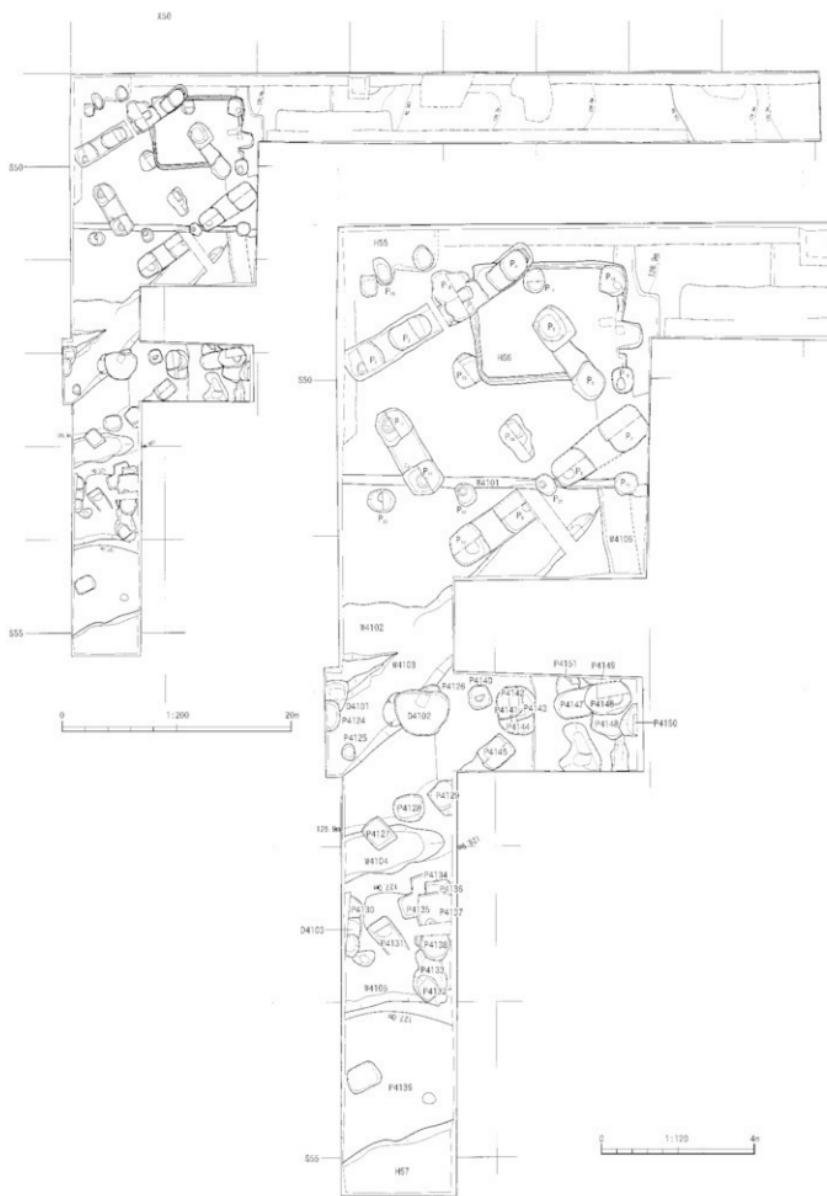


Fig.13 40・41トレンチ全体図

がつく東西棟の建物やさらに周辺からは山王庵寺下層の遺構と考えられる掘立柱建物群が検出されている。この建物群の東方で東西に延長36mの40トレンチ、40トレンチの西端から南北に延長23mの41トレンチを設定し、掘立柱建物跡部分の二ヵ所を拡張し、両者のトレンチ180m²を調査した。

検出遺構は、竪穴住居跡3軒（H—55～57）、掘立柱建物跡2棟（B—5・6号掘立柱建物跡）、隅丸方形の柱穴、切石を伴う土坑2基、溝状遺構等があり、掘立柱建物群の東方への広がりが確認された。

掘立柱建物跡

B—5号掘立柱建物跡 (Fig.14 PL. 6)

位置 40・41トレンチ、拡張区 X166・167、S 49～51グリッド 主軸方向 N—57°—E 規模・形状等 柱穴番号は北西隅から時計回りにP₁～P₁₄と付した。桁行（P₁～P₄・P₇～P₁₀）は北・南柱列で3間、梁行（P₄～P₂・P₁₀～P₁）の東・西柱列も3間の側柱を配し、中央部に束柱（P₁₃・P₁₄）を設ける。桁行3間、梁行3間の規模で、側柱は布掘りの掘り方を有する。桁行の北・南柱列は東西に長い帯状の掘り込みに各々柱穴を壺掘りする。梁行の中央部分（P₅・P₆・P₁₁・P₁₂）の1間は長方形の掘り込みの両端に柱穴を壺掘りする。束柱は単独の壺掘りで、P₁₁とP₃、P₁₂とP₄のライン上の中间に位置する。布掘りの規模は、桁行の北側（P₁～P₄）は長軸長5.65m、幅75～90cm、南側（P₇～P₁₀）の長軸長6.07m、幅90cm前後を測る。梁行の東側（P₄～P₇）の長さ6.03m、西側（P₁₀～P₁）の長さ6.43mを測る。柱間は桁行が1.65mの5.5尺、梁行は1.8mの6尺等間で設計されたと考えられる。※各々の柱穴の計測値はTab. 5を参照。西側梁行の側柱P₁₁・P₁₂は、長軸長2.42m、幅80～90cm、深さ25～35cmの長方形を呈する布掘りの南北両端に壺掘りされる。柱穴は布掘りの掘り込みより23cm前後深く、底面中央部分に浅い掘り込みを設け礎板石として扁平な川原石をほぼ水平レベルに据えている。両石のレベル誤差は2cmである。礎板石の心々は1.80mを測る。柱穴の覆土は突き固められ、非常に硬く締まっている。この部分のみが礎板石を使用して柱受けとすることから西側梁行中央に入り口の施設を設ける姿入りが想定される。出土遺物 P₁の上面から瓦の小片、P₃の上面から須恵器环(1)が出土したが、須恵器环は本遺構に帰属しないと考えられる。重複 56号住居跡、B—5号掘立柱建物跡の3者と重複関係にある。時期 3者の重複関係から8世紀後半代の56号住居跡より古く、B—6号掘立柱建物跡よりも古い寺院創設期前後と考えられる。

B—6号掘立柱建物跡 (Fig.15 PL. 6)

位置 40・41トレンチ、拡張区 X166・167、S 49・51グリッド 主軸方向 N—86°—E 規模・形状等 柱穴番号はB—5号掘立柱建物の柱穴と一部で重複関係にあるので北西隅から時計回りP₁₅～P₂₃と付した。桁行（P₁₅～P₁₈・P₂₉～P₂₃）は、北と南側柱列で3間分が確認され、梁行（P₁₈～P₂₉）は、東側柱列の2間を検出した。西側梁行柱穴列が検出されないことから、桁行はさらに広がり3間以上と推測される。柱間は桁行が2.1mの7尺、梁行は2.7mの9尺等間で設計されたと考えられる。※各々の柱穴の計測値はTab. 6を参照。P₁₅は東西に長いコの字状の掘り込みの東端に壺掘りされていることから西に続く柱穴と長方形の布掘りで連結されている可能性が推察される。出土遺物 なし。重複 55・56号住居跡、B—6号掘立柱建物跡の4者と重複関係にある。本遺構と55号住居跡の新旧関係は、55号住居跡の竪穴袖部で検出されたP₁₅との関係から本遺構が古く、B—5号掘立柱建物跡のP₃との重複から本遺構が新しく、56号住居跡の床下でP₁₇が検出されたことからB—5号掘立柱建物跡が56号住居跡より古い。整理するとB—5号掘立柱建物跡→B—6号掘立柱建物跡→8世紀後半の56号住居跡→9世紀代後半代の55号住居跡となる。時期 56号住居跡が構築された8世紀後半以前らB—5号掘立柱建物跡が構築された寺院創設期前後の間である、8世紀前半～半ばと考えられる。

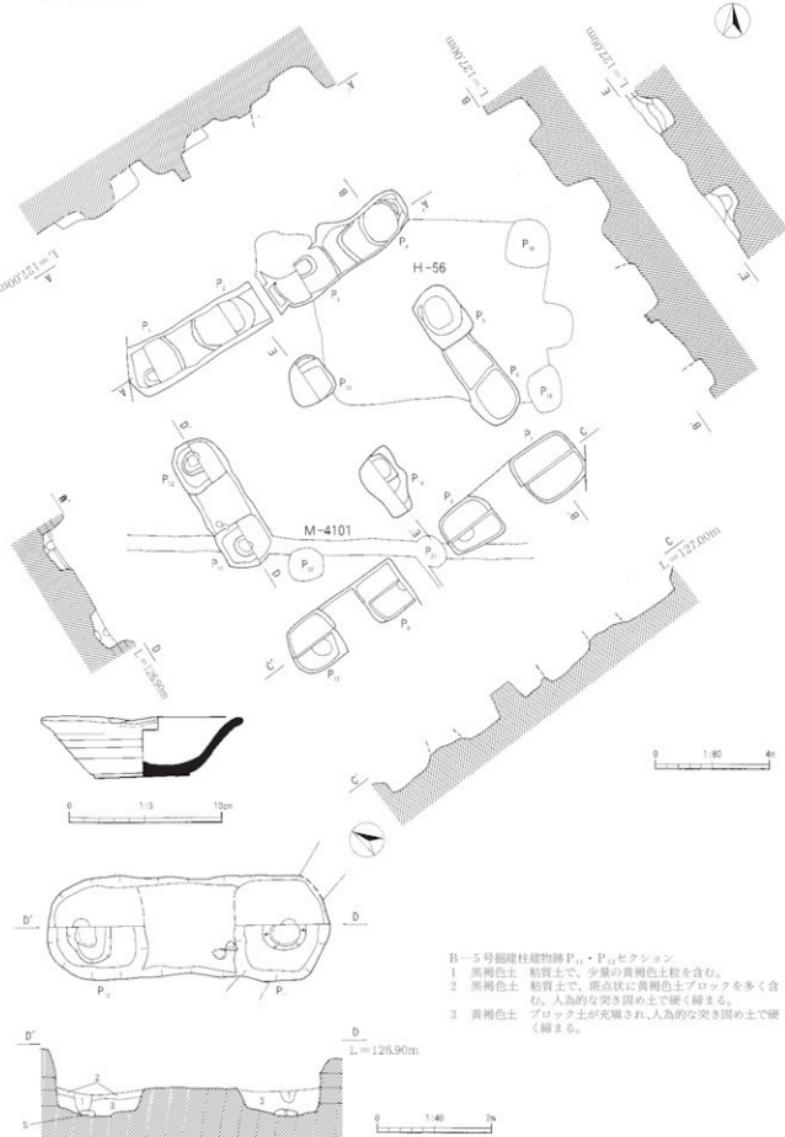


Fig.14 B-5号掘立柱建物跡平・断面図等

Tab. 4 B-5 P₂上面出土遺物観察表

No	器種名	出土 層位	(1)C ①底盤 ②高 ③底盤	(1)測土 ①測土 ②堆成 ③地盤 ④堆存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 环	覆土 ①13.0 ②4.0 ③6.0	①中粒 ②混元 ③灰	④完形	緩やかに内溝する体部下半より直線的に聞く口縁部に移行する。口唇部に片口状の僅みを設ける。底部回転糸切り未調整。	1	

Tab. 5 B-5号掘立柱建物跡柱穴計測表

遺構名	柱穴番号	トレンチ	位置	規模(cm)			形状	出土遺物	備考
				長軸	短軸	深S			
B-5	P 1	41	X166, S 49	(95)	73	59	鷹丸方形	瓦片	削え方がある。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 2	40	X166, S 49	111	65	67	鷹丸方形		P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 3	40	X166, S 49	110	(73)	65	鷹丸方形		H-56～P16に切られる。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 4	40	X167, S 49	115	65	68	正鷹丸方形		H-56に切られる。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 5	40	X167, S 49	103	75	53	鷹丸方形		H-56に切られる。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 6	50	底盤区 X167, S 49・50	89	70	48	正鷹丸方形		H-56とW-6に切られる。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 7	50	底盤区 X167, S 50	110	100	10	前後 鷹丸方形		W-6に切られる。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 8	50	底盤区 X167, S 50	95	80	41	鷹丸方形		W-1に切られる。削え方がある。#
#	P 9	50	底盤区 X167, S 50	(110)	85	42	鷹丸方形		W-1に切られる。削え方がある。#
#	P 10	50	底盤区 X166, S 50・51	90	87	34	方形		削え方がある。P ₁ ～P ₄ と連絡する布掘り
#	P 11	41	X166, S 50・51	89	75	49	鷹丸方形		W-1に切られる。壁板石。P ₁₁ とP ₁₃ を連絡する布掘り
#	P 12	41	X166, S 50・51	78	75	60	方形		壁板石。P ₁₁ とP ₁₃ を連絡する布掘り
#	P 13	41	X166, S 49・50	78	(75)	40	鷹丸方形		H-56に切られる。
#	P 14	50	底盤区 X166, S 50	95	(30)	43	鷹丸方形		

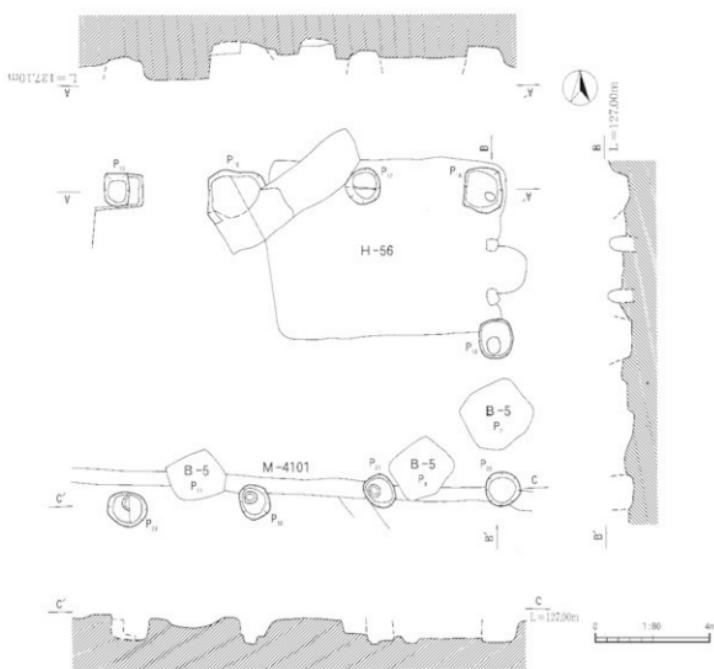


Fig.15 B-6号掘立柱建物跡平・断面図

Tab. 6 B-6号掘立柱建物跡柱穴計測表

遺構名	柱穴番号	トレンチ	位置	規模(cm)			形状	出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ			
B-6	P15	40	X166, S49	60	58	13	方形	布掘り H 35に切られる。	
#	P16	40	X166, S49	94	(82)	51	隅丸方形	B-5のP3を切り、H-56に切られる。	
#	P17	40	X167, S49	60	60	5	隅丸方形	H-56に切られる。	
#	P18	40	X167, S49	77	64	50	隅丸方形	H-56に切られる。	
#	P19	40	X167, S49+50	68	55	48	楕円形	H-56に切られる。削え方がある。	
#	P20	40	X167, S50	60	60	8	円形	W-1とW-6に切られる。	
#	P21	40	X167, S50	58	45	45	楕円形	W-1に切れる。削え方がある。	
#	P22	41	X166, S50	60	50	46	円形	W-1に切られ、削え方がある。	
#	P23	41	X166, S50	72	60	30	円形	削え方がある。	

3 柱穴・土坑・溝跡

柱穴 (Fig.13・16 PL. 7)

調査区内では掘立柱建物跡を除き、28ヶ所に検出され、B-5号掘立柱建物跡の南方からS54ラインの間に集中している。柱穴番号はB-6号掘立柱建物跡の最終番号からの連番とし、番号の頭にトレンチ番号を付した。

P-4124 X166、S52グリッドポイントやや南に位置し、南北長80cm、東西35cm以上、深さ45cmの隅丸方形を呈する。覆土は黄橙色を全体に含み、硬く締まっている。D-4101号土坑が北方上面を掘り込んでいる。遺物は出土しなかった。

P-4125 X166、S52グリッドの西方に位置し、南北長45cm、東西35cm以上、深さ30cmを測る。形状はやや歪んだ楕円形を呈する。底面より5cm浮いて川原石がある。遺物は出土しなかった。

P-4127 X166、S52グリッドの南方に位置し、長軸長68cm、短軸長66cm前後、深さ50cmを測る。形状は方形を呈しする。覆土は硬く突き固められている。出土遺物はない。M-4104号溝と重複するが新旧関係は不明。

P-4128 X166、S52グリッドの南方に位置し、東にP-4129、西にP-4127が隣接する。東西長77cm、南北長70cm前後、深さ30cmを測る円形気味の形状を呈する。遺物は南壁沿いに瓦片と川原石が出土。

P-4129 X166、S52グリッドの南東に位置し、一辺が70cm前後の方形を呈し、深さ60cm前後を測る。調査区の抜張に伴いP-4145と布掘りで連結する可能性がある。

P-4130 X166ライン、S53グリッドに位置し、東半分ほどが調査区に係った。D-4103と南方で重複するが新旧関係は明確でない。南北長は70cm以上、深さ35cmを測り、底面に川原石を柱受けとしている。

P-4131・4132 41トレンチ中央やや南、X166、S53・54グリッドに位置し、東西に柱穴群が隣接し、P-4132は東部分でP-4133と重複する。両柱穴は長さ2.7m、幅65cm前後の溝状の掘り込みで連結されている布掘りの両端に設けられている。北のP-4131は長軸長57cm、短軸長50cmの方形を呈し、深さ81cmを測る。底面は平坦で壁面は垂直気味に立ち上がる。東と西側に沿ってコの字状に溝状の掘り込みが残る。南のP-4132は隅丸方形を呈し、東西長72cm、南北長74cm、深さ68cmを測る。底面はほぼ平坦で中央やや南寄りに平瓦を礎板として水平に掘えている。平瓦は2段積みで、同一個体の平瓦を割って使用している。P-4131の柱据付痕とP-4132の礎板の柱間は2.0m、柱列の主軸はN-34°-Wにとる。時期は明確でないが平瓦を礎板として使用していることから創建期以降と考えられる。両柱穴とも人為的に硬く突き固められた覆土である。

P-4133~4138 X166、S53グリッドに位置し、P-4132~4138が南北に連なって重複する。P-4133はP-4132とP-4138を連結するようあり、P-4134とP-4135は方形を呈する。P-4136の南方の大半はP-4137により切られ、東西60cm、南北(30)cmの隅丸方形を呈し、底面に瓦片が出土。P-4137は80cm以上の辺を測る隅丸方形で、底面には二つの川原石が設けられ、瓦の小片が出土。P-4138は南北に長い楕円形を呈すると思われ、東西75cm、南北(65)cmを測る。

P-4139 X166、S54グリッドの西方に位置し、長軸長88cm、短軸長65cm前後、深さ50cm前後を測る隅丸方形を呈する。覆土は硬く突き固められている。

P-4140 X166、S51・52グリッドに位置し、東にP-4141～4144、西にD-4102号土坑が隣接する。60cm前後のやや歪んだ円形を呈し、底面中央に25cm前後の径で深さ5cmの柱据え方を有する。出土遺物はない。

P-4141～4144 X167、S51・52グリッドに位置し、P-4141～4144の柱穴が重複する。P-4141は東西・南北長が60cm前後の隅丸方形を呈し、プラン確認から一番新しい柱穴。P-4142はP-4141によって切られているので明確な規模・形状は不明であるが、東西長75cm、深さ30cmを測る。P-4143はP-4141・4142の東で重複し、東西長は不明、南北長75cm、深さ30cmを測る。P-4144はP-4141～4143の南方で重複し、南東部分に焼土が分布する。東西長は95cm、深さ15～20cmを測る土坑状の掘り込みである。上面からは瓦片、須恵器高台椀の破片が出土している。

P-4145 X166・167、S52グリッドに位置し、長軸長85cm、短軸長65cm、深さ50cmを測る隅丸方形を呈し、西方に25cm前後の掘り込みが続き、P-4129と布掘り状に連結した可能性が考えられる。

P-4146～4151 X167、S51・52グリッドに位置し、P-4146～4151の柱穴が重複する。P-4146は北にP-4149、西にP-4147、南にP-4148と重複する。東西長1.25m、南北長80cm前後、深さ30cmを測り、東西に長い隅丸方形を呈する。底面の中央やや東に深さ10cmほど掘り込む楕円形の据え方がある。上面で瓦片・灰釉陶器片が出土している。P-4147は東方でP-4146と重複する。形状は東西に長い隅丸方形を呈し、東西長80cm以上、南北長80cm、深さ35cmを測る。覆土中から瓦片が出土。P-4148は隅丸方形を呈すると考えられ、東西長95cm前後、深さ20～25cmを測る。P-4149は部分的な検出で、東西長(1.2)m、深さ40cmを測る。P-4150は拡張区東壁中部分で半分ほどの検出で、南北長80cm、深さ30cm前後を測る。覆土中から土師器壊片が出土。P-4151は東西60cm、南北(45)cm以上、深さ23cmを測り、楕円形を呈する。

*明確ではないが、布掘り状の堀込みを有するP-4131・32が西側柱列、P-4129・45、P-4127が北側柱列とする建物跡が考えられる。

土坑

D-4101号土坑 (Fig.16 PL.7)

41トレンチ X166、S52グリッドポイント周辺 調査区西壁沿いで切石を伴う土坑状の掘り込みを確認し、この部分を幅40×長さ2.8mほど拡張した。東西(57)cm、南北1.30m、深さ30cmを測り、北東部がやや突出する楕円形を呈する。壁は直線的に開口して上方で開く。遺物は東壁沿いに角閃石安山岩の切石が僅かに南傾斜して置かれ、瓦片は底面から5cm前後浮いて出土。M-4103、P-4112と重複し、本遺構が一番新しい。

D-4102号土坑 (Fig.17 PL.7)

41トレンチ X165・166、S51・52グリッドに位置し、東西138cm、南北115cm、深さ60cmを測る歪んだ楕円形を呈する。壁面は直立気味とする。遺物は北壁沿いで中央方向にやや傾斜する角閃石安山岩の切石、瓦小片、埴輪片が掘り込みの上層で出土。西壁には緩やかな落ち込み、北壁で東西方向に深さ10～15cmの皿状の掘り込みP-4126、上面でM-4103が重複する。D-4101号土坑出土の切石と距離は2.2m、上面でのレベル差は25cmを測る。

溝 近現代の暗渠と考えられるM-4101号溝の他に5条を検出した。

M-4101号溝

41トレンチから東の拡張区に及ぶ、X165・166、S50グリッドに位置する。主軸方向はN-92°-Eをとる。規模は東西長8m以上、幅30cmを測り、掘り込み内に礫大の川原石を充填する。近現代の暗渠と考えられる。

M-4102号溝 (Fig.17)

X165・166、S51グリッドに位置し、主軸方向はほぼ東西にとる。規模は東西長(2.1)m以上、幅1.4m前後、深さ30cmを測り、浅い皿状を呈する。遺物は瓦片を主体に若干の須恵器高台椀がある。本遺構が重複するM-4103

VI 寺域の調査

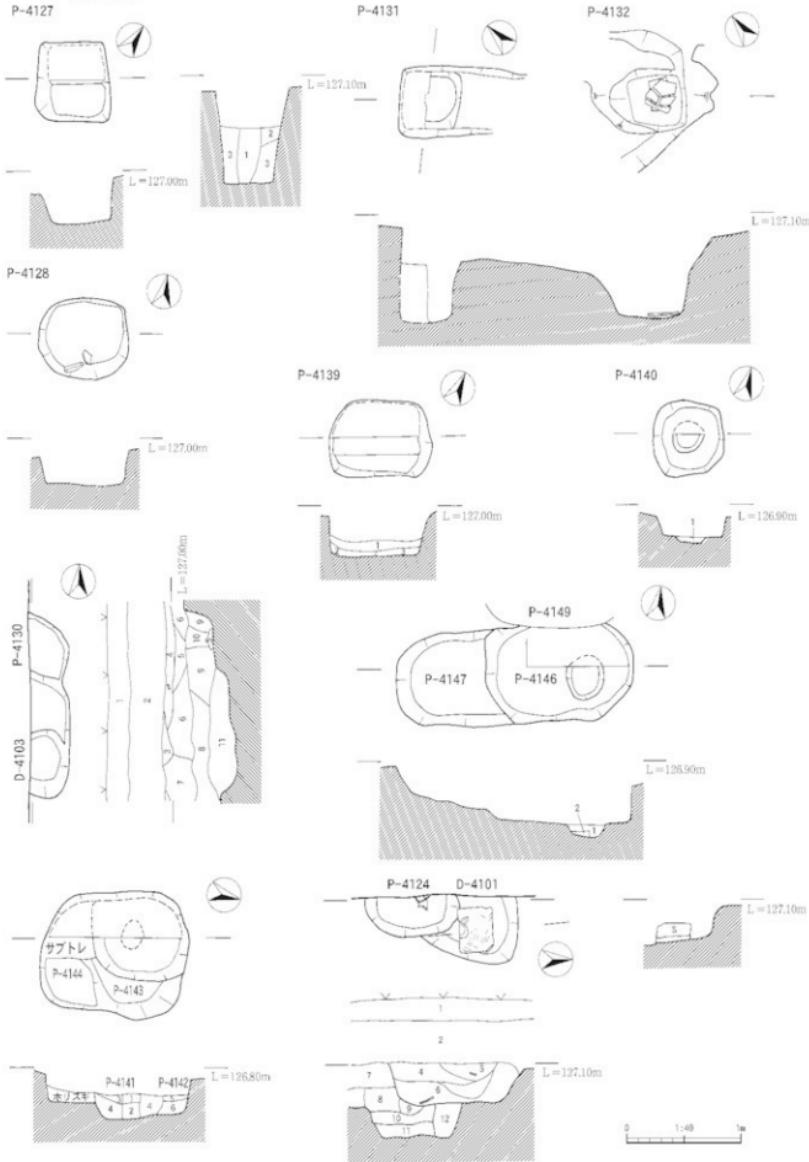
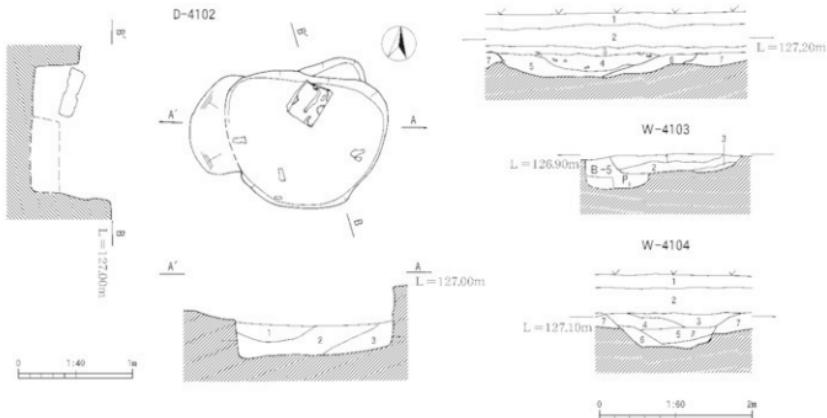


Fig.16 41トレンチ柱穴・土坑平面図

3 柱穴・土坑・溝跡

W-4102, 4103



P-4130、D-4103セクション

- 耕作土
- 褐色土 白色軽石を微量に含む。
- 灰褐色土 粘質土。
- 灰褐色土 粘質土で、少量の黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、4倍より大きめ黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、斑点状に黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、5倍に似るが褐色土粒を含む。
- 灰褐色土 粘質土で、黄褐色子・ブロック、炭化物を含む。
- 灰褐色土 粘質土で、多量の黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、ややソフト。少量の黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、多量の黄褐色ブロックを含み、密に締まる。

P-4131セクション

- 黒褐色土 粘質土で、少量の黄褐色砂質ブロックを含む。柱据え
力。
- 暗褐色土 粘質土で、黄褐色ブロックを混す、非常に硬く締まる。
- 暗褐色土 粘質土で、多量の黄褐色ブロックを混す、非常に硬く
締まる。

P-4139セクション

- 暗褐色土 粘質をおび、黒褐色粘質土ブロック、黄褐色地山ブッ
クを含み、硬く締まる。
- 暗褐色土 1層に似る。非常に硬く突き固められている。
- 暗褐色土 粘質をおび、非常に硬く突き固められ。砂質ブロック
を多量に含む。

W-4102・4103セクション

- 耕作土
- 褐色土 白色軽石を微量に含む。
- 褐色土 2層より強く、As-B を多く含み、微量の As-C, Hr-
FP を混入する。
- 黒褐色土 粘土粒・炭化物を微量に含み、遺物の混入が目立つ。
- 黒褐色土 粘質土。
- 黒褐色土 粘質土で酸化した黄褐色ブロックを多く含む (W-
4103)。
- 褐色土 As-C, Hr-FP を多く含む (W-4103)。

D-4101, P-4124セクション

- 表土 精作土
- 褐色土 白色軽石を微量に含む。
- 灰褐色土 粘質土で、多量の黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、4倍より黄褐色ブロック少ない。
- 灰褐色土 粘質土で、少量の黄褐色ブロックを含む。
- 灰褐色土 粘質土で、黄褐色ブロック、黄褐色粒子を含む。
- 灰褐色土 粘質土で、酸化気味の黄褐色ブロックを少量含む。
- 灰褐色土 全体にソフト。
- 灰褐色土 黄褐色粒子を含み、硬く締まる。
- 灰褐色土 斑点状に黄褐色ブロックを多く含み、硬く締まる。
- 柱記漏れ 柱据付痕か
- 灰褐色土 黄褐色粒子。As-C 軽石、黄褐色粒子を含む。

D-4102セクション

- 暗褐色土 粘質土で、にぶい橙色砂質土の小ブロックを多く含
む。
- 黒褐色土 粘質土で、にぶい橙色砂質土の小ブロックを少量含
む。
- 暗褐色土 粘質土で、にぶい橙色砂質土を多量に含み、硬く締ま
る。

W-4103 B-5, P_sセクション

- 褐色土 微量のAs-C, Hr-FP, 炭化物、少量の黄褐色ブロッ
クを含む。
- 黒褐色土 Hr-FP を微量含み、やや粘質あり。
- 暗褐色土 砂質土。
- 黒褐色土 黄褐色ブロックを多量に含む。部分的に黒褐色ブロッ
クを混入、硬く締まる。

W-4104セクション

- 耕作土
- 褐色土 白色軽石を微量に含む。
- 灰褐色土 粘質土。
- 灰褐色土 多量の黄褐色粒子を含む。
- 灰褐色土 粘質土で、黄褐色粒子、粘土粒・カーボン粒子を含む。
- 灰褐色土 粘質土で、少量の黄褐色粒子を含む。
- 灰褐色土 粘質土で、微量の黄褐色粒子・As-C を含む。

Fig.17 41トレンチ土坑・溝平面図

VI 寺域の調査

号溝を切っている。出土遺物から平安期後半の様相を呈すると考えられる。

M-4103号溝 (Fig.17)

41トレンチ・拡張区、X165・166、S51・52グリッドに位置する。主軸方向はN-47°-Eをとり、規模は東西長9.8m以上、幅1.7~1.8cm、深さ25cm前後を測り、浅い皿状の掘込みを呈する。底面は緩やかな東傾斜する。遺物は僅かであるが須恵器高台椀がある。M-4102号溝と重複し、本遺構が古く、B-5号掘立柱建物跡より新しい8世紀後半以降と考えられる。

M-4104号溝 (Fig.46)

X165、S53グリッドラインに位置し、主軸方向はN-80°-Eにとる。規模は東西長2.6m以上、幅1.7m、西壁で深さ40cmを測り、東端は丸く突出気味となる。堀込みは浅い逆台形を呈する。遺物は須恵器高台椀・灰釉陶器等が出土。P-4127と重複するが新旧関係は不明であるが、

M-4105号溝

X166、S53・54グリッドに位置し、主軸方向はN-77°-Eにとる。南辺は20~30cm程の段を生じているが、北辺は緩やかな南傾斜となり、底面は東傾斜する。規模は幅1.2mを測る。

M-4106号溝 (Fig.46)

X167、S49~51グリッドに位置し、主軸方向はN-6°-Wにとる。H-56号住居跡の南東隅、B-5・6号掘立柱建物跡と重複するが、当溝跡が新しい。西辺は底面と20cm前後の段差を生じているが、東辺は不明瞭である。規模は幅80cm前後と測り、須恵器壺・須恵器高台椀等が出土。

④42トレンチ (Fig.12)

寺域の南東で、塔心礎より210mにあり、東西方向のトレンチを16m設定し、48m²を調査した。昭和36年6月、下水道工事中に発見された綠釉陶器（国指定重要文化財）が出土した地点の南方に隣接する。検出遺構は、9世紀代の竪穴住居跡2軒（H-58・59）がある。寺域の区画施設に係わる遺構などは検出されなかった（VIII章参照）。

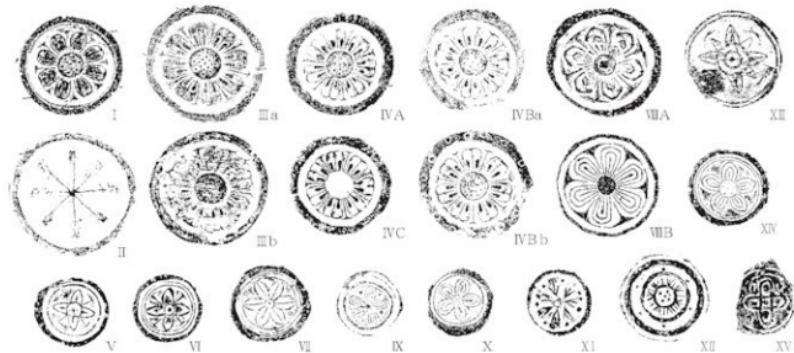
⑤43トレンチ (Fig.12)

伽藍中軸線上の南大門などの遺構を確認するために推定中門の南方に南北のトレンチを34m設定し、102m²を調査した。検出遺構は、近世の竪穴状遺構3基とトレンチ南方で6世紀後半代の竪穴住居跡1軒（H-60）である。寺域の区画施設に係わる遺構などは検出されなかった（VIII章参照）。

⑥44トレンチ (Fig.12)

寺域の東南東で、心礎より240mにあり、過去に銅椀が出土したとされる付近にあたる。東西方向のトレンチを25m設定し、75m²を調査した。検出遺構は、7世紀前半代の竪穴住居跡1軒（H-61）のみであった。寺域の区画施設に係わる遺構などは検出されなかった（VIII章参照）。

VII 出土瓦



(IX・X・XIVは同様例を「史跡上野国分寺跡」から転載)



重弧紋の分類

- ① 平瓦凸面
N. 繩目
K. (格子)スリ消
- ② 瓦当施設法など
A. 直接施紋
B. 瓦当用粘土付加
C. 瓦当用粘土付加のため、
平瓦に刻み目
D. 頸部隆起線紋
F. 一枚作り
- ③ その他
g. 段頸
l. 分類基準が同一の二者の
うち大きなもの

瓦当紋様は、I. 刃物による削り仕上げ、II・III. 押し引き、IV～IX. 型押し、X. 手書きである。

(V・VI・VII・IXは「史跡上野国分寺跡」から同紋・同範例を転載)

Tab. 7 出土軒瓦一覧

1 はじめに

寺域確認調査も4年目を迎えた。発掘調査の主眼は(1)中門および南回廊の確定、(2)寺域外郭施設の調査におかれた。

今年度の出土瓦の総量はパンコンテナー30箱に満たない。出土場所では、中門および南回廊の調査区(33,34トレンチ)が最も多かったが、遺構の残り方を反映して細片となつたものが多い。

寺域外郭施設の検出のために7本のトレンチ(35~44トレンチ)が調査された。そのほとんどの調査区では瓦の出土量は極僅かであった。

その中で90m²に満たない調査面積であるが、41トレンチでは411片の瓦の出土量があった。この場所は昭和53年の第5次調査で縦柱の掘立柱建物(3×3間、B-1・2と記される)が見つかった場所の東20mほどのところである。ここでは寺以前と考えられる布掘地業された建物(B-5)、8世紀段階の溝(W-4102・4103)、奈良・平安時代の堅穴住居跡(H-55・56)などが調査されている。採集された411片は調査地点がやや寺院の中心をはずれた場所であると言え、山王庵寺の存続した期間の様相を反映しているものと考えられる。

411片の瓦片のそれぞれの瓦の生産地を同定し山王庵寺を考える一助としたい。このこころみは今回がはじめてである。この原因は筆者自身の経験不足によるところが大きい。平成16年から山王庵寺出土瓦の整理作業や安中市秋間資料館所蔵瓦の調査などの積み重ねから、ようやく自信のようなものが出来、試みようとするものである。瓦片の产地同定は「第6次調査報告書」に記された文字瓦の分類(丸・平瓦の質的な3分類)を柱としたい。これをもとに若干の補足・修正を加えれば次のようになろうか。

I類 平瓦は桶巻き作りされ、丸瓦は一木模骨による行基式(無段式)である。平瓦では原則、枠板痕(模骨痕)が残り、凸面は木製刻線叩板による打捺痕をナデ消ししたもの(I-A類)と、網巻叩具の打捺による網目痕をそのまま残すもの(I-B類)がある。丸瓦の場合、凸面をすべてナデ消しているので、叩具の痕が消されても残っている場合以外ではA・Bの判断はむずかしい。安中市秋間窯跡群で作られたことが、秋間資料館所蔵資料からわかる。このうち、I-A類は、下秋間八重巻窯探集瓦にみられ、I-B類は、東秋間荷輪窯出土される瓦片にみられる(後頁2-(4)を参照されたい)。

II類 平瓦は、凸型成形台を用いた一枚作り(枠板痕がない)。凸面は、網巻叩具によって打捺されたものと思われるが、削りこみ、ナデ仕上げされて痕跡が残らない。丸瓦は一木模骨による行基式(無段式)である。山王庵寺出土軒丸瓦(軒丸瓦V式・VII式など)の上野国分寺同範瓦例から、吉井・藤岡方面で生産されたと考えられる。

III類 平瓦は、凸型成形台を用いて一枚作りされる。(II類平瓦成形台との違いは、III類では側面及び狭端木口面が壁状に作られている)丸瓦は、行基式(無段式)と玉縁式(有段式)の両者があるものと思われる。「放光寺」「天長八」などの墨書き銘瓦、「方光」の木印瓦などがある。安中市秋間窯跡群で作られる。

その他 笠懸窯窯瓦—みどり市笠懸町に所在した窯跡として知られている。軒丸瓦卯式、打捺板文字銘瓦「園田」、刻印文字銘瓦「山田」「井」などの出土例が、笠懸窯跡として知られている。平瓦では木製・刻線叩打具痕が、不定方向に打たれたものや整ってない網目痕が残る瓦などの出土がある。丸瓦は一木模骨で玉縁式(有段式)、行基式(無段式)があるようだが、山王庵寺出土例からは、はっきりわからない。橙色、厚手のものが目立つ。

小塚窯—高崎市寺尾町に所在した瓦窯産。瓦は丸・平瓦ともに製作台など不明な点が多々ある。蕎麦の如き織維痕を凹面に残す特徴がある。灰色、薄手が1つの特徴か。

上記がこれまで見てきた山王庵寺の瓦である(註1)。41トレンチ出土の411片を分類した結果は、

I-A類 304点(73.9%)、I-B類 10点(2.43%)、II類 14点(3.4%)、III類 84点(19.95%)、笠懸窯系 1点(0.24%)、小塚窯 0点(0%)

という結果になった。出土量の点でⅠ-A・Ⅲ類が最も多い。安中市秋間窯跡群と山王庵寺との間には深いつながりがあるようだ。

(1) 軒瓦 (Fig.18 PL. 9、Tab. 8・9)

Tab. 8・9に見るとおり軒丸瓦23点、軒平瓦21点が軒瓦類の総出土点数である。軒丸瓦では33・34トレンチから20点(出土軒丸瓦の総数の87%)、軒平瓦では12点(同約60%)が出土している。この調査では中門跡・南回廊とともに造構の保存状況が悪かった。このためか瓦片の多くが細片である。

細片の多い軒瓦類の中で瓦当面が完形に近いⅠ式軒丸瓦(素弁八弁蓮華紋)が1点出土した。この軒瓦籠は、木村捷三郎氏の瓦範分類^(注2)のB型であることはすでに報告したところである。Ⅰは、瓦当面外縁部右上から右下にかけて外周部分が1段高く残る。恐らくこれが、瓦籠の端を写しとっているものと思う。計測可能な部分で直径15.8cmである。

また、右肩外縁部分で接合される丸瓦の木口面が欠損している。この部分では丸瓦の接着面の範傷(斜格子紋のボジ)が残されている。丸瓦の欠損部分に刻み込まれていた接着のための加工傷を写しとったものである。接合される丸瓦木口の加工は19年度調査報告で記した^(注3)。この軒瓦では丸瓦の接合部側面はヘラ削りされている。他のⅠ式軒丸瓦に比較してやや厚手に作られている(瓦当厚3.0cm)。暗灰褐色、強く焼きあがる。なお、瓦当裏面および側面下半に翫型が使われたのではないかと思われる痕跡がある。別項で紹介したい。

今回出土の軒丸瓦總出土例のなかで前述のⅠ式とⅠ式の小片1点、Ⅱ式の小片1点を除けば、すべて複弁蓮華紋の軒丸瓦(Ⅲ・Ⅳ式)である。

Ⅲ式は中門と南回廊のトレンチで3点(13%)、Ⅳ式は14点(60%)であった。2は中房の直徑と蓮子の配置からⅢ式であることがわかる。34トレンチからの出土である。33・34トレンチで各1点が出土している。多量に砂粒を混えているが瓦製作時に精製された粘土が用いられている。範傷は破片全面に及んでいる。

3はⅣ式最大の破片である。ⅣB式である。細砂粒を含み表面は灰白色に仕上がっている。これはⅣB式の特徴でもある。Tab. 7に見るとおり南回廊に使われただろう軒瓦はⅣA式を中心とした複弁蓮華紋の軒丸瓦であった。資料の残り具合は、けっして良好とはいえないが、33・34トレンチが回廊西南隅・中門の調査である。回廊跡を面的に調査できたのは、今回が初めての経験であった。複弁蓮華紋軒丸瓦が回廊の主要な瓦であったと証明できたことになろう。

なお、今年度の調査では、軒丸瓦Ⅴ式以降の出土はなかった。

軒平瓦では、4が素紋段頸付軒平瓦(Ig式)である。平瓦部は桶巻作りされ、粘土円筒を分割するまえに粘土円筒広面に2本の粘土紐を貼り付けて幅5.0~7.0cm、深さ1.4cmほどの段頸を形成する。分割後・瓦当面を整形し頸部側面を2面に整えている。暗灰色、胎土に大粒の砂粒を混ぜるが高温で焼かれ歪みが生じている。40トレンチからの出土。

5はIIKC式(三重弧紋軒平瓦)である。山王庵寺では、IICKB-1式(瓦当用粘土を貼り加え回転台を用いて押し引き施紋した三重弧紋)の出土が最も多くIICKC式はIICKB-1式とともに用いられた軒平瓦である。複弁蓮華紋軒丸瓦(Ⅲ・Ⅳ式)と組み合って使われたと考えている。複弁軒丸瓦のうちでも、ⅣB式は、丸瓦の接合時に接着面に刻みを入れて、接合の助けとしている。5の場合、重弧紋の最下段の欠落部は瓦当面に重弧紋を押し引くために貼り加えられた部分である。粘土が剥離して、桶巻された粘土円筒の素地が出ていている。この部分に瓦当用粘土の接着の工夫である刻線が残っている。IICKC式は軒丸瓦ⅣB式(丸瓦接合部に籠による刻線がある)と同じグループのものである^(注4)。すくなくとも製作された工房は同じであったろう。安中市秋間窯跡群所蔵の八重巻窯採集瓦に両者はある。淡橙灰色に焼き上がる。胎土中に白色、茶黒色の粘土粒子を含む。33トレンチ出土。今回の調査では重弧紋IICKB-1式(IICKC式を含む)は軒丸瓦Ⅲ・Ⅳ式とともに回廊の主要な軒平瓦であった。

VII 出土瓦

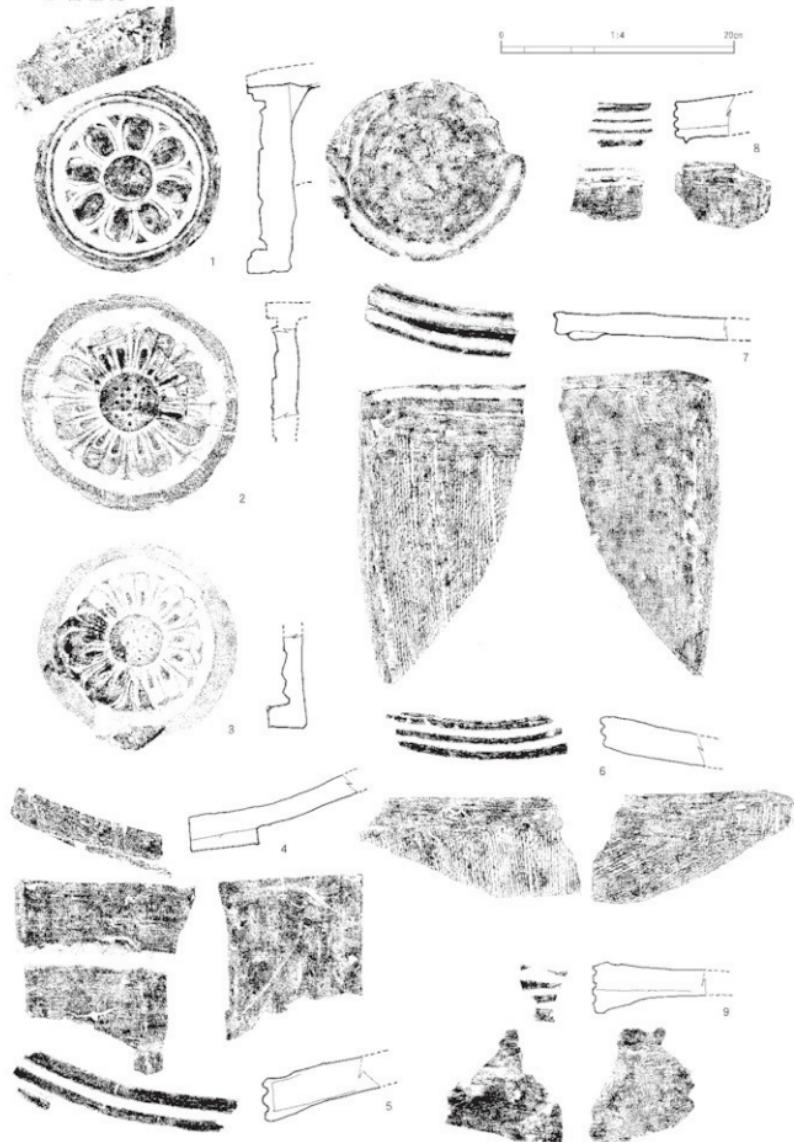


Fig.18 軒瓦

Tab. 8 平成21年度調査出土軒丸瓦分類集計表

	33トレ (中門跡)	34トレ (南回廊)	35トレ (金堂南側)	40トレ (寺域北側)	41トレ (寺域北側)	合 計	備 考
I式	1	1				2	
II	1					1	
III a		1				1	
III b							
III	1	1				2	
IV A	4	5	1	1		11	
IV Ba	1					1	
IV Bb							17 (74%)
IV B							
IV	2	2			1	5	
接合式系							
一本作り系							
合計	10	10	1	1	1	23	

Tab. 9 平成21年度調査出土軒平瓦分類集計表

	33トレ (中門跡)	34トレ (南回廊)	35トレ (金堂南側)	40トレ (寺域北側)	41トレ (寺域北側)	合 計	備 考
I式							
Ig				1		1	
II NA							
II NB-1	1						
II NB-2					1		
II NF-1							
II NF-2					2	2	
II KA							
II KB-1	3	3		1		7	(33.3%) HKC 2点を含む
II KB-2						0	
II KD							
II KDg							
II (N or K)	3				1	4	
III NF					1	1	
III KD-1					1	1	
III KD-2							
(II or III) KD		2			2	4	
不明							
接合式系							
一本作り系							
合計	7	5		2	7	21	

6は一枚作りされた軒平瓦で縦方向の罫目打捺痕が残る。瓦当面に三重弧紋を押し引きする (II NF-2式)。罫目一枚作りされた軒平瓦は、次の7と同様、丸・平瓦の分類のⅢ類に当たる。瓦当面寄りの凹凸両面を横ナデし、罫目や布目を消しているから、瓦当紋の施紋に必要な粘土を貼り加えているかもしれない。凹面の布目に棒板痕はない。灰白色、均質の粘土が用いられている。41トレーンチ出土。

7も丸・平瓦の分類のⅢ類に当たる。6の場合と異なり広端凸面にだけ粘土を貼り加え、顎とも言えない粘土帶をつくる。広端面の二重の弧線とこの粘土帶から軒平瓦であることは間違いない。Ⅲ類の平瓦の成形台は、側面と狭木口面とが壁となっている。成形台には布をかぶせて平瓦となる粘土板との剥離材とするが、成形台の壁の部分に被さる布は粘土の重さを受けて断面が丸くなる。7は左側が残る破片であるがその横断面は丸い。この軒平瓦の重弧紋は通常の櫛状の押し引き具によって施紋されたものではなく、指で二重弧紋をつけたらしい。平瓦凸面に貼り加えられた粘土は、この弧線より0.8cmほど奥まって弧状の高まりとなっている。新種の軒平瓦と

VII 出土瓦

して登録しなければならないものかもしれないが、過去に二重弧紋軒平瓦は山王庵寺には存在しないとした経緯がある(註5)。極く希少な例であり最下段の弧線上の高まりを一つの弧紋として考えて一枚作り綱目三重弧紋(II NF-2)とすることにした。均質な細かい粘土が用いられて灰白色に焼き上がっている。41トレンチからの出土である。

8・9は四重弧紋軒丸瓦(軒平瓦III式)である。8は瓦当面が5.0cmほどしか残っていない。平瓦部凹面には棒板痕が残るので桶巻作りされている。また、凸面側は回転台の回転によって隆起線紋が引き出されて平坦面は横ナデされている。平瓦部の残っている長さが短いため段頭となるか無頭となるかは不明である(III KD式)。施紋は回転台による押し引きである。均質な粘土が用いられて、焼き上がりは白色であるが硬い。41トレンチ溝6からの出土。

9は、昨年度に始めて出土した一枚作り綱目四重弧紋軒平瓦(III NF)である。昨年度の瓦(註4文献、37頁 Fig. 22-4)同様、瓦当断面に見る四本の弧線は台形となっている。昨年出土の破片では平瓦凸面は綱目が残っていた。9では下半までの破片はないが、同質のものとおもわれる。瓦当紋を押し引くため粘土を平瓦部凸面側にだけ附加している。暗灰色、砂粒は少なく細かく均質な粘土が用いられている。41トレンチ出土。

(2) 丸・平瓦

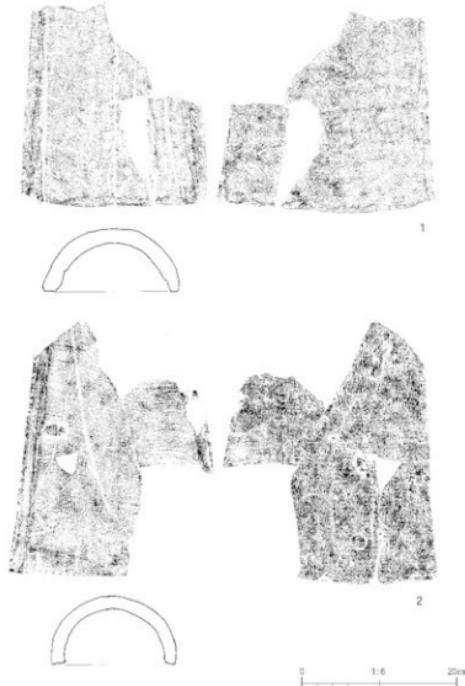


Fig.19 丸瓦

丸瓦 (Fig.19 PL.11) 丸瓦片も長さや幅など全体の形が残る資料はない。そんななかで粘土紐巻き上げ作りされた例(註6)と、分割面に破面と截面が残る二例を作図した。

1は、粘土紐巻き上げによって作られている。型木は一本状のもので、広端面で直径が15.0cmとの太さである。瓦片の残存長は最も長い部分で26.0cmが測れる。型木には分割縫帯があったようで凹面右側縁沿いに溝状の部分が残る。粘土紐は高さ3.0cm・幅2.5cmのものが左から右方向(左廻り)へ巻き上げられている。凹面の右側の部分は粘土紐どうしの重ね合せ目で割れたと思われる。凸面の木口近くは横方向に胴部は縱方向にナデ仕上げをしている。それにもかかわらず粘土紐の幅を思わせる波状痕が見られる。凹面の両側面は面とりを施す。布筒は布の縫い合せ目部分が残るが、かなり使いこままで疲労している。淡橙灰色、良質の粘土が選ばれたようで細かい。砂粒を含むが均質に整えられた胎土である。

41トレンチのP-4132上面の出土。

2の型木も一本状のものである。大き

きは1と同程度のものと思われるが製品の木口面はやや狭い。残存長33.5cmで今年の調査では最大のものである。凸面は回転台によって横ナデ整形されたものらしく叩板の痕跡は残らない。焼成する時であろうか重ね焼きのためと思われる粘土片があちこちに付着している。凹面布筒痕が残る。側面寄りでは幅は一定でないが面取りが施されている。この瓦の場合、側面に破面（割った面）と截面（刃物によって截った面）が残るのが特徴のようだ。丸瓦の分割にあたっては狭端木口から広端木口へと刃物が走ったらしい。この時、分割の目安となるものがあつたと思うがこの破片では分からぬ。粘土円筒の状態で乾燥させ、窯へ持ち込む以前に分割したものだろう。破面は、この時にできたもの。暗灰色で須恵質に硬く焼き上がる。白色、茶黒色の粘土粒子がまじるが良質の粘土である。33トレンチ出土。

平瓦 (Fig.20 PL.10) 大きめの破片3点を紹介する。

1は、41トレンチのP-4132と呼ぶ柱穴で平瓦片を二枚重ねて柱の礎盤として用いていた。二枚の破片は図のように接合され、もともとは一枚の平瓦であった。硬く焼きしまっていて、現状（平瓦一枚分の約54%程が残っている）で、3.9kgの重さがある。一枚分の重さは悠に7kgを超えていたものと思われる。長さは40.0cm前後、狭端幅3.0cm前後、広端幅37.0cmほどの大きさで山王庵寺出土の平瓦では最大級のものである（註7）。

平瓦の凹面では、枠板痕の突出部を削って平滑な面としているため布筒の布目はところどころに残っている程度であるが拓本図ではかなりはっきりと枠板痕がわかる。凸面側は焼成時窓内で被った灰がほぼ全面に付着している。特徴は側面の処理で粘土円筒分割後、小さく凹凸側面を面取状に削る。さらに広端寄りの部分では丸みを付けた削り仕上げが施される。安中市秋間窯跡群、八重巻窯以外の窯で焼かれた可能性が高い。

2は、残存長40.0cmが測れるから、平成18年度に調査されたH-12出土瓦と比較すれば1.0~2.0cm程短い。桶巻き粘土板作りされた標本のような平瓦片である。凸面は回転台の回転によって全面横ナデ仕上げされるが、うつすらと平行線または長方形格子目の刻線叩打具の痕が残る。凹面では全面に糸切り痕と枠板痕、布筒痕が残る。また、側面に沿って分割突端痕かと思われる溝状部分、その右に布筒の縫い合わせ目が残り上半部や左寄りに粘土板の貼り合わせ目痕（Z形）が連弧状に残る。粘土板の貼り合わせ目部分では、右からの粘土板の下に左からの粘土板が潜るが、この粘土板に糸切り痕が残っている。側面および広端面は刃物によって整えられている。橙灰色で硬く焼き上がっている。胎土に砂粒を含む。凸面に見られる表面のハゲ落ちは、窓内で生じた可能性が考えられる。41トレンチ、P-4146出土。

3は、完形ではないが縄目一枚作りされた長さ・幅のわかる平瓦である。しかし、山王庵寺のこれまでの出土瓦とは、やや趣を異にしており、これまでの丸・平瓦の分類にもあてはまらないものかもしれない。長さ38.3cm、最大弦幅（広端近く）25.8cm、同深5.5cm、厚（中央）2.2cmである。形は広端の両端が丸く仕上げられていて、狭端は両側が欠かれている（葺上げ時に割欠いたか）が広端同様、丸く作られていたかもしれない。瓦は凸型成形台を用いて作られたものと思う。凸面を見るとき縦方向に幅2.5cmほどのヘラケズリ面が並び残り縦方向の縄目叩打痕をナデ消した痕がある。恐らく、凸型台上で瓦となる粘土板の厚さを調整するためにヘラケズリが施されたものと思われる。凹面は糸切り痕、布筒痕が残り枠板痕はない。なにより、この瓦の特徴となっているのは両側面寄り、両木口面よりも幅広くケズリ仕上げしていることである。側面では幅5cmほどが2回にわたってケズリ込まれ、広端では幅6.5cm、狭端でも6.0cmほどが削られている。この凹面側の整形の後、両木口・両側面は丁寧にケズリ仕上げされる。平瓦には凸面側に反りが生じているが凹面のケズリ整形と乾燥からのものであろう。胎土に多量の砂粒をまぜている点、丸・平瓦の3分類のうちではII類に最も近い、暗灰色、須恵質に硬く焼き上がる。塔跡の南西方向230m付近に設定した38トレンチ（飾金具出土地（註8））の堅穴住居跡出土である。この点、上野国分寺との関係も無視できないものと思うが、上野国分寺報告書によるかぎり生産窯など判然としない。今後への課題である。

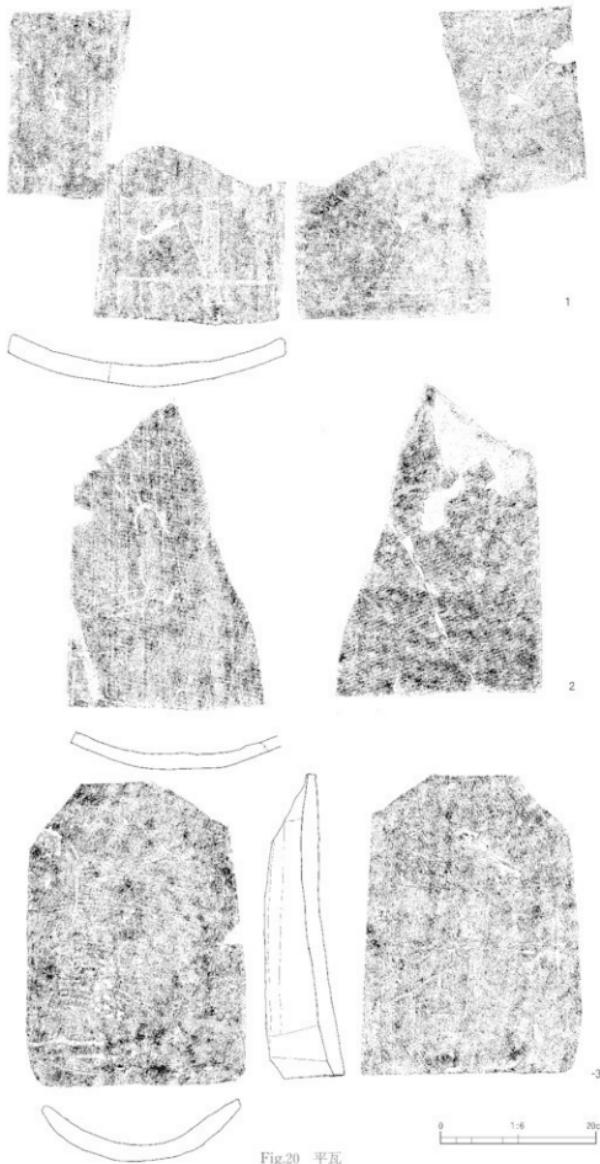


Fig.20 平瓦

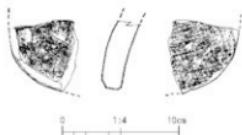


Fig.21 面戸瓦

(3) 道具瓦

鬼瓦等の出土はない。1片ではあるが平成19・20年の調査で平瓦を原体とし隅に大きく丸みをつける瓦片に面戸瓦の可能性を考えた。本年も1点出土している。

面戸瓦 (Fig.21) I類平瓦を原体とした破片である。全体の形がわからないままであるが、丸く作られた部分の凹凸両面がヘラ削りされている。灰褐色で硬く焼き上がる。白色・茶黒色の粘土粒子が見られるので安中市秋間窯産と思われる。41トレンチ出土。

なお、この隅を丸く作る瓦が面戸瓦であるのか、ないのかについての研究の進展はない。

(4) 文字瓦など (Fig.22, PL.12, Tab.10・11)

今年度も若干ながら文字銘瓦の出土があった。すべてで7点あるが、うち2点は單なる窓痕と思われ、5点を図示した。1は「上」である。平成11年の調査で2点が出土している。平瓦凹面に記銘したものと凸面のものとある。書体は同一であろう。2は「七」である。田類とされる丸・平瓦片に多量に見られる文字銘で記銘具も指・窓・刃物と多様である。なお、「上野国分寺跡」では山王庵寺で田類とされる瓦の出土は図録からわかるが、文字銘瓦については「七」は記録されていない。山王庵寺用の瓦だけに記銘された可能性も考えられる。3は「真」である。山王庵寺でも上野国分僧寺でも多量に出土例がある。ただ、現状では山王庵寺出土の点数のほうが多くなった。記銘部位では丸瓦の場合凹面、平瓦の場合凸面に記銘する例が多い。4は丸瓦凹面に記銘されている。側面木口面が残っていないため、図の天地が逆となる可能性もないわけではない。5は「十」である。記号であろう。かなりの数と種類がある。生産地の相違などは今後の問題である。

Tab.10 出土文字瓦一覧

	説	出土場所	記銘具 記銘部位	Figs. PL.s	山王庵寺既出土例(A)	開通道路 出土例(B)	特記事項	3分類 (C)	整理 番号
1	上	21A 135-33T 南回廊	窓 平瓦・凹面	Fig.22 PL.1	11H 2点		側面・端面は、すべて欠損	II	33-19
2	七	21A 135-34T 南回廊	窓 丸瓦・凹面	Fig.22 PL.2	3・4次各1点、6次22点、9H 3点、 11H 7点、19H 11点、20H 10点		同上	III	34-8
3	真	21A 135-34T 南回廊	窓 丸瓦・凹面	Fig.22 PL.3	6次1点、9H 4点、11H 19点、19H 2 点		僧寺24点 「真」字跡は一画不足	II	34-9
4	(未説)	21A 135-34T 南回廊	窓 丸瓦・凹面	Fig.22 PL.4			同上 笠懸?	III	34-7
5	十	21A 135-41T 布施建物	窓 平瓦・凸面	Fig.22 PL.5	4・5・6次各2点、9H 4点、11H 3 点、19H 1点	僧寺100点以上 尼寺	同上	I?	43-6

* (A)～(C)は略号で記した。(A)調査年次、(B)開通道路名、(C)は『第6次報告書』の丸平瓦の3分類である。平成18～20年の報告を参照されたい。

Tab.11 波状紋・鉛紋など

	内容	出土場所	Figs. PL.s	用具及び描かれた場所	備考	3分類 (C)	整理 番号
6	不明	21A 135-33T 南回廊	Fig.22 PL.6	細い棒状の用具? 丸瓦・凸面	側面・端面は欠損 天地は模具の動きから	I	33-14
7	波状紋	21A 135-33T 南回廊	Fig.22 PL.7	須惠器の波状紋の施用具 平瓦・凸面、木口面(窓の上辺)に近い	平瓦凸面に波状紋が残る例 19H・20Hにも出土例がある	I	33-3
8	不明	21A 135-33T 南回廊	Fig.22 PL.8	丸瓦凸面(分割面に近い場所) 計画風	19H出土瓦に比較的似た例がある	I	33-9

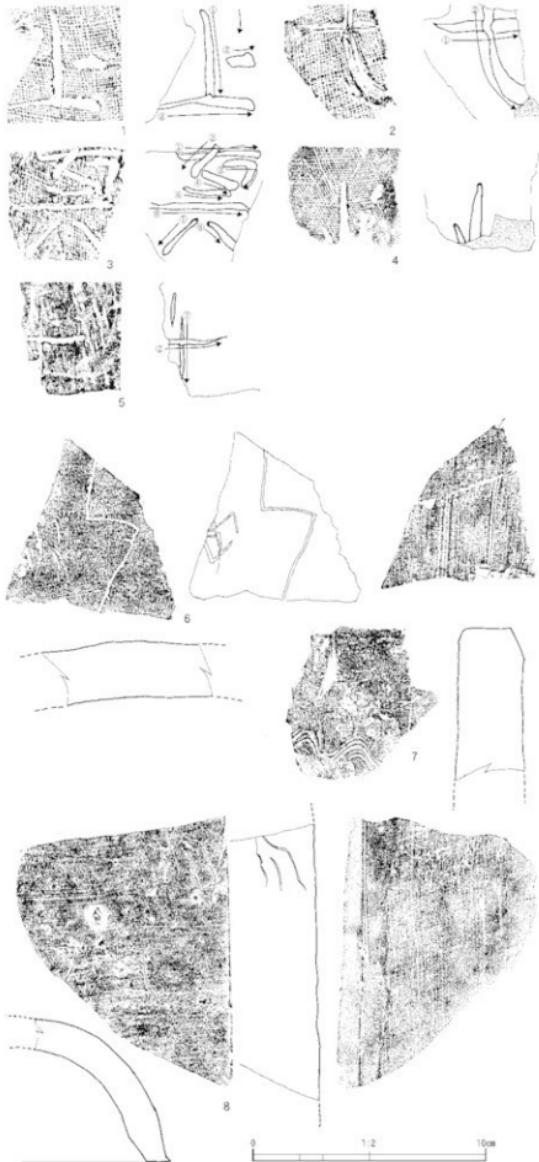


Fig.22 文字瓦など

6は細い棒の先端で描かれたか。瓦は胎土と厚み、焼き上がり具合からI類の平瓦である。描かれたものについては、側面や木口面が残っていないため検討のつけようがない。7も平瓦の小破片である。波状紋の流れから図の天となる部分が狭端の木口面であろう。6と同じような厚みや重量感があり、古い一群の瓦片と考える。8は右側側面が残る丸瓦片である。凸面の側面に近い位置に針書きしたような線が描かれている。場所から推定して粘土円筒の状態(分割前)で描かれたものか。意味は不明である。

(5) B型瓦範と枷

B型瓦範とは木村捷三郎氏が「瓦は、瓦当周縁外側との関連の仕方で三つの型に分けられる。」とし、「瓦当の周縁外側までかかるものをA型、周縁部分まであるものをB型(ただし、瓦当周縁が瓦範の直径より広いこともあり得る)、周縁部を除いて文様部だけのものをC型とする。」とされた(注2)。この分類によって山王庵寺出土の軒丸瓦を見れば、I~IV式、XI・XII式などは、B型瓦範である。この他にもB型瓦範と考えられるものがあるが、いずれも秋間窯跡系の軒丸瓦であるようと思われる。

この中でXII式については松田猛氏の論考もあり(注9)、私

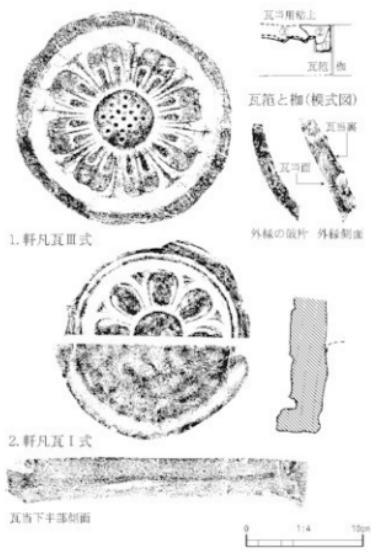


Fig.23 B型瓦箆と枷

Fig.23-1 の素紋直立高縁の破片は上記の条件で見ると外縁の幅は1.2cmほどで、ほぼ一定であり、内区から直角に立ち上がり、1.1cmほどが計れる。直感的ではあるがIII式軒丸瓦の外縁と考えて良い。瓦当裏を見ると、丸瓦を接合した痕跡ではないかと思われる部分が残る。この破片をII式軒丸瓦に重ね合せると、およそ軒丸瓦の左側下半部の破片となる。図の右上にこの破片に見られる粘土紐の痕跡を示した。破片には模式図の①・②にあたる部分の粘土が残っている。これが③の内区蓮華紋へ連なる。①は外縁部分に詰められた粘土紐である。粘土紐は指の腹でおさえられ中央に低く外縁外側が高くなるように押しつぶされている。粘土紐がこのような形になるためには、外側に壁となるもの（枷）があったものと推測する（およそ、瓦箆と枷・瓦箆に詰められる粘土の関係は模式図のように考えられよう）。

ただし、外縁側面には指頭痕と思われる痕などが見られるので、瓦箆と枷の関係がはずれやすいもの（瓦当面下半の丸瓦が接合されない部分に用いられる半枷のようなもの）であったろうと推測する。

このことをもとに今回出土の2（軒丸瓦I式）の瓦当面下半の側面および瓦当裏面について見よう。瓦当面側面の丸瓦が接合されない部分では3.3cmほどの高さがある。瓦当面から2.0cmの位置で弱い段が出来ている。この段と瓦当裏面下半の溝状の痕跡とは、側面に沿ってナデ仕上げされた結果として残っているものに見える。瓦当面から2.0cmほどの位置で生じている段まで枷状のものがあるて、その上部をナデによって仕上げているのではないか（註10）。I（軒丸瓦III式）の場合も、2の場合も状況観察からの推論である。山王庵寺のI～IV式のB型瓦箆の軒丸瓦については枷を用いて作られたと考えてきたが軒丸瓦のIIIの外縁の破片に見られる粘土紐の形は瓦箆外縁部分と枷によって出来た溝状の部分に詰められた結果であると考えられないか。

かって、近藤喬一氏は北部九州の豊前天台寺跡や筑前大分庵寺跡の新羅系軒丸瓦の瓦当面下半部の側面に忍冬唐草紋の紋様があることから、半枷型の存在を考えられたように思う（註11）。山王庵寺の軒丸瓦I・III式の場合、瓦

見として（上野国分寺軒丸瓦M001と山王庵寺III式軒丸瓦では）M001の場合、周縁外側の一段低い鉗状の部分に枷が設置されていたはずであること、山王庵寺III式の場合、枷型が設置されるべき鉗状の部分まで瓦当紋様としていることを述べたことがある（註10）。

ここで、とりあげようとするIは外縁が素紋直立高縁の破片である。山王庵寺の軒丸瓦で素紋直立高縁を持つものにはII・III・IV式と3種類ある。それぞれの特徴を記せば、

II式 外縁の幅は不揃いで0.5～1.2cmほど。直立する部分は内区から丸く曲線で立上る。その周縁の高さは1.0cm以下。

III式 外縁の幅はIII aで0.75～1.25cmではほぼ一定している（III bでは1.9cmほどあるものもある）。直立部分は、ほぼ直角に立ち上がり、1.1cmほどまである。胎土ではII式に似る。

IV式 外縁の幅はIV Aで1.5cm前後、IV Bでは1.7～2.0cmあり、直立する部分は内区から曲線的に丸みをもって立ち上がり、高さは1.0cmほどまである。

VII 出土瓦

当面の製作時、瓦籠の下部にだけ適応する枷型が存在したのではないか。このことを持って一般論とするには、充分な裏付けがさらに必要と思う。

なお、ここで想像される枷の存在は、星野献二氏^(注13)・毛利光俊彦氏^(注14)等が考えたように明確な枷型ではないように思う。

註

- 1 「第6次調査報告書」の丸・平瓦の分類を要約すれば、およそ以下のようになる。「I類は（平瓦の場合）凸面は丁寧に横ナデ調整され、凹面には模骨痕が残る。軒丸では複弁八葉蓮華紋（軒丸瓦V式）。三重強・四重弧紋（軒平瓦II・III式）とおなじである。創建時に廻るものと考えられる。II類は胎土に砂質分が強く、黒灰色で焼きはあまり良くない。（平瓦では）横骨痕は見られない。凹面は不定方向のナデ仕上げである。単弁四葉蓮華紋（軒丸瓦V式）、単弁六葉蓮華紋（軒丸瓦VI式）と同じである。III類は胎土が細かい均質なもので暗灰色ないし、灰白色に焼き上がる。（平瓦では）凸面は繩目か壇に残り、狹端木口付近では横位に繩目が残る。文字銘瓦では「放光寺」「放光」「寺」などがある。II類以降の瓦である。」とする。第6次報告書がI類としたものは今回の分類のI-A類であり、II・III類については、今回報告するものと同じである（（ ）は筆者補足）。
- 2 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」「造瓦と考古学」木村捷三郎先生頌寿記念論文集 1976（昭51）
- 3 前橋市教育委員会「山王庵寺－平成19年度調査報告書－」2009 40頁・62頁一註3
- 4 前橋市教育委員会「山王庵寺－平成20年度調査報告書－」2010 59頁
- 5 前橋市教育委員会「山王庵寺－平成20年度調査報告書－」2007 28頁
この場合は瓦当面に沈線を引いた二重弧紋の存在を否定したので今回の出土瓦とは異なる。
- 6 山王庵寺出土の粘土紐巻上げによる瓦では、平成18年度報告書作成後の整理作業で丸瓦数片が出土していた。この他では平成20年度報告の中で凸面に波状紋を残す（Fig.31-4、54頁）がある。なお、私自身どこかで記したように思うが、直線鎖索紋軒平瓦（軒平瓦I式）の昭和53年の第4次調査出土の瓦を粘土紐作りと記したことがある。これは誤認である。
- 7 山王庵寺出土平瓦の大きさについては、註5の44頁 Tab.10に長さ40.0cmを越す例をあげている。重さについては同書のFig.26-1が6.2kg、Fig.26-2が4.45kg（一部欠損）、Fig.30-5が4.4kgであった。推定重量ではあるが特別に重い瓦と考えられよう。山王庵寺では極まれな出土例と思う。
- 8 註5文献、巻頭図7-1の鉢金具
- 9 松田猛「山王庵寺の性格をめぐって」「群馬県史研究」20 1984
- 10 萩原和彦「山王庵寺出土（致光学）鉄文字瓦をめぐって」「群馬文化」288号 2006
- 11 石川克博「山王庵寺の創建瓦について—素弁八葉蓮華紋軒丸瓦をめぐって」「群馬県史研究」26 1987
石川氏は同書の巻頭の図版写真1-2・3の解説文に「いずれも外区立ち上がり下部にしわがみえる」と解説をしている。山王庵寺軒丸瓦I式の説明である。この時、接合される丸瓦が存在する側の立ち上がりは直立する状況が見られる。瓦籠には、まず外縁に粘土紐が詰められている。粘土紐は瓦当上半では丸瓦の接合によって直立し、下半部は瓦籠と枷型との間で、そのまで残った。外縁部の瓦当面下半直立部のしわは瓦籠外縁に最初に粘土が詰められた結果と考えられないか。
- 12 近藤喬一「瓦の籠と瓦当」「考古学論集」1982
- 13 星野献二 A「鎧瓦製作と分割型」「考古学雑誌」67-2 1981
B「造瓦に関する実証的研究」「古代学研究」10 1953
- 14 毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技術に関する考察」「畿内と東国の大瓦」京都国立博物館 1990

2 瓦整理作業から

(1) 重弧紋軒平瓦 (2)

昨年度、山王庵寺出土の重弧紋軒平瓦（軒平瓦II・III式）について観察分類の記録を記し、なかでもIIKB式の特徴について考えた。出土重弧紋軒平瓦の質的・量的・時間的相違を知ることで具体的に軒丸瓦との組み合わせ関係などを知る手懸りとしたかった。

ここでは、昨年度重弧紋軒平瓦分類の大要を示しただけで終わっていることで、分類の基準とした軒平瓦について、若干の解説をしたい。なお、素紋軒平瓦（I・Ig式）も重弧紋軒平瓦の初現的なものと考え、桶巻き作り軒平瓦の1つとして示した。

I式 (Fig.24-1・2) 素紋軒平瓦である。瓦当厚は1で4.2cm、2で3.5cmと比較的厚い。凹面には布筒・棒板痕などが残る。棒板の幅は、1で2.0cmほどあるが2では高い部分を削りとっている。凸面はすべての例で横ナデ仕上げされる。破片が大きくなることもあって叩具痕は見つけられない。1は図では粘土紐作りではないかと思われる粘土の縞が見られるが左側面寄りに粘土板の合せ目（瓦当面を下にしてS形）が残る。良質の粘土が選ばれて暗灰色・須恵質に焼き上りがっている。1・2以外では橙灰色のものもある。瓦の縦断面を見ると瓦当面付近で最も厚みがあり、平瓦狭端にかけて薄くなるので、桶に巻きつける粘土板の段階で軒瓦用と意識して粘土板は切り出されている。

Ig式 (3・4) 素紋段頸の軒平瓦である。瓦当面は粘土円筒分割後、分割面とともに刃物で整えられている。瓦当厚2.2~2.9cm。製作法に独自の癖がある。桶巻作りされた粘土円筒凸面広端に粘土紐を2段に巻きつける。このため粘土円筒（平瓦本体）と2本の粘土紐の接点は三角形の中空となっている例が多い。3の断面図がそれであり、4では平瓦部分が剥離して頸部分（2本の粘土紐）だけとなったものである。平瓦凹面は棒板痕の高い部分を削り、僅かに布筒痕が残る。凸面は横ナデ仕上げ。頸は2本の粘土紐で作られ長さ5.0~7.0cm、深さ1.5cmほどである。頸部の両端は側面が整形される時に面取状に削り整えられている。灰白色から暗灰色のものが多く、良質の粘土が選ばれ、焼き上がりも硬い。3は4次調査、4は平成11年調査で出土。

II NA式 (5・6) 繩目三重弧紋軒平瓦のうち、桶巻作りされ、粘土円筒分割後、一枚ずつ瓦当紋を押し引きした軒平瓦である。瓦当面の施紋を粘土円筒分割後と考えた理由は、昨年度報告に示したが、5・6とも三本の弧紋の太さに違いが出来ていて瓦当面が水平でない。桶巻する当初から瓦当面となる広端を厚くする点Iに共通する。瓦当面は3.5~3.7cm前後と厚い。平瓦凹面では布筒・棒板・糸切り痕が残る。棒板痕は5で2.5cm、6で2.0cmほど。凸面は5では繩目は叩きしめの円弧を描く。6では繩巻具で叩いた後、平行線紋叩具で叩打している。瓦当紋施紋具の両端は凹面の棒板痕・布筒・凸面の叩目などを押し引きして消しあっている。大粒の白色粘土や茶褐色の粘土が混ざる粗い粘土が用いられ、焼き上がりも橙灰色（レンガ色に近い）のものが一般的である。5・6ともに平成11年度の調査で出土。

II NB-1式 (10) 平瓦部凹面に斜行する繩目痕が消し残されている。重弧紋は回転台上で押し引かれたものと思われる。重弧紋の施紋にあたって、粘土円筒の広端面を包み込むように瓦当用粘土が貼り付けられている。瓦当用粘土は凸面側に厚く凹面側に薄い。平瓦凹面では、瓦当面から4.0cmくらいまで横ナデされ、棒板・布筒・糸切り痕などがナデ消されていない部分に残る。凸面は頸部が曲線状で横ナデ仕上げされる。瓦当面から10.0cmほど奥に朱線が残り、葺上げ時点での茅負からの出がわかる。大粒の砂粒が混じる比較的粗い胎土の瓦である。暗灰色で焼き上がりは良い。6次調査塔跡付近出土。

II NB-2式 (7・8・9) 繩目瓦である。瓦当用粘土を凸面側にだけ貼り加えられる。平瓦凹面に棒板痕が残り、三本の弧紋は瓦当面の中央と端では太さがそろわないで、粘土円筒分割後に瓦当紋様が施されたとかんがえている。瓦当厚は7と9で4.0cmほど。ただし、9の左端では3.2cmとなる。平瓦凹面には8・9では繩目が

VII 出土瓦

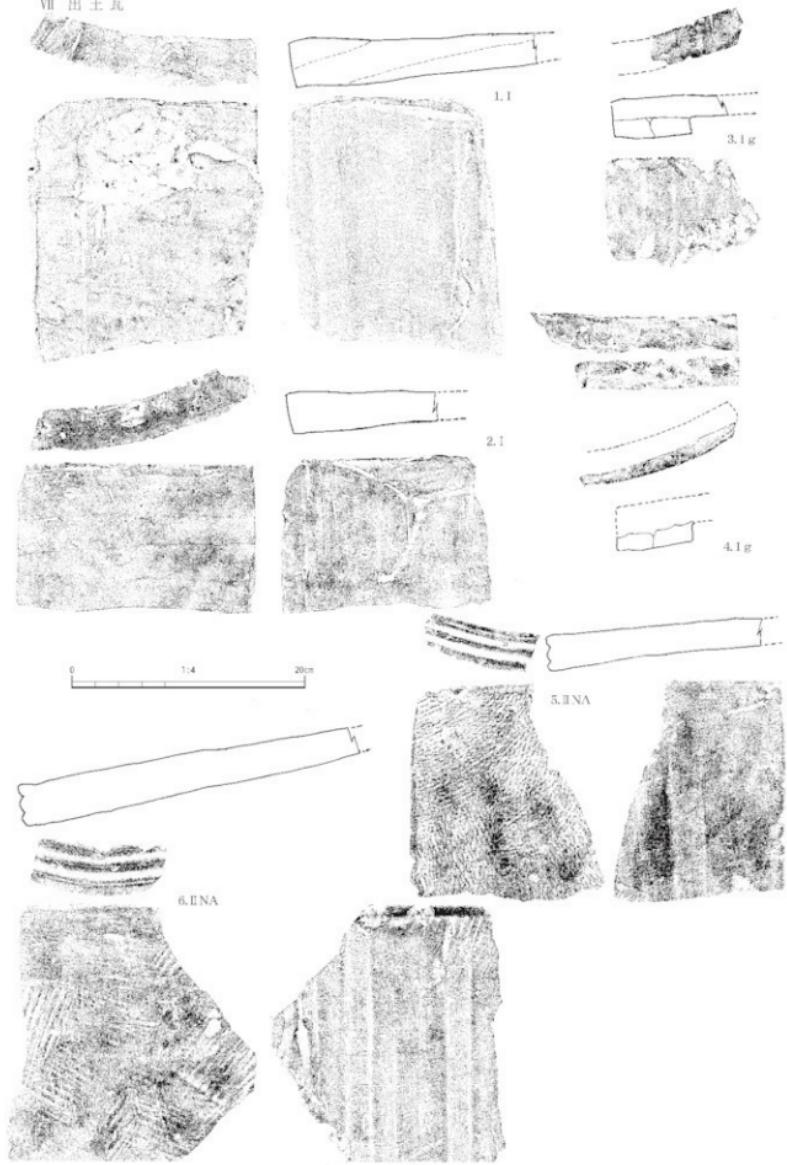


Fig.24 重弧紋軒平瓦 1

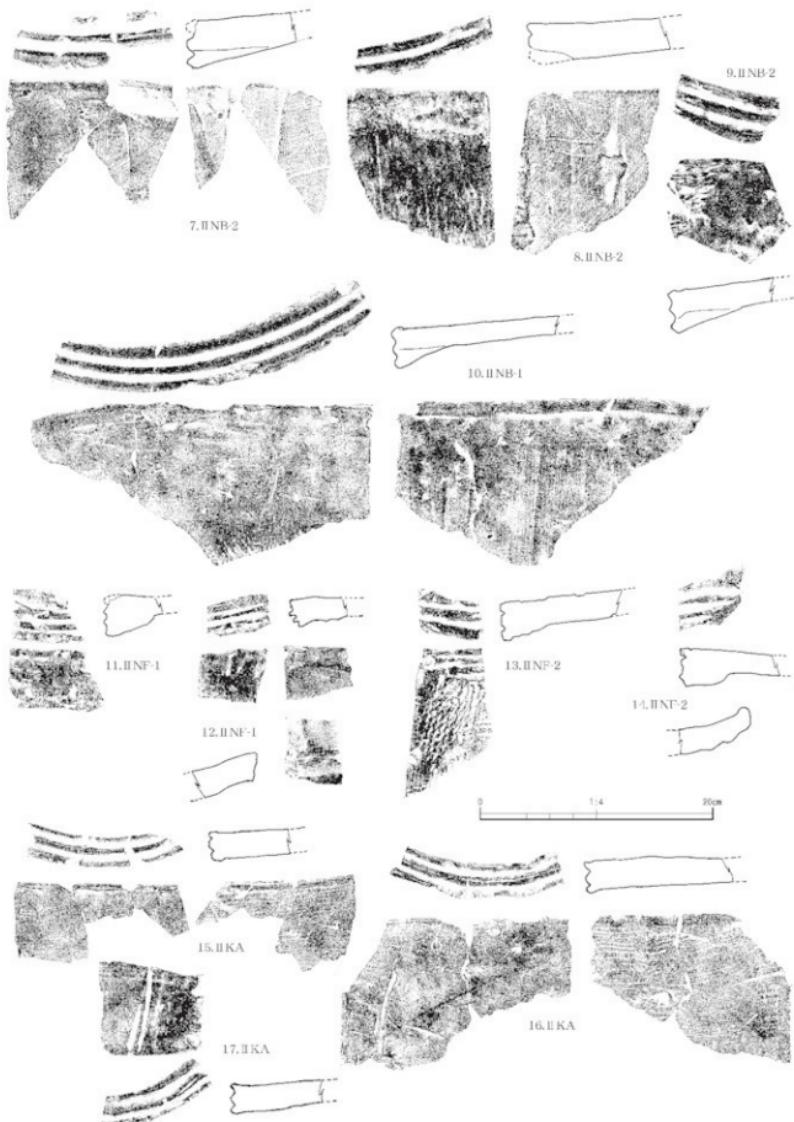


Fig.25 重弧紋軒平瓦 2

VII 出土瓦

残るが3者ともに最終的には縦方向に削り仕上げされている。白色・茶黒色の粘土粒子が胎土中に見られ橙灰色に焼かれている。胎土や焼きはIやII NAに近い。7・8は平成11年の調査で、9は平成9年の調査で出土。

II NF-1式 (11・12) 繩目一枚作りで型押し施紋された軒平瓦。小片2点である。11では、頸部に残る繩目は軒平瓦IV式と同様、まず縦方向に繩目が叩かれ瓦当面近くを横に叩く方法がとられている。12では繩目と思われる痕と側面に凹面からの布目がまわっているので、一枚作りされたものとわかる。瓦当紋は瓦籠による型押しと判断している。軒平瓦IVを重廊紋とし、この軒平瓦を重弧紋とするには資料が少なく今後に問題が残る。瓦当紋は四重弧紋の可能性をも残す。瓦当厚は明確にし得ないが3.0cm以下。灰白色で、細かい均質な粘土が用いられている。11は2次(北方建物付近)、12は3次(東回廊付近)からの出土。

II NF-2式 (13・14) 繩目一枚作り押し引き重弧紋と考えている。資料はこの2片だけである。13では、凸面縦方向に繩目が打たれ、瓦当面近くを横方向に叩いている。14は右側面が残る破片であるが、側面に凹面からの布目がまわっている。四重弧紋ともとれる。瓦当厚は13で3.2cmほど。暗灰色で質の細かい粘土が用いられている。須恵質である。13は5次(北方掘立柱建物付近)、14は平成9年度調査で出土。

II KA式 (15・16・17) 粘土円筒分割後、広端面に直接重弧紋を押し引きしている。17は右側面を残す破片であるが右側面に左から押し引かれた粘土が喰み出している。瓦当紋の施紋方法や粘土の質や橙灰色の焼き上がりなどII NAに良く似る。ただ、縦断面で厚みを見るとII NAのように当初から瓦当用に作られた粘土円筒ではない。瓦当厚は3.0cm以下。平瓦凸面は、横ナデ仕上げ。頸がなく直線状となっている。16・17は平成11年の調査で、18は7次(塔・金堂跡)で出土。

II KB-1式 (18・19・20・21、付22・23・24) 粘土円筒の1端、木口部分を包み込むように瓦当紋施紋用粘土が貼り付けられ、回転台の回転によって粘土円筒分割以前に重弧紋が押し引かれたと考えている。山王庵寺では、出土量の最も多い軒平瓦で「平成20年度調査報告書」では、制作法や他遺跡出土の重弧紋軒平瓦との比較などを考えてみた。18・19は前書でH形としたもので、最も上の弧線が、平瓦凹面に堤のようになっている例である。凹面の布筒・糸切り・棒板痕などは、瓦当から4.0cmほど奥に残り、瓦当近くは横ナデされる。凸面は横ナデ仕上げである。20はS形としたもので瓦当用の粘土が凹面側にも厚くなり、断面形がスプーンのように反り返っている。前書の瓦当断面の分類では、最も出土量の多かった例である。21はT形とした例である。瓦当用の粘土のほとんどが凸面木口部に加えられるため曲線顎となり、凹面側にかかる粘土は短く薄い。なお、II KB-1の関連資料と判断しているものに22~24がある。22・23では瓦当面だけで平瓦は欠落するが、平瓦木口の圧痕が瓦当裏に残る例。24では平瓦の先端が残るが、瓦当面が欠落した例である。凹面の棒板痕には2.0~4.5cmほどの幅がある。凸面は瓦当施紋と恐らく同時に回転台によって横ナデ仕上げされる。僅かに刻線叩打具痕が消し残る例がある。胎土に白色・茶黒色の粘土粒子が混じるが、良質の粘土が使われている。安中市下秋間八重巻窯採集瓦と同質である。19は4次調査で、18は7次調査、24は平成9年度、20・22・23が平成11年度調査で出土。

II KB-2式 (25・26) 粘土円筒分割後、一枚ずつ瓦当紋を押し引きした軒平瓦。今のところ2種類あって、瓦当厚3.7cm前後の三重弧紋の25と瓦当厚2.5cmほどの26がある。両者ともに出土量は少ない。25では弧線の太さが不揃いであるうえに、瓦当面が水平でない。平瓦部凹凸面の仕上げはII KB-1に近い。胎土や焼きも似る。平成9年度調査出土。26は右側面が残る破片であるが、重弧紋は左から右に押し引かれている。このため右側面に紋様を押し引いた時の粘土が喰み出している。この瓦では凸面に平行線叩目が残り、昨年度報告の38頁、Fig. 23-7が、これにあたる。7次調査で出土。

II KC式 (27・28、付29・30) 瓦当用粘土の貼り付けにあたって、粘土円筒広端付近の刃物や籠などで刻線を施して、その助としたものをII KCとした。27・28では、割れた面に刻線が見られるもので29・30のような瓦片もこの例である。瓦当厚の計測や、瓦当断面の分類では、完全にII KB-1に含めて考えるべきものと思う。II KB-1とした瓦の中にはII KC軒丸瓦が含まれているものと思う。安中市下秋間八重巻窯出土資料の中にもある。27

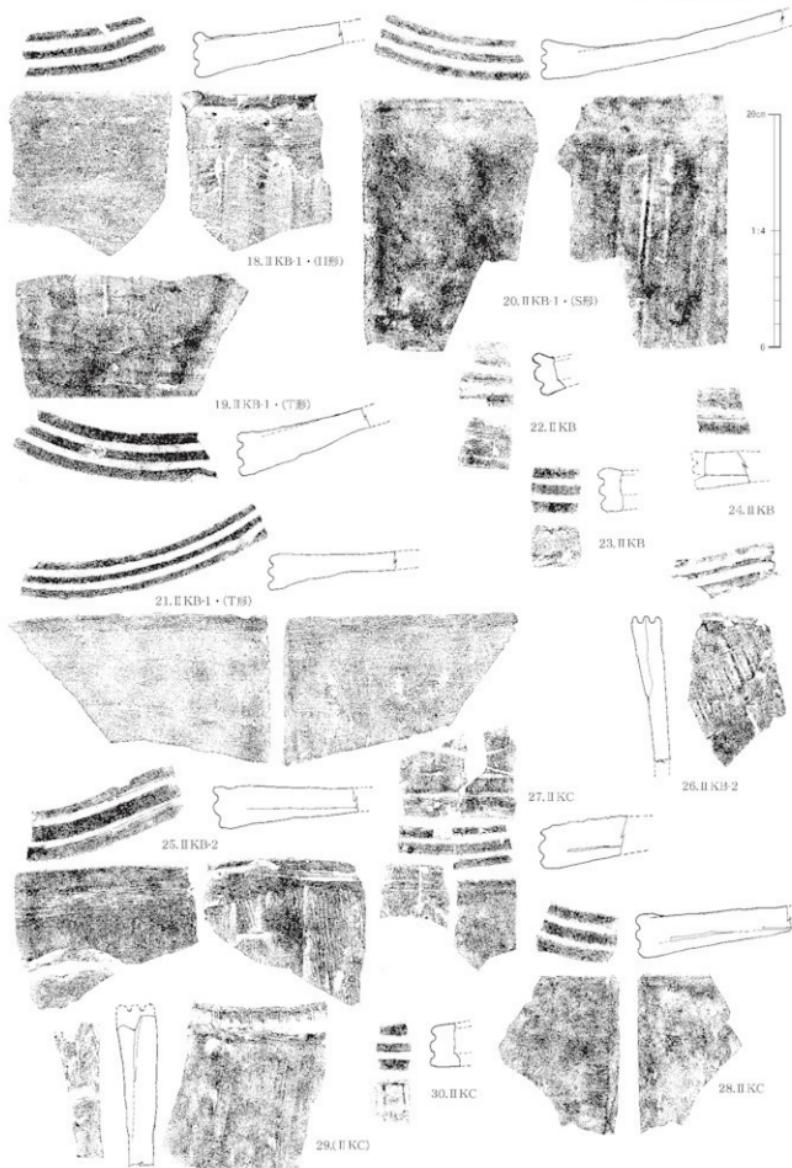


Fig.26 重弧紋軒平瓦 3

VII 出土瓦

は平成9年出土。28~30は平成11年度出土。

II KD式 (31・32・33) 額部に隆起線紋がある直線額の重弧紋軒平瓦を設定したが、次のII KDg-1の段額の長さが瓦当面から11.0cmほどあり、3片の破片の大きさからは直線額と断定しきれない。3片ともに瓦当面から平瓦凸面にかけて瓦当用粘土がL字形に貼り加えられる。31では額部の隆起線の左端が潰れていることから、粘土円筒分割後の押し引きと考えている。32では平瓦が完全に欠落している。31は出所不明、32は4次調査で出土、33は平成11年度調査で出土。

II KDg-1式 (34) 回転台の回転によって押し引きされた重弧紋である。長さ11.0cm、深さ0.7cmと長い段額がつく。瓦当用の粘土は段額を形づくり瓦当面を包み込んで凹面に薄くまわる。現在、ただ1点だけの出土状況であるが粘土円筒の狭い方の木口面に瓦当紋様が押し引かれる。重弧紋は回転台で押し引かれるとき、最上段の弧紋に充分な粘土がまわりきらなかった部分が残る。平成11年度調査出土。

II KDg-2式 [II KDg1] (35・36) 粘土円筒凸面広端側に刃物傷を入れて段額となる粘土を貼り加えている。粘土円筒分割後に施紋されたもので、35で見られるよう重弧紋の流れが波打っている。瓦当面も水平でない。山王庵寺出土軒平瓦では最大級のもので、36は寄贈資料であるが瓦当弦幅35.0cm、同深6.4cm、瓦当厚5.1cmを測る。額長9.8cm、深さ1.8cmなどの段額で平瓦本体に刃物傷を入れて接合している。35は4次調査で出土。

III NF式 (37・38) 篋目四重弧紋一枚作りの軒平瓦である。昨年度の調査報告から採ったので平瓦部の拓影は省略している。37では瓦当用に粘土が貼り加えられて曲線額となっている。37は四重弧紋は押し引きと思う。凹面は枠板痕がない布目が瓦当直上まで、凸面は貼り加えられた部分だけが横ナデ、それ以下は縦方向の繩目が残る。38は型押しによる四重弧紋平瓦であろう。特徴は平瓦凸面の繩目にあって縦方向に叩いた後、瓦当面に沿って横方向の繩目が残る。37・38は明確な四重弧紋である。出土点数的には極く少ない。37は南回廊付近、38は金堂北側からの出土。

III KD-1式 (40、付42・43) 回転台の回転によって押し引かれたと考えられる。整った四重弧紋である。強線は山と谷の差が大きい。瓦当用粘土は平瓦広端凸面側に貼り加えている。43は、その1例と思われ平瓦が欠落した最下段の弧線部分である。剝離面には平瓦凸面に刻まれた瓦当用粘土の接合を助ける刻線のボジが見られる。42 (III KDと決定するわけにいかないが...) では、瓦当面から2.7cmのところで、II KDと同じように粘土紐を思わせる剝離面が瓦当下半にある。いずれにせよ40で見るよう額のない四重弧紋軒平瓦は存在した。量的にも、43のように額部隆起線紋と下段の瓦当面の弧紋が残る小破片はしばしば見られる。平成18年報告のH-12に良好な資料がある。40は平成11年調査、42は4次調査、43は平成9年調査で出土。

III KD-2式 (39) 直線額の軒瓦としたが証拠はない。また出土点数も現在この1点だけである。瓦当紋様の流れは明きからに軒平瓦一枚ずつの押し引きである。平成10年調査で出土。

III KDg式 (41) 長さ10.0cm、深さ0.7cmの段額がある。額は刃物で平瓦広端凸面に刻線を施し粘土を貼り加えている。瓦当紋様は比較的整っているものの、瓦当面が波打っていることから粘土円筒分割後一枚ずつ施紋されたものと思う。この軒瓦では額面に三重に須恵器に見られる波状紋が描かれている。額部の隆起線紋を形成するための横ナデ後に書かれている。比較的良好な資料が増加しつつあり、平成19、20年にも出土している。この資料は4次調査で出土。

昨年度の報告で「IV 出土瓦」の「7. 重弧紋軒平瓦について」で山王庵寺出土重弧紋軒平瓦の分類を考え、その中の代表的存在とも言える「8. 桶巻作り三重弧紋 (II KD-1) 軒平瓦の特徴」を記した。昨年度の重弧紋軒平瓦の分類を補足する意味で分類に使った瓦の若干の解説「桶巻作り軒平瓦」を記した。山王庵寺軒瓦の編年案作成への手懸りを得るためにある。

ここで重弧紋軒平瓦全体の共通点等を整理し、現状で把握出来ている軒丸瓦との関係について考えて見たい。

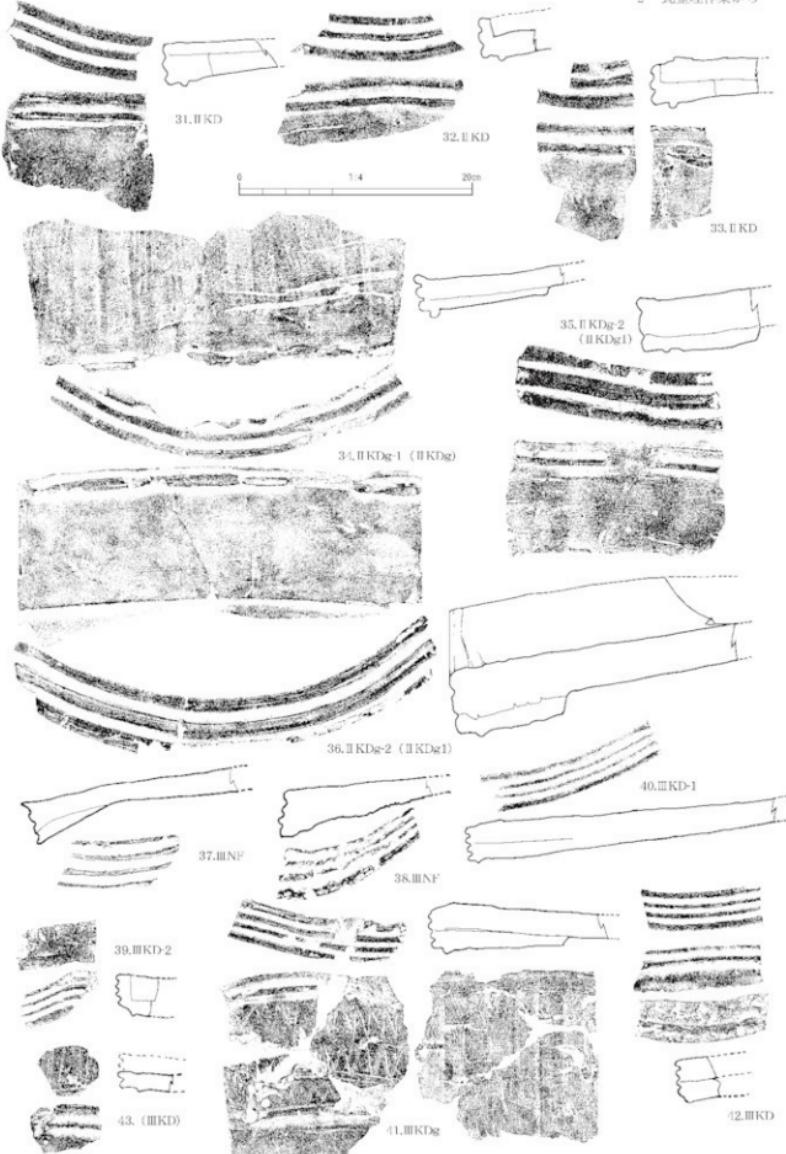


Fig.27 重弧紋軒平瓦 4

VII 出土瓦

山王庵寺には吉備池庵寺重弧紋軒平瓦のように最初から軒平瓦用（瓦当面が厚くなるように）に粘土版を切り出し軒平瓦を作ったもの（1）、山田寺や川原寺の例のように桶巻作り粘土円筒の広端凸面に瓦当用粘土を貼り段鉢を形作るもの（2）、粘土円筒の広端凸面に瓦当用粘土を貼り曲（直）線鉢を作るもの（3）、粘土円筒の広端木口を包み込むように瓦当用粘土を貼るもの（4）、一枚作りされたもの（5）などの重弧紋軒平瓦がある。

- (1) 瓦当面が厚くなるように粘土版を切り出し軒平瓦を作った例では、I・II NAがある。瓦当面を厚く作っていないが直接木口に重弧紋が押し引かれたものにII KAがある。
- (2) 粘土円筒の凸面、広端側だけに粘土を貼り段鉢の軒平瓦を作ったものでは、Ig・II KDg-1（瓦当面は粘土円筒の狭端）・II KDg-2〔II KDg1〕・III KDgがある。
- (3) 粘土円筒の凸面広端に瓦当用粘土を貼り曲（直）線鉢の軒平瓦を作るものにII NB-2・II KB-2がある。
- (4) 平瓦（粘土円筒）木口を包み込むように瓦当用粘土を貼り軒平瓦を作るものではII NB-1・II KB-1（II KC）がある。
- (5) 一枚作りされた軒平瓦では（この場合、平瓦部凸面には縫目打捺痕が残る）では、II NF-1・2、III NFがある。

この軒平瓦の多様性は、何に起因しているのだろう（註1）。

(1)では、I・II NA・II KAに共通して類似した胎土の粘土が用いられ、焼きあがりも橙灰色のものが多い。また、II NA・II KAは粘土円筒分割後の一枚ずつの押し引きである。

(2)ではIg、II KDg-1・2、III KDgがあり、(3)ではII NB-2・II KB-2、III KD-1がある。このうち、II KDg-2、III KDg、II NB-2は粘土円筒分割後の押し引き施紋である。II KDg-1は瓦当面全体がわかるとは言え、今日まで1点だけの出土で平瓦狭端木口面が瓦当となっている点異例である。

しかし、全体的な傾向からは(4)としたグループよりは、(2)・(3)のグループのものが古いと考えて良いだろう。さらに(5)は遅い存在となる。なお、瓦当紋様からは素紋（I・Ig）から、重弧紋（II・III）へとかわるであろう新旧関係は容認されよう。

この桶巻作り軒平瓦の多様性は1つには時間的な経過の産物であろうし、1つには工房（生産窯）の違いなども要因であろう。ただし、上野では素紋・重弧紋軒平瓦の生産は安中市下秋間の秋間窯跡群で始まり、少なくとも上野国分寺の建立事業の時期までは続いたものと考える。

以下では、軒瓦の組合せ関係についてわかっていることを記す。

1. 複弁蓮華紋軒丸瓦（III・IV）と三重弧紋軒平瓦（II KB-1、II KC）の組み合わせ。この組合せについては「平成19年度調査報告書」66頁の出土軒瓦の集計表、「平成20年度調査報告書」62頁などで紹介しみであるが、平成21年度の南回廊・中門跡の面的な調査で組合せがはっきりした。
2. 素弁单弁八弁蓮華紋瓦（軒丸瓦I・II）と素紋（軒平瓦I・Ig）軒平瓦の組合せ。発掘調査では第6次（塔・金堂跡地区）調査で軒丸瓦の2種が多く出土している。しかし、この時素紋軒平瓦は出土していない。I・Igが軒平瓦Iと組み合うと最初に考えたのは石川氏のようだ（註2）。石川氏の考えを踏まえてであろうか岡本氏（註3）は「四枚づくりのロクロびき重弧紋出現前…」の存在とらえている。いまだに確証はないものの軒丸瓦・軒平瓦の素朴さから、この組合せが考えられる。
3. 変形複弁七弁軒丸瓦（II・III）と縫目一枚作り軒平瓦（IV・II NF-1・2、III NF）の組合せ。第6次調査で出土した「放光寺」銘文字瓦の発見から、文字瓦と同質の軒丸瓦として変形複弁七弁軒丸瓦（II・III）を松田氏は見出した（註4）。2005年、「放光寺」銘文字瓦と同質の「天長八」銘文字瓦の存在を知り、同質の軒平瓦として重慶紋軒平瓦（IV）と縫目重弧紋軒平瓦（II NF-1・2）の存在を明らかにした（註5）。さらに昨年度、今年度にかけて同質の軒平瓦II NFが出土している。

この種の軒瓦では今のところ明確な組合せ関係を示す根拠はない。今後の課題であるが時期的に9世紀前半

の組合せである。

3つの組合せ関係について記したが、3の組目一枚作りされている重弧紋(IV)重弧紋(II NF-1・2、II NF)軒平瓦の存在は、より長期間山王庵寺では重弧紋軒平瓦が用いられていた可能性を考えさせる。

註

- 東国において重弧紋軒平瓦を出土する寺院跡は澤山ある。しかし、山王庵寺のように多様な重弧紋軒平瓦が出土した寺院跡はないのではないか。重弧紋軒平瓦の検討中、国士館大学考古学研究室、栃木県下野市教育委員会のご好意により「史跡下野薬師寺跡Ⅰ」を手にすることが出来た。東国古代寺院の大寺である下野薬師寺では、天武朝創建瓦として鏡瓦101型式(川原寺式系軒丸瓦)に対する宇瓦201型式が三重弧紋軒平瓦がある。この軒平瓦についての製作法やバリエーションを知ることが出来たが、山王庵寺のような多様性は見られない。比較的短時間で宇瓦201型式は宇瓦202型式(平城宮682)にとってかわる。(栃木県南河内町教育委員会『第V章 第1節(4)宇瓦』・『第VI章 1 下野薬師寺の建立』「史跡下野薬師寺跡Ⅰ」2004)
- 石川克博「山王庵寺の創建期について」『群馬県史研究』26 1987 40頁
- 岡本東三「東国における初期寺院の成立」「古代東国の寺院と瓦」 1996 63頁
- 松田 駿「山王庵寺の性格をめぐって」『群馬県史研究』20 1984 17頁
- 栗原和彦「山王庵寺出土(放光寺)銘文字瓦をめぐって」『群馬文化』288号 2006

(2) 出土瓦から見た山王庵寺(軒瓦編年案)

重弧紋軒平瓦を分析し、軒平瓦との組合せについて考えて見た。山王庵寺出土瓦の比較対象となるものは、まず上野国分寺出土瓦である。その比較から次のような違いがみられる。

軒平瓦では山王庵寺では①B型瓦範を用い、瓦範に2~3枚の粘土を押し込んで出来あがった瓦面に別作りした丸瓦を接合して作るもの。②一本作り法(横置型成形台が主流か)で、瓦当面から丸瓦の部分まで1度にとも土で作り、瓦当面にその面積より小さいC型瓦範(B型瓦範も少量ある)を打込んで作るものとがある。上野国分寺では①の例はごく僅かで②の例が多い。山王庵寺と上野国分寺軒平瓦の同範といわれる軒丸瓦の多くが②の例である。

軒平瓦では山王庵寺では①桶巻作り軒平瓦の出土量が圧倒的に多く、②一枚づくりで瓦範を用いて瓦当紋様をついているもの、③一枚作りで瓦当紋を手描きしたものなどがある。山王庵寺と上野国分寺とで同範と言われる瓦は②の例である。畿内では8世紀第1四半期に桶巻作り軒平瓦から一枚作り軒平瓦の製作法の転換があった。上野の場合、上野国が国分寺の建立という大事業と取り組むのにあたり造瓦技術者の即席的な養成のため、軒丸瓦の一本作り法や軒平瓦の一枚作り法がとり入れられた可能性が考えられないか。山王庵寺出土瓦の編年案を考えるにあたって、上野国分寺出土瓦との関係は重要な意味を持つ。

ここでは、上野国分寺建立事業開始以前を1期とし、国分寺建立事業開始以降を2期とする。

・第1期 寺院創建(註1)から、上野国分寺建立事業開始(註2)まで

軒丸瓦はI・II・III・IVの4種。すべてB型瓦範が用いられている。別作りされた丸瓦(多くが行基式であろう)が接合される。軒平瓦は桶巻作りされ、瓦当紋は素紋(I、Ig)と重弧紋(II、III)がある。

軒丸瓦I・IIは素弁八弁でありIII、IVは複弁である。軒丸瓦I・IIの出土状況は、第6次(塔・金堂跡)の調査で頗るな出土状況があった。瓦当紋様の大きな相違と、軒丸瓦I・IIの出土状況から第1期を二分する。

・1~1期 軒丸瓦(I、II)と軒平瓦(I、Ig)である(註3)

軒丸瓦I・IIは素弁八弁である。関東では最も古い軒瓦の一つと考えられている。軒丸瓦Iについては石田氏以来(註4)、百済系軒丸瓦として山王庵寺の創建瓦と考える人が多い。軒丸瓦IIについて創建瓦として論じる人は少ない。両者は第6次調査で最も多量に出土したが、発掘調査結果からは新旧を論じるほどの根拠は得られていない。むしろ、同時に用いられたとすべきであろう。およそ7世紀第3四半期と考える。軒丸瓦Iの同範例は前橋

VII 出土瓦

市下東西清水遺跡^(注4)、観音沢遺跡^(注5)、大屋敷遺跡^(注6)などに見られる。軒丸瓦IIについては同範例の出土を聞かない。

・1—2期 軒丸瓦は複弁八弁(III)、複弁七弁(IV)の2種。軒平瓦では轆轤引き三重弧紋(IIKB-1)。この組合せについては、平成19年度報告書中で(1974~1999年までの調査で出土した軒瓦の集計結果から)軒丸瓦では素紋複弁七弁(IV A+IV B+IV C)が340点中の134点(39.4%)、素紋縁複弁八弁(III)が56点(16.4%)、軒平瓦では三重弧紋軒平瓦(IIKB-1+II KC)が288点中の157点(54.6%)を占めた。のことから山王庵寺を代表する軒瓦の組み合わせと考えた。軒丸瓦IIIと軒丸瓦IV Aとでは、IIIが面径で1.0cmほど大きく、中房の蓮子の数や、連弁数、外縁の幅(IIIがやや狭い)などの違いがある。IIIでは、すべての瓦当に範傷が見られるが次第に傷の数が増加し蓮弁の形がわからなくなるまで長期間使いこまれている。

軒丸瓦IVでは瓦当紋様は同紋の瓦範が少なくとも2範あった。軒平瓦II KB-1は粘土円筒の状態で広端面を包み込むように瓦当用の粘土が貼られるという特徴を持つ。その瓦当厚や瓦当断面形にはいくつかのバリエーションが見られ、軒丸瓦III・IVと組み合わさって長期間にわたって(国分寺建立事業が開始される頃まで)、生産された可能性がある。おそらく山王庵寺の伽藍はこの軒瓦の組み合わせの時に完成したものと思う(注7)。安中市下秋間所在、八重巻窯跡出土とされる田島伊作氏寄贈資料(安中市秋間資料館所蔵資料)に軒丸瓦IIIは見られないが、軒丸瓦IV A・B、軒平瓦II KB・Cはある。複弁蓮華紋軒丸瓦(III・IV)と重弧紋軒平瓦(II KB・C)の組合せは、7世紀第4四半期から8世紀前半まで使われただろう。その盛期は8世紀前半だろう。なお、軒丸瓦IVは太田市寺井庵寺、東吾妻町金井庵寺、上野国分寺などに同範瓦があるといふ。

・第2期 上野国分寺の軒瓦と並ぶ軒瓦『上野国交替実録帳』、定額寺項の「放光寺」は、長元三年(1030)以前に定額寺の寺格を外れた寺院としてすでに存在しなかった(注8)。この時、上野国分寺はかろうじて存在していた。山王庵寺は、定額寺として実在した期間、上野国司の支配を受けて特別な存在であったらしい。山王庵寺出土瓦に上野国分寺同瓦が多數見られるのは、上野国司によって国分寺用に作られた瓦類が、山王庵寺の修理用に分与された結果と考えられよう(注9)。

以下では主要な軒瓦を中心 に5期区分をする。

・2—1期(上野国分寺創建期) 軒丸瓦Ⅷは国分寺軒丸瓦B201aである。国分寺では金堂基壇築土から出土し(注10)金堂より先行して建立された建物が考えられる。このため、創建期の瓦の一つとされた。この軒丸瓦が2008年の調査で出土し、翌年には「齒田」銘文字瓦(この瓦も国分寺では金堂基壇築土から出土している)が出土した。さらに国分寺では創建期に近い頃の文字瓦とされる「山田」「井」などの型押し文字銘瓦(注11)などが過去に出土している。これらの瓦は、みどり市鹿の笠懸窯跡で上野国分寺所要瓦として生産されている。この瓦が山王庵寺から出土するということは国分寺の建立事業が開始されたころには上野を代表する寺院として、山王庵寺(「放光寺」)は定額寺の寺格を得ていたであろう。8世紀第3四半期の瓦である。

・2—2期 三重弁六弁の軒丸瓦ⅦA・VII Bである。山王庵寺から出土する瓦片は小片である。瓦範はB型。VII Aは同じ瓦範を用いていたと思われる一本作りされたものが八重巻窯採集例にあり、高崎新保庵寺例(注12)では、山王庵寺と同様に別作りした丸瓦が接合されたものが出土している。山王庵寺VII Aは八重巻窯産であると思われる。瓦当+丸瓦の製作法から一本作りへの転換点が、この軒丸瓦VII Aが使われた時期にあったと思う。この軒丸瓦と組み合う軒平瓦は山王庵寺ではわからないが、新保庵寺で三重弧紋軒平瓦(II KB-1+II KDgl)が出土していて組み合う可能性を考えさせている。この瓦の年代を大江氏は740年頃とする。ここでは、それよりやや下った年代を考えたが、確かな根拠となるものはない。およそ8世紀第3四半期の瓦と考えたい。軒丸瓦VII Bは2006、07年に各1点が出土し、採集資料(注13)にやや大きめの破片がある。一本作り法によって作られている。軒丸瓦VII A・VII Bは上野国分寺に出土例はない。

・2—3期 軒丸瓦では素弁四弁【IV、国分寺(以下国と略す) A003】、重弁四弁【V・VI、国A302・A004】、

三重弁五弁〔IX・X、国B001・B103〕、重弁六弁〔VII、国C001〕など。軒平瓦では、偏行唐草〔V、国P005〕、均整唐草〔VI、国P201〕、綾杉〔VII、国S002〕、連弧状〔IX、国Z001〕など。

すべて上野国分寺出土軒瓦に同じものが見出せる。軒丸瓦は、すべて瓦当裏の布目に絞りのないことから横置型の成形台で一本作りされたものではないかと思われ、軒平瓦は蒲鉾形の凸型成形台が予想される。軒丸瓦Xが藤岡市金山2号窯から発掘調査で出土し^(注16) 軒平瓦VIが高崎市(旧吉井町)や藤岡市の窯跡に採集例があるという^(注15)。国分寺では、これらの軒瓦はIII期修造期として8世紀末以降に考えられている。上野国司によって国分寺修理用瓦が分与された結果と考える。

・2-4期 軒丸瓦では変形複弁七弁〔XI・XII〕。軒平瓦では重廓紋(IV)と重弧紋軒平瓦の罫目一枚作りされている瓦(II NF・III NF)が該当するだろう。軒丸瓦には別作りされた丸瓦が接合される。山王庵寺XIでは玉縁式丸瓦が接合されていた。XIIでは瓦当面に外区珠紋帶の外界線より1段低く鈎のような平坦面がある。瓦籠の端を、そのまま写しとったものだろう。上野国分寺出土のM001は山王庵寺軒丸瓦XIIと同範の軒瓦であるが鈎状の部分はなく通常の軒丸瓦となっている。恐らく、国分寺例の場合、鈎状の部分に楕型を嵌めて瓦当を作り、最終的には側面を整形しているものと思う。軒平瓦IVは平瓦部凸面を縱方向に罫印きを施し瓦当面沿いの部分を横叩きして不整形な頭を作り出す。この罫印きは「放光寺」・「方光」など、いわゆるIII類平瓦である。最近「天長八」(831年)銘文字瓦が見つかり^(注16)、9世紀中頃と位置づけることが出来た。安中市秋間窯跡で生産されている^(注17)瓦群として時期のまとまりは判明した。しかし、個々の組合せなどについては山王庵寺以外での発見例に待つよりないだろう。

・2-5期 軒丸瓦VI。軒平瓦では手描き幾何学紋VII。山王庵寺最終段階の軒瓦と考える。軒丸瓦VIは高崎市(旧吉井町)黒熊中西遺跡の軒瓦E類が最も近い^(注18)。山王庵寺では、この時期と考えられる瓦に蓮目瓦がある。第6次の調査報告書に掲載された(1980)のが初見で、その後高崎市締縫遺跡(1985)^(注19)、黒熊中西遺跡(1992)で出土している。山王庵寺では2006年の調査で小破片が多数見つかった。軒瓦は伴っていないが高崎市寺尾町の小塚窯跡で採集され、国分二寺および国府城からも採集例があるといふ^(注20)。平安時代の寺院跡が調査された黒熊中西遺跡の年代は10~11世紀前半である。山王庵寺の終焉については、10世紀末とする井上説^(注21)が有力であろう。

現状での出土瓦の編年案である。軒丸瓦・軒平瓦の組合せ関係や生産窯の問題など今後の課題とする部分が多い。

以上、山王庵寺の時期的な変遷を考えるうえで、この項以降軒瓦編年案および調査報告書の引用が多くなる。このため、以下の省略形を本文中に使いたい。

軒瓦編年案第1期—軒1期、軒1—1期、軒1—2期

軒瓦編年案第2期—軒2期、軒2—1期、軒2—2期、軒2—3期、軒2—4期、軒2—5期のように記す。報告書では前橋市教育委員会が山王庵寺の発掘調査を公表したものの略称を以下のようにした。

『山王庵寺跡第2次発掘調査概報』1976—「2次調査」と略す。

『山王庵寺跡第3次発掘調査概報』1977—「3次調査」と略す。

『山王庵寺跡第4次発掘調査概報』1978—「4次調査」と略す。

『山王庵寺跡第5次発掘調査報告書』1979—「5次調査」と略す。

『山王庵寺跡第6次発掘調査報告書』1980—「6次調査」と略す。

『山王庵寺跡第7次発掘調査報告書』1982—「7次調査」と略す。

『山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書』2000—「V遺跡」と略す。

『山王庵寺—平成18年度発掘調査報告書』2007—「H18調査」と略す。

VII 出 土 瓦

『山王庵寺—平成19年度発掘調査報告書』2009—「H19調査」と略す。

『山王庵寺—平成20年度発掘調査報告書』2010—「H20調査」と略す。

註

- 1 山王庵寺創建の時期については諸説あり、別途記述を考えている。ここでは、大方の意見として7世紀第3四半期とする。
- 2 上野国分寺の完成した時期については、前沢氏は『続日本紀』の天平咸宝元年(749)5月成寅条の碓氷郡の人、石上郡君諸弟の叙位、同、同年閏5月癸丑条の勢多郡の少領上毛野朝臣足人の叙位の記事が、天平19年(747)11月巳卯条の詔勅後3年を経た段階でのものであり、上野国分寺は「恐らく全国で最も早い時期に一応の完成」を見たのではないかとしている[「第四章 まとめ」「史跡・上野国分寺跡」群馬県教育1988 318頁]。ここでは、この時期、上野国分寺は一応完成したと考えたうえで建立事業開始とはそれ以前と考えておく。
- 3 岡本東三「東国における初期寺院の成立」「東国の古代寺院と瓦」1996 岡本氏は素紋軒平瓦の評価を「四枚作りクロ引き重張紋軒平瓦出現以前のもの」とする。この説に賛成する。
- 4 須磨郡馬県埋蔵文化財調査事業団「下東西清水道路」239集 1998
- 5 総社觀音沢遺跡調査会「總社觀音沢遺跡」1997
- 6 前橋市教育委員会「大里敷遺跡VI」2000
- 7 岡本東三氏は註3文献中でI—1の軒瓦を創建期に、I—2期の軒瓦を伽藍整備期としている。
- 8 1997年(平9)に金堂の南西60mほどの地点で調査された土坑(長さ10m・深さ1m)からの出土品(塔本塑像片や建築材)は火をうけており、山王庵寺は火災で火滅したらしい(前原 豊「よみがえる白鳳の寺・山王庵寺」「群馬文化」254 1998)。寺の終焉の時期については土坑出土の土器から10世紀末頃と考えられている。(井上唯雄「山王庵寺の創建と衰微」「山王庵寺等Ⅵ遺跡発掘調査報告書」2000)。
- 9 「今義解」2 改訂増補国史大系2 職員令に国司の務めるべき役割が以下のように記されている。「大國 守一人。掌寺社。戸口。帳簿…(略)…公私馬牛。闕道雜物。及寺。僧尼名籍事」。とあり、既存の寺を護持することも国司の役目であった。仏教による領護国家政策がとられた奈良時代、国司は既存有力寺院を護持する必要から「定額寺」の制度を適応したと考える。「放光寺」は上野国においては既存有力寺院の筆頭であった。
- 10 関口功一「上野国分僧寺金堂基礎中の出土瓦について」「東国史論」第1号 1986
高井佳弘「瓦類」「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」1988
- 11 前沢和之「史跡上野国分寺出土の文字瓦について」「日本歴史」454号 1986
- 12 大江正行「考察(1)瓦類」「新保遣跡III 經沢遺跡」関越道19集 須磨郡馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 13 住谷修「上野瓦集」西毛編 1982
- 14 版詰秀一「上野・金山瓦窯跡」藤岡市教育委員会 1966
- 15 高井佳弘 註10文献に同
- 16 萩原和彦「山王庵寺出土(放光寺)銘文字瓦をめぐって」「群馬文化」288集 2006
- 17 軒丸瓦類については2009・7・30上毛新聞の記事でその発見が報じられ、皿類の平瓦類については秋間資料館所蔵資料に類例がある。後頁(4)を参照されたい。
- 18 須田 茂「黒熊中西遺跡(1)」須磨郡馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 19 松田 猛「綿貫遺跡の出土瓦について」「綿貫遺跡」高崎市教育委員会 1985
- 20 川原嘉久治「西上毛における古瓦敷布の様相」「研究紀要」10 須磨郡馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 21 井上唯雄 註8文献

(3) 創建瓦について

軒瓦編年案 I - I 期としたものが対象となる。軒丸瓦 I・II、軒平瓦 I・Ig である。これらの軒瓦が山王庵寺創建瓦として、どのように評価されてきたか辿ってみたい。

軒丸瓦 I

この瓦は塔心礎の発掘調査の時にすでに出土^(注1)している。調査報告に記載されているものが『上野瓦集』^(注2)にも見られる。等心礎の精巧なつくりと合わせて軒丸瓦 I も遺跡を代表する軒瓦として注目されたものと思う。

軒丸瓦 I を、百濟系瓦当紋様を持つ瓦であるとしたのは石田氏^(注3)である。以後、稻垣氏^(注4)、森氏^(注5)、石川氏^(注6)、松田氏^(注7)等が石田氏の見方を踏襲する。石田説はわが国の古代寺院出土瓦に朝鮮半島三国時代、百濟の仏教寺院の瓦当紋様の影響を受けたものを百濟系鎧瓦と呼び「第一回 内地出土百濟系鎧瓦」として11例を載せる。その1例が福島氏の発掘調査によるものらしい。石田氏も軒丸瓦 I を山王庵寺の創建瓦と考えたのであろう。稻垣氏は1968年4月奈良国立博物館で開催された『飛鳥・白鳳の古代展』に軒丸瓦 I をとりあげ百濟末期様式の1例とした。この軒瓦に対する直接の年代観ではないが百濟末期様式瓦群の依拠する年代として『日本書紀』天智4年(655)築城とされる基跡城採集の九州式百濟系単弁軒丸瓦^(注8)と備後三谷郡の大領が百濟滅亡後、帰国建立したとされる三谷寺(寺町庵寺)の軒丸瓦などを掲げている。665年以降の瓦として軒丸瓦 I は理解されよう。

森氏は稻垣論考を支持する。新たに『放光寺』銘文字瓦の発見から『山ノ上碑』文中の「辛巳歲(681)」には放光寺には僧がいたとして670年代を創建の時期と考えた。石川氏は備中柏寺庵寺の軒丸瓦が最も似ているとし、年代を備後寺町庵寺例から660年代に比定し、東国への波及を10年と見て670年代を考えられた。松田氏は石川説を疑問であるとしたうえで、大和田中庵寺の重圓紋縁素弁八弁軒丸瓦を最も近い資料として紹介し、軒丸瓦 I に7世紀第3四半期の早い時期という年代を与えた。

岡本氏^(注9)説は軒丸瓦 II を A とし、軒丸瓦 I を B とする。この二つの軒瓦が素弁であり、素弁→單弁→複弁へと蓮弁が変化することを重視する。文中に「これら素弁を用いた…」という表現からは軒丸瓦 I は創建期の軒瓦の1つとして考えられている。なお、素紋軒平瓦(I・Ig)の存在を「四枚作りロクロ引き重弧紋出現以前のもの」という評価とあわせて7世紀第2四半期に山王庵寺の創建が遡る可能性を示した。

軒丸瓦 I に対し私も創建瓦と考える^(注10)。ただ、山田寺式の瓦当紋様に類似し、丸瓦の接合方法もその影響を受けたものと考えた。

瓦当紋様の類似点とは、中房・蓮弁を囲む輪郭線・三角形の間弁・直立高縁で段を持つ周縁などの点である。相違点をあげれば蓮弁に子葉がないこと、隣り合う蓮弁が直接中央につく点などがあげ得る。

さらに、この瓦では接合される丸瓦の広端凹面が段状に削りとられ、先端が瓦當面の一部となっていること、丸瓦の接合法が凸面側に接着用の粘土を用いてないことなどを、山田式軒丸瓦の製作法の類似点と考え、山田寺の天智造営期頃の創建の可能性を考えた。

以上が軒丸瓦 I を山王庵寺創建瓦と考える方々の意見である。

軒丸瓦 II

前掲稻垣論考では巨勢寺出土瓦(図録鎧瓦28)の類例として軒丸瓦 II をあげる。挿図は「素弁蓮華紋(1)」となっている。軒丸瓦 II そのものではないが、稻垣氏は巨勢寺例を「かなり形式的」と見て飛鳥後期に下るとし、630年代末から670年代頃までの年代観を示している。前掲岡本氏は素弁蓮華紋軒瓦として軒丸瓦 I とともに創建瓦の可能性を考えている。軒丸瓦 II を創建瓦と考えて、山王庵寺建立の年代を考える人は少ない。類例にとぼしいことが大きな理由である。さらに未だに山王庵寺以外からの出土例を聞いていない軒丸瓦である。

軒丸瓦 I・II の出土状況

発掘調査で軒丸瓦 I・II が集中して出土したのは、『第6次調査』(1979)である。翌年の報告書^(注11)では、軒丸瓦 I が6点、軒丸瓦 II が15点の出土位置が記されている。塔寄りの白色粘土付近では軒丸瓦 I が2点、II が8

VII 出土瓦

点ほど、西側金堂付近では軒丸瓦 I が 3 点、II が 4 点ほど。軒平瓦についてはふれられていない。

このほかの調査結果では、2006年の調査で講堂跡の東北部 H-12 とした住居跡状の土坑（瓦溜）で軒丸瓦 I が 5 点、軒平瓦 I が 5 点出土したのが注目される。

軒丸瓦 I・II を創建瓦とし、軒平瓦 I・Ig を組合うであろうとする考え方からは恐らく正しいであろう。軒丸瓦 I・II の出土状況から新旧を判断できるような証拠は見つかってない。

註

- 1 福島武雄「日枝神社境内の大礫石」「上毛及上毛人」53号 1921
- 2 住谷 修「上野瓦集」西毛編 1982
- 3 石田茂作「古瓦よりみた日鮮文化的交渉」「考古学評論」3 1941
- 4 稲垣晋也「図録解説」「飛鳥・白鳳の古瓦」奈良国立博物館 1970
- 5 森 順夫 A、「古瓦から見た群馬の古代寺院」「群馬歴史散歩」52 1982
B、「畿内と東国」特別展図録解説、京都国立博物館 1988
- 6 石川克博「山王庵寺の創建期について」「群馬県史研究」26 1987
- 7 松田 駿「上毛野における古代寺院の建立」「信濃」43-44 1991
- 8 小田富士雄「百済系卑牟軒丸瓦考 その1」「九州考古学研究 歴史時代編」1977
- 9 岡本東三「東国における初期寺院の成立」「東国の古代寺院と瓦」1996
- 10 萩原和彦「山王庵寺と上毛野氏—その出土瓦から—」「坪井清足先生卒寿記念論集」2010
- 11 前橋市教育委員会「山王庵寺第6次発掘調査報告書」1980
- 12 前橋市教育委員会「山王庵寺—平成18年度調査報告書一」2006

(4) 安中市秋間資料館所蔵瓦、秋間古窯跡採集瓦の調査

はじめに

2006年6～8月山王庵寺所用瓦の主要な生産地とされる安中市秋間古窯跡群の採集瓦を所蔵・保管する安中市秋間資料館所蔵瓦および安中市学習の森展示瓦資料の調査を実施することができた。

調査は、安中市教育委員会の了承を得て実施した。学習の森ふるさと学習館文化財係長藤巻正勝氏、同主査大工原豊氏の協力と支援があった。深く感謝するしたいである。

調査資料は秋間資料館が所蔵・保管する秋間古窯関係の瓦片（5.0cm以下の破片を除く）に許可を得て、3桁の整理番号を付与し一覧表とし、114点を対象に探査し、必要に応じて実測を行ってカードとした。なお、学習の森ふるさと学習館に展示される軒丸瓦 1 点・文字瓦 1 点についても、探査・実測を行ってカードとした。調査した瓦片はすべてで116点である。

1. 資料

拓本採集や実測図をとった瓦片116点を Tab.12に一覧表とした。Noの欄は資料採集にあたって付与した一連番号。採集地はそれぞれの瓦片に記されていたもの。種類・特徴欄はままで、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦を区別し、丸・平瓦（部）の状況、同じく凹面の状況などを記した。備考欄には、平瓦では桶作りされたものか、一枚作りされたものかについて記し、欄外のA～Cと判断されたものを記入した。

- 001～003 同じケースに並んでいた3点で002に高別当と註記されている。001・003も同所からの採集品か。
004・005 平成14年3月に寄贈された資料で『市史』完成以後のもので、苅畠地区の採集品である。
092～098 苅根地区採集資料。098は桶作り平瓦片4片が溶着したもので『市史』に図が掲載されている。
091 雄子ヶ尾と註記がある。
006～088・ 八重巻3885-2とスタンプされた破片は一括と考えられよう。八重巻とされるものには3976、
099～116 3967、3913などの番地がある。3976には巴紋軒丸瓦がある（100）。この他に八重巻アラク峯と註

記されるものがある（110）。

2. 秋間古窯採集瓦と山王庵寺出土瓦との比較

Fig.28には安中市所蔵の軒瓦を、Fig.29・30には、安中市所蔵の丸・平瓦と山王庵寺の丸平瓦片とを比較するために作図した。

軒瓦（Fig.28） 1・2は複弁七弁蓮華紋軒丸瓦である。1が山王庵寺では軒丸瓦ⅣA、2が同ⅣBaにあたる。1の瓦当裏に墨書で「八重巻3976にて 田島伊作」と書かれている。1の115と同じ瓦が114にもう1点ある。114は小破片であるが、丸瓦が接合される上半部の破片である。瓦当裏に和紙に墨で「下秋間・昭和九年・田島伊作」と書かれたものが貼られていて、瓦当側面にも同様の墨書きが見られる。2は安中市ふるさと学習館の展示資料である。この瓦当裏にも「下秋間八重巻3976 昭和9年2月 田島伊作」と記される。114とともに「上毛及上毛人」の写真に掲載されている。114・115は山王庵寺軒平瓦ⅣAに、2は同ⅣBにあたる。ⅣA・ⅣBの違いは中房徑・弁長などでⅣBがやや大きいこと・間弁の両端が弁の間にあって広く張っていること・紋様が鮮明なおこと・焼き上がりが白っぽく、瓦当が厚いこと・丸瓦の接合にあたって丸瓦の接合部に刻線を入れること（2の断面図の右側の拓図）などがあげられる。山王庵寺ではⅣAの出土が最も多いことからAが第1範、Bが第2範という関係と考えられる。

3は三重弁六弁蓮華紋軒丸瓦である。山王庵寺軒丸瓦ⅢAにあたる。この瓦当裏にも「八重巻3976 田島伊作」と墨書きがある。山王庵寺軒丸瓦ⅢAは小破片が数片出土している程度で新保庵寺の同範例を援用しなければならない。大きな違いは瓦当+丸瓦の接合法（山王庵寺・新保庵寺）に対して一本作り法（八重巻）に替わっている。両者は同じ瓦範を用いていると考えられるが、八重巻例では三重弁の弁央に珠紋を彫り加えていること、周縁の高さが低く、一本作り法に合わせた瓦範の手直しが行われた可能性などが考えられる。このことが認められるとすれば、接合式軒丸瓦ⅢAから一本作り法への転換であり、秋間の瓦生産工房では、この軒瓦のときに一本作り法が導入されたものとも考えられる。両者の折本合成図を右に置いたが、それほどこの図に無理がないのは、瓦範は一つであった可能性を感じさせる。

4は一本作り法による軒丸瓦の破片である。3の瓦範がB型であるのに対し、本例はC型であろう。4では蓮華紋の周囲の圓環が1条か2条かは判定できず、この軒瓦が山王庵寺用のもの一部であったかどうかの判定も困難である。

5は巴紋軒丸瓦である。瓦当裏面の和紙の張り紙には「下秋間 八重巻にて 田島伊作」と墨書きされ、さらに瓦に「八重巻3976」と記されている。八重巻の中世瓦として貴重である。この瓦の供給先は山崎氏の論考中注1)では県内に該当例はない。上野国以外への供給も考える必要がある。八重巻窯の操業がこの時期（鎌倉末～室町初期頃か）まで行われていたことになろう。なお、この瓦では瓦当紋様を型抜しやすくするためハナレ砂が使われている。

軒平瓦は三重弧紋が3点所蔵されていた。6は田島氏の貼り紙によれば、「八重巻 昭和30年」と記される。山王庵寺の軒平瓦IIKBにあたる。回転台使用による重弧紋軒平瓦である。

7の重弧紋軒平瓦にも、田島氏による前記同様の墨書貼紙が見られ、昭和30年という年の一致から6・7は同時に採集された可能性がある。この軒平瓦では布目が瓦当面近くまで残り瓦当面に2ヶ所の亀裂が見られることから確証はないにしても、山王庵寺軒平瓦IIKCである可能性が高い（2ヶ所の亀裂は平瓦部分に刻まれた刻線部分の空気が焼成時、窓内で膨張し小さな破裂を起こした為ではないか）。

8は苅畠地区での採集品である。平成14年と寄贈された年と寄贈者の名前が見られるので『市史』完成以後の所蔵品である。瓦当紋様は三重弧紋軒平瓦である。右半分が欠損しているが瓦当弦幅で33.0cmほどと推定される。長さは42.0cmあり全体の形がわかる資料である。重弧紋は断面形が角張っていて、瓦当の弧線が瓦当部凹部の状況に比較してやや急である。平瓦凹面には幅2.3cmほどの棒板痕と布筒痕が残り、右側面に粘土板の合わせ目らし

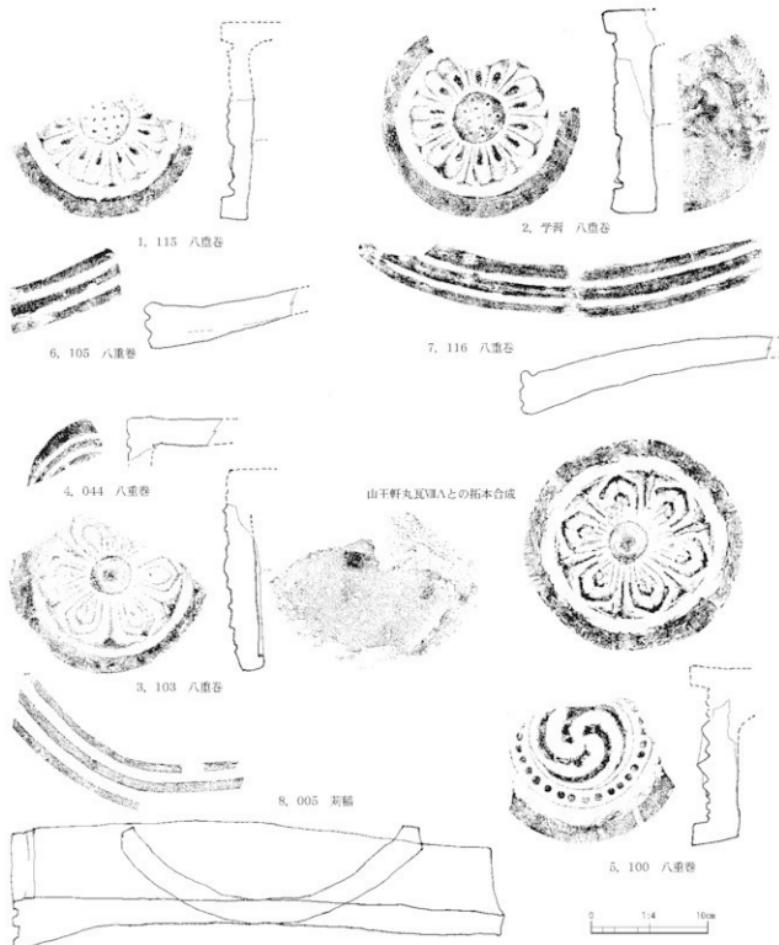


Fig.28 秋間古堂跡出土軒瓦

きものもあるので桶作りされた瓦である。瓦当紋様は分割後に施紋されただろう。平瓦部凸面は狭端側から瓦当方向へラ削り仕上げされている。瓦当面の施紋にあたって、施紋具は平瓦部の凹凸両面の広端隅を削っている。山王庵寺では軒平瓦IIに分類されるものであるが該当する重弧紋は見られない。

丸・平瓦 (Fig.29・30) 9は莉稻採集品である。8と同じ時期に同じ人によって寄贈されている。玉縁式丸瓦で長さ39.1cm、胴部長さ30.7cm、広端幅16.1cm、高さ10.3cmが計れる。胴部凸面は縦方向のナデ仕上げ、玉縁は

削りだした後、縦方向にナデ仕上げされる。凹面は糸切り痕や布筒痕は残るが焼成時の降灰が溶着する。10・11は行基式丸瓦の破片である。10は広端の一部が残る左側面の破片である。一本状の型木に布筒を被せ粘土板が巻かれる。凸面は縦方向に長い繩巻印具によって叩かれ、回転台の回転を利用して繩目を消している。11の丸瓦は狭端面と左側面を残す。10と同様の一本状の型木に粘土板を巻いて作られている。凹面では布筒の縫い合わせ目が見られるが布筒がいくつもの張となっている。凸面側は回転による横ナデ仕上げである。左側面では、凹面を面取状に削り、凸面側は幅狭くナデしている。

12は山王庵寺第4次調査で出土した八重巻産と推定される桶巻作り平瓦の完形に近いものである。凸面の拓本図を掲載していないが回転台による横ナデ仕上げである。図は凹面である。長さ38.0cmほど、最大幅は30.0cmである。この瓦では桶の枠板（1本の幅が2.0cmほど）が16本数えられる。糸切り痕・布筒痕（布の縫い合わせ目も残る）なども見られる。この瓦の狭端側面は、丸味をつけた削り整形が仕上げ時に施され、一つの特徴となっている（これをAタイプと呼ぶことにする）。さらに狭端では枠板が布筒から食み出した部分が見られる。13は八重巻産平瓦の大き目の破片である。狭端および右側面が残る。凸面は全面横ナデ仕上げされるが僅かに長方形の刻線印具痕が消し残されている。図には、凹面だけを掲げた。狭端と右側面の関係は12に見るAタイプに仕上げられている。また、狭端寄りでは、枠板が布筒から食み出した状態、さらには右側面に沿って側面を削り整える状況など12によく似ている。

14は狭端と左側面が残る破片である。凸面は12・13と同様に横ナデ仕上げされているが、長方形の格子目の刻線印具が残っている。Aタイプである。13・14と同様にAタイプの側面削りをしている破片では008・037・042・045・049・061・066・111・112などがあり、いずれも八重巻産平瓦である。

15の八重巻産平瓦片では、凹凸両面に糸切り痕を強く残している。山王庵寺出土例でも少数であるが時々見られるものの凹面の枠板痕跡は明確ではないが、一応桶作りされたものではないかと考えた。

16は山王庵寺第6次調査で出土した隅切平瓦である。凸面には繩巻印具が叩きしめの円弧を描いて密に打たれた状況である。凸面は幅2.5cm前後の枠板痕があり、広端側が7.0～9.0cm近く枠板がむき出しで写しとられている。

17は16に繩目の印具痕が良く似ている。凹面に残る枠板の感じも同じように見える。この類例は荊稈採集品のうち、093・094および平瓦の破片4枚が窓内で降灰を被り溶着した098でも見られる。荊稈室跡群の中でも古い窓での特徴かもしれない。

18は山王庵寺の平成11年調査で見出した正格子に近い木製刻線印板の痕跡をそのまま残す破片である。これとまったく同じと考えられる破片が八重巻にもあった。19である。

20は山王庵寺の平成11年の調査で出土した「天長八」の籠書文字のある一枚作り平瓦である。この平瓦は両側面および狭端面にも布目を残す例が見られるばかりか布目が凸面側にまでまわり凸面の繩目の上に圧痕を残している例が見られる。このことからこの平瓦の成形台は両側面および狭端面に瓦の厚さの分だけの高さ（恐らく、2.0～3.0cm程度）の壁が作られていただろう。凸型成形台に布を被せて、瓦一枚分の粘土板を型に押し込み、型から食み出した布を平瓦の凸面となる繩叩きした面へ折り返しした結果と考えている^(注2)。また、この平瓦の凸面の繩叩目にも特徴がある。成形台に粘土を押し込んで凸面は長手の繩巻具で縦方向に叩いた後、狭端面に沿った部分だけを横向方向に叩く癖をもつ。

山王庵寺では「放光寺」（籠書）、「方光」（型押）、「寺」・「大」・「七」（籠書）^(注3)などの文字銘瓦は、この仲間である。

21は平瓦の小破片であるが、狭端面の一部を残す破片で20と同じ凸面の繩叩印打痕が見られる。雄子ヶ尾と墨書きがある。22も同様の小破片、荊稈と書かれていた。このように平瓦凸面狭端側を横に繩叩きする例は他に042八重巻例がある。灰白色の良く精製された瓦で23の例も、この仲間と考えられる。24では布目が側面にまわっている状況が見られる。また、ふるさと学習館展示資料の「七」銘文字瓦もこの仲間である。また、確信は出来ない

VII 出土瓦

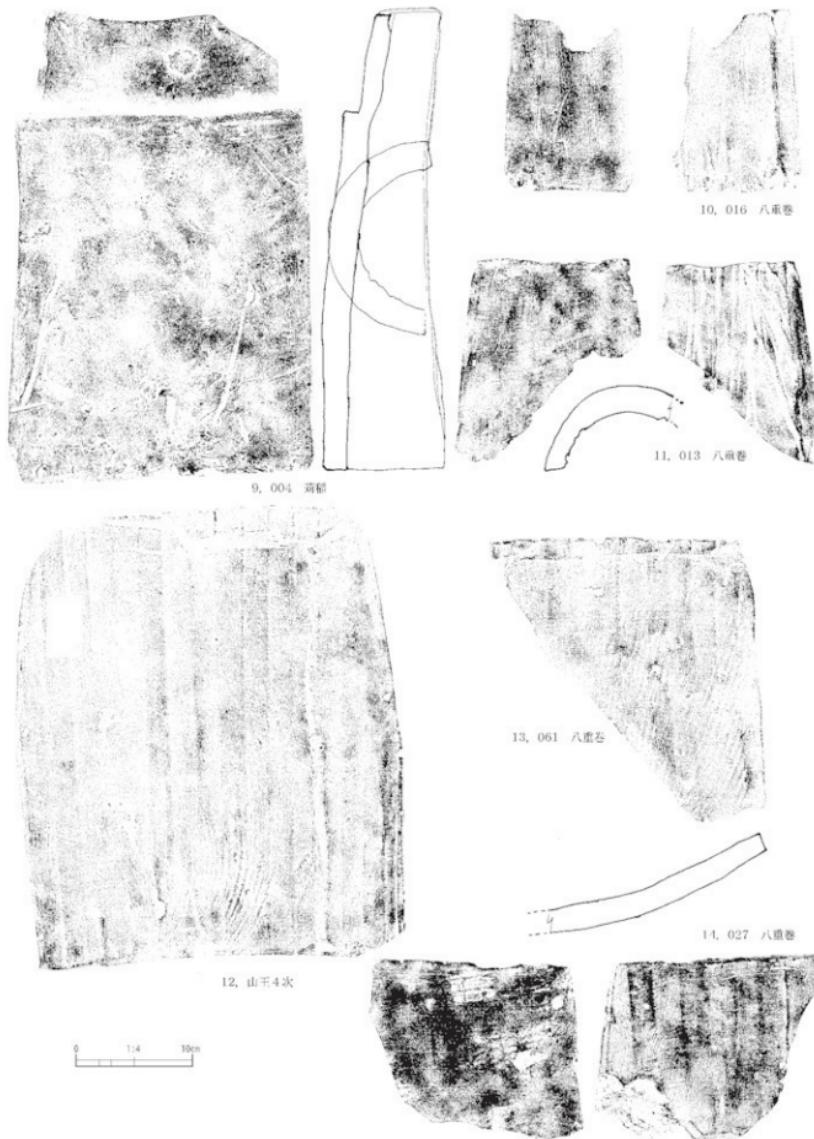


Fig.29 丸・平瓦の比較 I

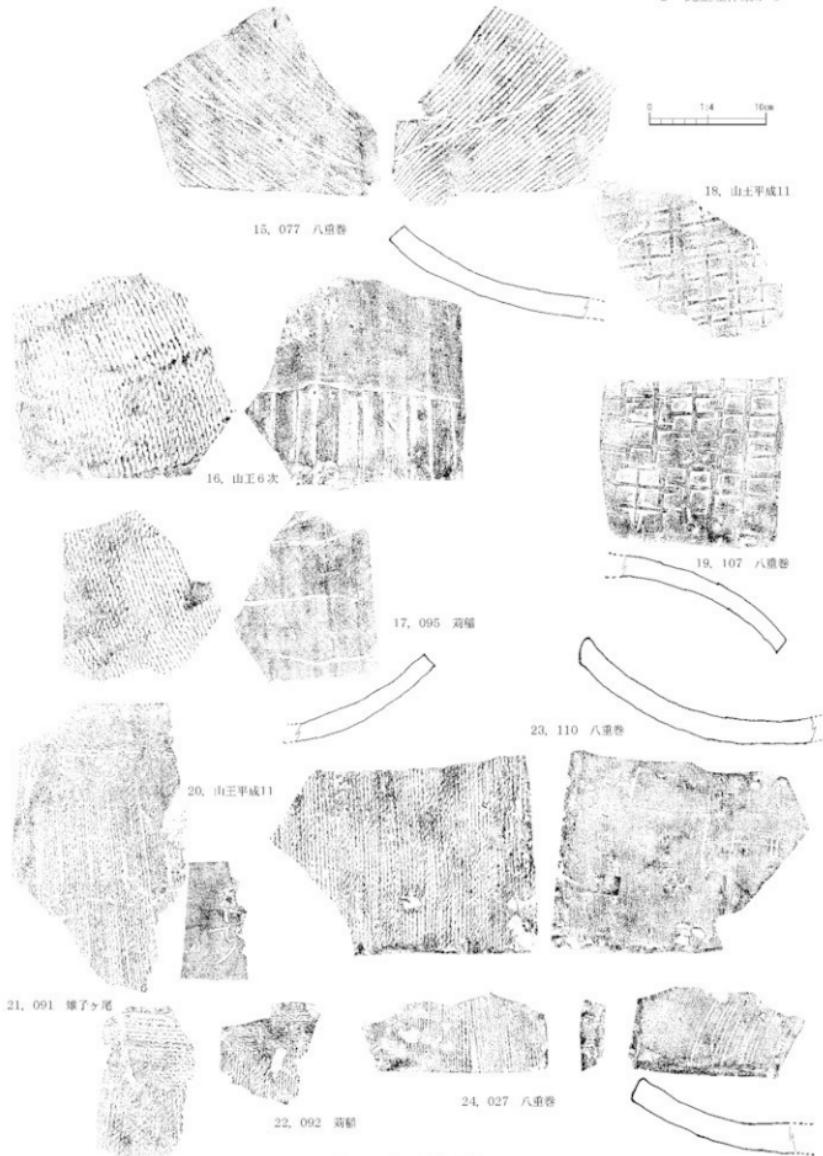


Fig.30 丸・平瓦の比較 2

VII 出土瓦

までも綱目・枠板ナシ（種類・特徴欄）で一枚作り（備考欄）と記したもののがこの時期に考えても良い可能性がある。

なお、小稿のなかでは、それぞれの瓦片の胎土・色調・焼き上げなどについて記述は不要と考え省略した。

以上、山王庵寺出土の瓦と秋間古窯探集の瓦との比較から、すでに言いつくされていることではあるが、以下のように整理しておきたい。

- 1) 軒瓦では、山王庵寺軒丸瓦IV A・IV B式、軒平瓦IIKB・IICK式は八重巻窯探集瓦にまったく同じものがあり、八重巻産と確信できる（軒1—2期）。
- 2) 山王庵寺第4次調査で出土した完形に近い平瓦12では、凸面は回転による横ナデ仕上げ、凹面は幅2.0cm前後の枠板痕を連ねる桶枠の痕跡がある。側面は特に狭端面近くに丸味をつける癖がある（Aタイプ）。この癖は八重巻産の桶作り平瓦に共通するもので、数多くの類例が見られた（軒1—2期）。
- 3) 山王庵寺例16のような縄目桶巻作り平瓦は、恐らく苅稻産と考えて良いだろう（軒1期）。
- 4) 平瓦凸面を縄叩きする平瓦のうち、山王庵寺第6次調査で田類とされた平瓦の特徴を持つ瓦が雉子ヶ尾、苅稻、八重巻例にも見られた。この瓦が弘仁9年（818）の大地震の復興の為に焼かれた瓦であるとすれば、秋間古窯はかなりこの瓦の量産を行ったものではないか（軒2—4期）。
- 5) 山王庵寺では上記以外でも秋間古窯跡で生産されたのではないかと考えられる瓦がある。軒1—1期、2—2・3期に相当する瓦が探集資料では見られない。

以上、山王庵寺出土瓦と秋間古窯探集瓦の比較を行ったが、残された大きな問題として、秋間古窯跡群と山王庵寺、上野国分寺の出土瓦の関係。特に8世紀中頃以降の秋間古窯群での瓦生産の操業状態が知りたいところである。

3. 秋間資料館蔵瓦について

田島伊作氏が秋間村に瓦を焼いた窯の所在を知り、八重巻で探集した軒丸瓦の紋様が「総社町山王庵寺址より出土した瓦と似ている。」と報告されたのは1934（昭和9）のことである。

住谷修氏は1940年（昭和15年）に八重巻産軒丸瓦と山王庵寺の軒丸瓦が同じものであることを認めている。従って戦前すでに山王庵寺と秋間古窯との関係は明らかになっていた。しかし、山王庵寺出土瓦には、恐らく秋間古窯跡群が産地と考えたい瓦（特に古式の軒瓦）は幾種類がある。上野最大とされる秋間古窯跡群であるが、窯の構造が地下水式のものが多く遺構が深いためか、古窯跡の実態解明はこれから課題である。戦後、一部発掘調査もされている（註4）が、調査の内容が、もう一つ明らかでない。

安中市では1964年（昭和39年）に『安中市誌』を、2001年（平成13年）に『安中市史』を刊行し、古窯探集の瓦や須恵器を収録する一方、秋間古窯群全体を把握するため1989年大江正行氏を中心とする須恵器研究グループに依頼し分布調査を実施している。古窯は秋間丘陵の東西7km、南北3kmに分布し約50支群からなるという（註5）。

秋間資料館には田島氏の寄贈資料を中心に探集された瓦が保管されている。これらの瓦資料は、いくつかの機会に調査され記録として収録されてきた。ここでは、その経緯を簡単に記しておく。

『安中市誌』には、田島伊作氏蔵とされる10片の軒丸瓦と2片の軒平瓦の集合写真2枚が掲載されている。

川原嘉久治氏は、1992年に下秋間東谷津窯跡探集品を発表したが、その第40図は田島氏探集資料である。破片の形状から今回調査したものと第40図との照合が可能であるのでTab.12の備考欄にCと記載したものが同一であると考えられる瓦である。川原氏の第40図では、山王庵寺軒丸瓦IXにあてはまるものが記載されているが、今回の調査では見られなかった。川原氏の東谷津探集品には山王庵寺軒丸瓦IV・III、軒平瓦IIKBなどが探集されている。とくに軒丸瓦IVと軒平瓦IIKBと思われる破片は多く見られた。

『安中市史』第4巻は、軒瓦から丸・平瓦の主要な資料の拓本図を掲載する。今回の調査資料と対比が可能なのでTab.12の備考欄にBと記した。

この他では、田島氏が『上毛及上毛人』に書かれた報告に軒丸瓦2点の写真がある。これをTab.12備考欄Aとした。

Tab.12 秋間資料館所蔵古窯跡採集瓦一覧

No	採集地	種類・特徴	備考
001		平瓦・縄目スリ消シ・枠板ナシ	注記なし・一枚作り(側面布目)
002	高別当	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
003		平瓦・格子スリ消シ・枠板ナシ	注記なし・一枚作り?
004	苅畠	丸瓦・完形	寄贈者名・H14.3.19
005	苅畠	軒平瓦・三重弧紋	寄贈者名・桶作り・分割後施紋?
006	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
007	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板ナシ	
008	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り・Aタイプ
009	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	
010	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	
011	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
012	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
013	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	
014	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
015	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
016	八重巻3885の2	丸瓦・縄目スリ消シ	
017	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
018	八重巻3885の2	平瓦・枠板ナシ	
019	八重巻3885の2	丸平不明	
020	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
021	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・分割突帯	桶作り
022	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ	不明
023	八重巻3885の2	丸瓦・縄スリ消シ	
024	八重巻3885の2	丸瓦・縄スリ消シ	
025	八重巻3885の2	丸瓦・縄スリ消シ	
026	八重巻3885の2	丸瓦・縄スリ消シ	
027	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り・Aタイプ
028	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
029	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
030	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
031	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
032	八重巻3885の2	丸瓦・縄目スリ消シ	
033	八重巻3885の2	丸瓦・縄目スリ消シ	
034	八重巻3885の2	平瓦・縄目	一枚作り?
035	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
036	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
037	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ	桶作り・Aタイプ
038	八重巻3885の2	平瓦・枠板ナシ	一枚作り
039	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
040	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ	
041	八重巻3885の2	平瓦・枠板	
042	八重巻3885の2	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り

VII 出土瓦

No	採集地	種類・特徴	備考
043	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
044	八重巻3885の2	軒丸瓦・型式不明	一本作り
045	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板ナシ	桶作り・Aタイプ
046	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
047	八重巻3885の2	平瓦・格子目ナデ消シ	桶作り
048	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	
049	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ(格子目)・枠板	桶作り・Aタイプ
050	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
051	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
052	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
053	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
054	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
055	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
056	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ(格子目)・粘土板合せ目	桶作り
057	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
058	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
059	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板ナシ	桶作り?
060	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
061	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り・Aタイプ
062	八重巻3885の2	丸瓦・縦ケズリ横ナデ	
063	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
064	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
065	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
066	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り・Aタイプ
067	八重巻3885の2	平瓦	
068	八重巻3885の2	平瓦の可能性が高い・横ナデ	
069	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板ナシ	一枚作り
070	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
071	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
072	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	
073	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	タール付着
074	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ	桶作り
075	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
076	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板ナシ	一枚作り
077	八重巻3885の2	平瓦	桶作り?
078	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
079	八重巻3885の2	平瓦・凹凸面ナデ消シ?	桶作り
080	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
081	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
082	八重巻3885の2	丸瓦不明・枠板ナシ	
083	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
084	八重巻3885の2	丸瓦・縁目スリ消シ	
085	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ	桶作り
086	八重巻3885の2	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り
087	八重巻3885の2	平瓦・縁目・枠板ナシ	一枚作り
088	八重巻3885の2	丸瓦・横ナデ	
089	欠		
090	欠		

No	採集地	種類・特徴	備考
091	雉子ヶ尾	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
092	苅畠	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
093	苅畠	平瓦・縄目・枠板	桶作り
094	苅畠	平瓦・縄目・枠板	桶作り
095	苅畠	平瓦・縄目・枠板	桶作り
096	苅畠	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
097	苅畠	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り・文字瓦（文字未読）
098	苅畠	平瓦・縄目・枠板	桶作り・四枚重ね（窓内溶着）
099	八重巻3976	丸瓦	タール付着
100	八重巻3976	軒丸瓦・巴紋	
101	八重巻3885-2	丸瓦・ヘラケズリ	
102	八重巻3885-2	丸瓦・横ナデ	
103	八重巻3976	軒丸瓦Ⅲ式？	一本作り・B・C
104	八重巻3885-2	丸瓦・横ナデ	
105	八重巻	軒平瓦・三重弧紋IIKB式	B・C
106	八重巻3885-2	丸瓦・横ナデ	
107	八重巻3967	平瓦・格子目	桶作り
108	八重巻3976	丸瓦・横ナデ	
109	八重巻3976	丸瓦・横ナデ・枠板	桶作り
110	八重巻3913アラク峯	平瓦・縄目・枠板ナシ	一枚作り
111	八重巻3976	平瓦・格子目消シ・枠板	桶作り
112	八重巻3976	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り・Aタイプ
113	八重巻3976	平瓦・横ナデ・枠板	桶作り・Aタイプ
114	八重巻	軒丸瓦ⅣA式	A・B・C
115	八重巻3976	軒丸瓦ⅣA式	B・C
116	八重巻3976	軒平瓦・三重弧紋IIKC式	桶作り・B・C
	ふるさと学習館		
	下秋間八重巻3976	軒丸瓦ⅣBa式	A・B・C
	八重巻3885-2	平瓦	「七」銘文字瓦・一枚作り

A. 田島伊作氏掲載写真的瓦「碓井郡秋間村の古瓦発見記」に掲載された軒瓦

B. 安中市史 図471に掲載された軒瓦

C. 川原嘉久治氏「西上野における古瓦散布地の様相」第40図に掲載された軒瓦

参考

・秋間古窯跡群

- 森田秀策『安中市誌』1964（昭39）
- 飯田陽一・千田茂雄『安中市史』2001（平13）
- 大江正行「秋間古窯跡群」「群馬県遺跡大辞典」1999（平11）
- ・八重巻窯
 - 田島伊作「碓水郡秋間村の古瓦発見記」「上毛及上毛人」209-1934（昭9）
 - 住谷 修「山王と秋間の瓦」「上毛及上毛人」284-1940（昭15）
 - 森田秀策「(3) 八重巻窯跡」「安中市誌」1964（昭和39）
 - 川原嘉久治（@東谷津窯跡支群）「西上野における古瓦散布地の様相」「研究紀要」10 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992（平4）
 - 飯田陽一「八重巻遺跡」「安中市史」2001（平4）
 - 上毛新聞2009年7月30日記事 上野国分寺軒丸瓦M001

VII 出土瓦

・菟棚遺跡

- 1 田島伊作「碓氷郡秋間村の古瓦発見記」「上毛及上毛人」209 1934(昭9)
- 2 森田秀策「菟棚遺跡について」「安中教育」7卷 1966
- 3 森田秀策「安中市東秋間瓦古窯発掘調査概報」「史学会報」32 群馬大学史学会 1966
- 4 飯田陽一・千田茂雄「菟棚遺跡」「安中市史」同前

註

1. 山崎信二「中世上野・下野の瓦」「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究 2000
2. 斎原和彦「山王庵寺出土（放光寺）銘文字瓦をめぐって」「群馬文化」288 2006
3. 前橋市教育委員会「山王庵寺第6次発掘調査報告書」1980
4. 八重巻窯の発掘調査については『安中市誌』93頁に発掘調査時の写真が見られ、『安中市史』第4巻に1957年に群馬大学によって長さ5mの窯体1基が発掘されたと記されている。また、同書「菟棚遺跡」の項で、1965年、群馬大学によって2基の窯体が発掘されたと記し、発掘された窯の平面・断面の見取り図が挿入されている。また、森田氏による『安中教育』の記事は菟棚窯跡2基の調査報告である。
5. 古窯の分布と重なって、秋間地区には群集墳57基が踏査されている。このうち、古墳の内容が明らかになっているものでは7世紀後半を中心とした例が多いという。(右島和夫『安中市史 第2巻 通史編』2003)。秋間古窯は7世紀初頭の創業と考えられており、古墳の被葬者たちが古窯の操業にあたったものだろうという。

VIII その他の遺構と遺物

1 壁穴住居跡と出土遺物

H-41号住居跡 (Fig.31 PL.13)

位置 38トレンチの南西隅 X126、S134グリッド 主軸方向 不明 形状等 調査区内で竈と東辺の一部を検出。規模は不明。現壁高40cm前後を測る。面積 不明 床面 不明。柱穴・周溝 不明。竈 東壁に構築され。主軸方向N-68°-Eを測る。全長1.83m、最大幅(0.7)m、焚口部幅0.4m前後を測る。構築材は灰褐色粘質土を用い、燃成部中央に支脚として川原石を設ける。左袖先端部に長胴甕を逆位に設置する。煙道部は東壁を1.25mほど削り貫き、径20cmの煙出し口を開ける。煙道の側面と煙出し口は焼土化する。重複 H-42・43号住居跡と重複し、H-43号住居跡より新しく、H-42号住居跡より古い。出土遺物 竈内の上面から土師器甕片等が出土し、左袖先端部の長胴甕(1)を図示した。時期 出土した遺物から6世紀代半～後半に帰属すると思われる。

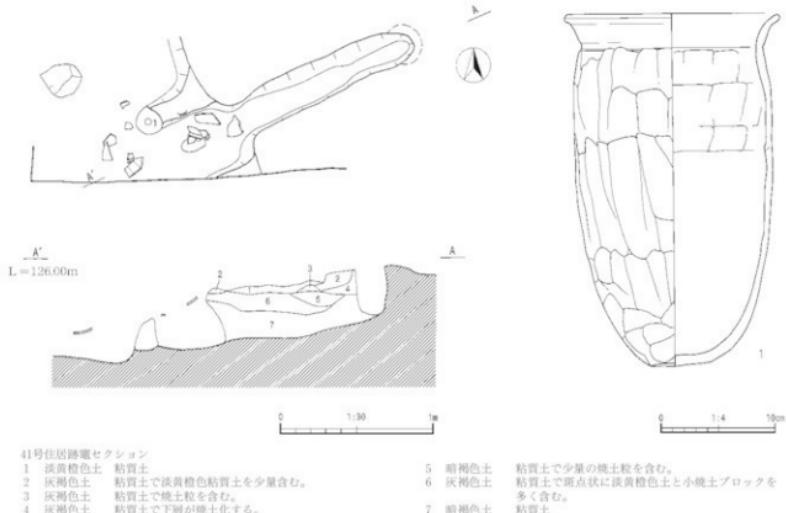


Fig.31 H-41号住居跡・出土遺物

Tab.13 H-41号住居跡出土遺物観察表

No	器種名	出土 部位	①C径 ②幅	③高さ	④底面 ⑤心窓 ⑥窓有無	器種の特徴・整形・調製技術	登録番号	備考
1	土師器 甕	左袖 先端	①38.2 ②29.9	③5.0	④細粒 ⑤灰褐色 ⑥心窓 ⑦完形	口縁部はくの字形に屈曲し、脚部との変換点に弱い接点を成す。口縁部横断で後縫合、底部付近で側位の割削を施す。	22	

H-42号住居跡 (Fig.32 PL.13)

位置 38トレンチの南西、X127、S134グリッド 主軸方向 N-85°-Eを測る。形状等 方形を呈すると考

VII その他の遺構と遺物

えられる。面積 不明 床面 窟前面は堅密面が広がる。柱穴・周溝 未検出。窺 東壁に構築され、構築材に使用した平瓦片が見られる。燃成部は東西75cm、南北40cmのコの字状に張り出し、煙道部はさらに30cmほど舌状に突出する。全長70cm、最大幅95cm、焚口部幅65cmで主軸方向はN-82°-Eを測る。貯蔵穴 南東隅に設けられ、南北に長い方形を呈し、長軸70cm、短軸55cm、深さ40cmを測る。重複 H-41・43号住居跡と重複し、両者より新しい。出土遺物 窟内と前面に瓦片、貯蔵穴から出土し、高台椀（1・2）を図示した。時期出土した遺物から9世紀代に帰属すると思われる。備考 43・41号住居跡と重複し、両者より新しい。

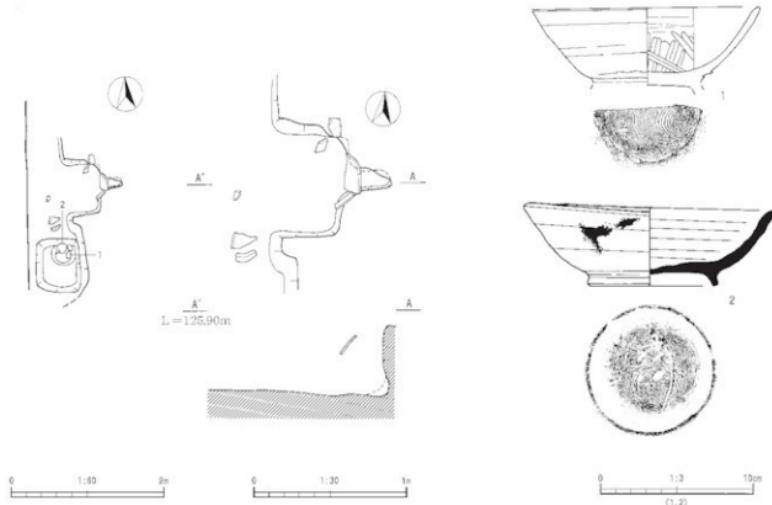


Fig.32 H-42号住居跡・出土遺物

Tab.14 H-42号住居跡出土遺物観察表

No	器種名	出土 位相	①径 寸	②高 度	③焼 成 条件	器種の特徴・整形・調製技術	登録番号	備考
1	土師器 高台椀	窺跡次	①14.6 ②5.0 ③—	④—	⑤調製 ⑥素化焰 ⑦にい黄焰 ⑧—	高台は剥がれ、底部に回転系切り未調整。内部は黒色處理で、無釉時代の研磨底を施す。	1	
	須恵器 高台椀	窺跡次	①36.1 ②5.3 ③8.0	④—	⑤調製 ⑥還元焰 ⑦灰白 ⑧空窓	短く直立気味の高台を付し、緩やかに内凹する体部に移行する。口縁部に歪みがある。外側面にタール状の付着物。	5	

H-43号住居跡 (Fig.34 PL.13)

位置 38トレンチの南方 X126、S133~134グリッド 主軸方向 N-64°-E 形状等 方形を呈すると考えられ、窺を設置する東辺と北辺の一部を検出した。東西(3.32)m、南北(4.72)m、現壁85.5cmを測る。面積(11.07)m² 床面 平坦な堅密面が全面に広がる。柱穴 北東隅と貯蔵穴の南方で4ヶ所検出され、30~40cmの円形で、深さ20~40cmを測る。周溝 窺左袖部の東壁から北壁の一部に連続する。幅30cm前後、深さ10cm前後を測る。窺 東壁に位置し、灰褐色粘土により構築され、全長(112)cm、最大幅92cm、焚口部幅38cm、主軸方向N-64°-Eを測る。煙道部は東壁を割り貫いたトンネルと考えられる。貯蔵穴 窺の南方70cmほどに設けられ、形状は70cm前後の方形、深さ96cmを測る。内部より2点の土師器環と須恵器高环形器台の脚部片が出土。出土遺物 窺の焚口部、右袖部、貯蔵穴で検出された。土師器 (1)、須恵器蓋 (2・3)、土師器環 (4~7)、

1 積穴住跡と出土遺物

貯蔵穴覆土中より検出された須恵器高环形器台の脚部片(8)を図示した。 時期 出土した遺物から6世紀代前半と考えられる。 備考 南西部で本住跡より新しい40・41号住跡と重複する。

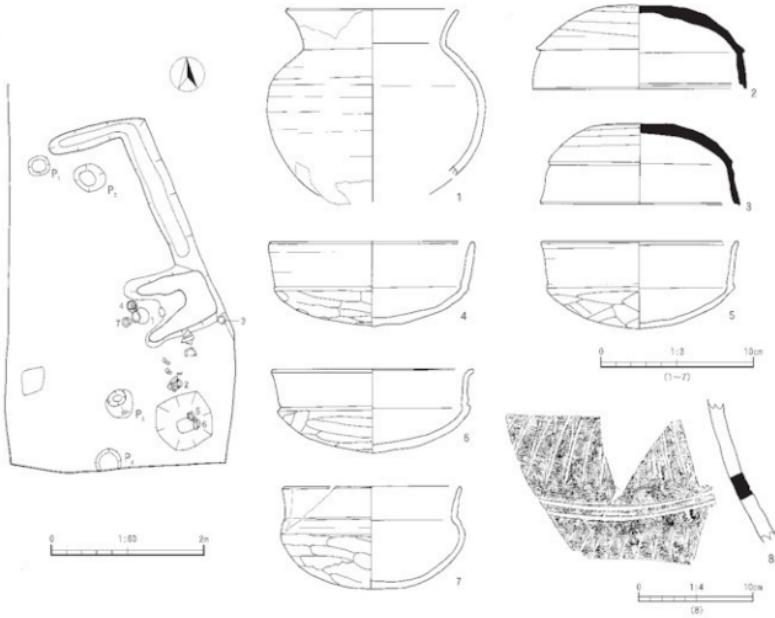


Fig.33 H-43号住跡・出土遺物

Tab.15 H-43号住跡出土遺物観察表

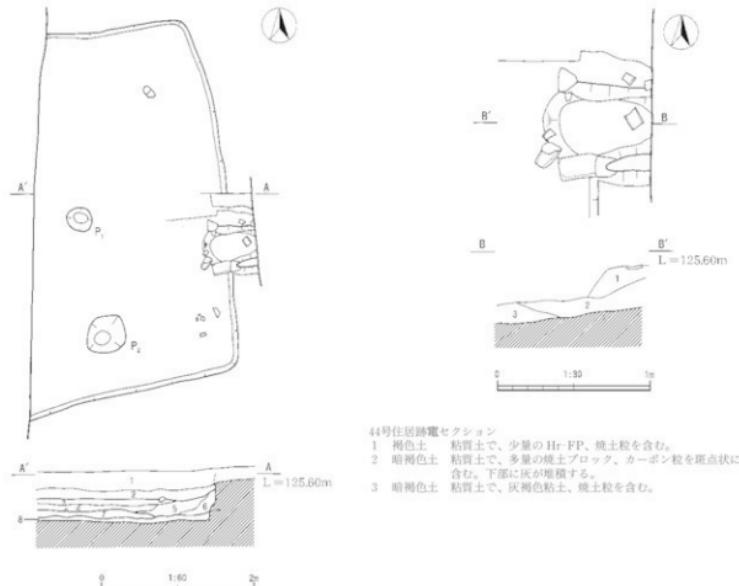
No	器種名	出土 場所	①G径 ②底径	③高 さ	④壁厚 ⑤底厚 ⑥底存度	断面の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 環	竪前回 ③	①34.7 ②(16.7)	③—	④薄 ⑤濃化焰 ⑥にい黄 ⑦底厚欠	球形の脚部をなし、口縁部はやや外反して開く。脚部中位に脚部削除孔	1	
2	須恵器 蓋	床面 ③—	①13.7 ②—	③5.3	④稍 ⑤濃化焰 ⑥灰白 ⑦口は完形	口縁部は内面気味に直立し、口沿部内側に一段を施す。天井部との変換点に棱形形成。口縁部～内面横擦で、天井部回転割れあり。	9	
3	須恵器 蓋	床面 ③—	①12.8 ②—	③5.2	④中 ⑤濃化焰 ⑥稍 ⑦口は完形	口縁部はほぼ直立し、口沿部内側に軽い凹を施す。天井部との変換点に棱形形成。口縁部～内面横擦で、天井部回転割れあり。	4	
4	土師器 環	竪前回 ③—	①13.0 ②—	③5.3	④中 ⑤濃化焰 ⑥口は完形	底部～体部直ぐ済ぬ。口縁部直立気味とし、やや開く。口縁部変換点に棱形形成。口縁部～内面横擦で、底部～体部手付り置割り。	2	
5	土師器 環	貯蔵穴 ③—	①12.4 ②—	③5.5	④中 ⑤濃化焰 ⑥稍 ⑦口は完形	底部直立気味とし、やや開く。口縁部～内面横擦で、底部～体部手付り置割り。	11	
6	土師器 環	貯蔵穴 ③—	①12.7 ②—	③5.3	④中 ⑤濃化焰 ⑥にい ⑦口は完形	底部～体部直ぐ済ぬ。口縁部直立気味とし、やや開く。口縁部変換点に強い棱形形成。口縁部～内面横擦で、底部～体部手付り置割り。	12	
7	土師器 環	竪前回 ③—	①11.3 ②—	③6.6	④中 ⑤濃化焰 ⑥にい ⑦口は完形	扁平気味の底部～体部済ぬ。体部上位に最大径を有し、内傾して口縁部に移行。口縁部は直立気味とする。底部～体部手付り置割り。	3	
8	須恵器 高环形器台	貯蔵穴 覆土 ③—	①— ②—	③—	④中 ⑤濃化焰 ⑥青黒 ⑦脚部片	2本1組の脚部で上下を区画する。区画の上下に棱形状工具で墨状文を連続させ、上段が長方形、下段が三角形の透かし孔を施す。		

H-44号住跡 (Fig.34・35 PL.13・14)

位置 38トレント中央部 X126, S132~133グリッド 主軸方向 N-76°E 形状等 形状は方形を呈する。

VII その他の遺構と遺物

規模は東西3.18m、南北4.80m、現壁高26cmを測る。面積 11.50m² 床面 二面確認された。新住居跡は標高125.30mの平坦面を形成し、その下約20cmに古い住居跡の床面があり、多少の凹凸がある。柱穴 2ヶ所に検出された。P₁は中央にあり、30cm前後の円形で深さ40cm、P₂は南壁沿いにあり、50cm前後の隅丸方形を呈し、深さ56cmを測る。竈 東壁中央やや南寄り。全長60cm、最大幅88cm、焚口部幅33cm、主軸方向N-82°-Eを測る。右袖先端に設けられた凝灰岩は新住居構築に際して、半分程カットされている。出土遺物 全体に散在して出土し、須恵器壺(1~4)、須恵器高台梶(5)、須恵器蓋(6・7)、須恵器瓶(8)、土師器壺(9~11)、須恵器小型甕(12)、須恵器高壺(12)、暗文を施す土師器壺(14)と白玉(15)を図示した。なお、8と10は住居東辺の外側の出土であり、13の高壺は混入遺物である。時期 新住居跡に伴う遺物が多く、覆土と出土遺物から8世紀前半と考えられる。備考 本住居跡は新旧2面の床面から、重複か拡張された可能性が考えられる。



- 44号住居跡セクション
- 1 暗褐色土 下層より焼土、炭化物を多く含む。(44H-新)
 - 2 暗褐色土 焼土、炭化物、Hr-FP、As-Cを含み、やや粘質。(44H-新)
 - 3 暗褐色土 2層より明るく、Hr-FP、As-Cを含み、全体に締まる。(44H-古)
 - 4 暗褐色土 Hr-FP、As-Cと少量の焼土を含む。(44H-古)
 - 5 暗褐色土 上層より明るく、As-C少ない。(44H-古)
 - 6 褐色土 少量の焼土粒、As-C、地山ブロックを含む。(44H-古)
 - 7 灰褐色土 As-Cを含む。(44H-古の覆土)
 - 8 灰褐色土 粘質土(地山)

Fig.34 H-44号住居跡

H-45号住居跡 (Fig.34 PL.14)

位置 38トレンチの中央やや北 X126、S131~132グリッド 主軸方向 N-85°-E 形状 東・西・北辺の残存が不明確であった。東西(1.70)、南北(2.10)m、現壁高17cmを測る。面積 [3.80]m² 床面 ほぼ平坦。柱

1 壁穴住居跡と出土遺物



Fig.35 H-44号住居跡・出土遺物

VII その他の遺構と遺物

Tab.16 H-44号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①C径 ②幅高 ③底径	①鉢 ②縁高 ③底縁 ④残存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 盤口壺	覆土	①(16.2) ② 2.7 ③(32.0)	①鉢形 ②深元縁 ③底焼	輪郭整形、底部回転削り調整。内外縁に火摩痕。底部は上方で体部は直立気味に内凹する。	68	
2	須恵器 壺	覆土	①(15.0) ②(2.3) ③—	①鉢形 ②深化焰 ③底焼	輪郭整形、底部回転削り調整。外縁立上り部回転削り。体部は短く内凹する。	—	
3	須恵器 壺	覆土	①(13.0) ② 4.5 ③—	①鉢形 ②深元縫 ③底白 ④1/2	輪郭整形、底部6cm程削り調整。外縁立上り部回転削り。	73	
4	須恵器 壺	覆土	①(19.6) ② 3.2 ③(6.9)	①鉢形 ②深元縫 ③底焼	輪郭整形、底部回転へフ削り調整。外縁立上り部回転削り。口沿部に剥がれ。	94	
5	須恵器 高台壺	床面	①(16.2) ②(4.3) ③(31.9)	①鉢形 ②深元縫 ③底白 ④4/5	底縁は直角後に直線後に高台に高台を付す。高台の接地面は丸く。体部は直線的で窪く。輪郭整形。	112, 115	
6	須恵器 壺	床面	①(14.4) ② 2.4 ③—	①鉢形 ②深元縫 ③底白 ④1/2	輪郭整形、窓いえりを有し、摘は環状。上面はやや艶な回転削りを施す。	98	
7	須恵器 壺	覆土	①(15.4) ② 3.0 ③—	①鉢形 ②深元縫 ③底焼	輪郭整形、やや扁平な体部。窓いえりを有し、摘は環状。口沿部は斜め回転削りを施す。	—	
8	須恵器 壺	覆土	① 5.0 ②(15.6) ③ 5.6	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④(3.1)完形	斜削りやや丸みだ体部を呈し、口縁部は斜く直立する。輪郭整形、底部へ脚部下まで斜削り調整。	78	遺構外
9	土師器 壺	覆土	①(13.8) ② 4.9 ③ 8.8	①鉢形 ②深化焰 ③(5.1)窓 ④1/2強	不安定な平底から体部直線的に開き、口縁部を外反させる。体部の差削りは横方向。	15, 17	
10	土師器 壺	覆土	①(10.8) ② 3.4 ③—	①鉢形 ②深化焰 ③(5.1)窓 ④(4.8)完形	窓いえりの底部から体部は緩やかに開き、口縁部差削部に窓いえ形形成。底部へ体部は手持ち差削り。	79	遺構外
11	土師器 壺	覆土	①(12.0) ② 3.2 ③—	①鉢形 ②深化焰 ③底焼	窓いえ底から内凹し、口縁部は短く直立気味とする。底部は斜め回転削り。	21	
12	須恵器 壺	覆土	①(20.0) ②(21.8) ③—	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④(4.5)	口縁部は短く外反し、縫部を尖らせる。脚部中央位に最大径をもち、脚の球形削部を呈する。外縁平行叩き、内縁同心の叩き。	26, 27	
13	須恵器 高台壺	覆土	①— ②(6.8) ③(11.4)	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④(4.7)1/2	丸く基部に膨らむ肩部の透かし孔を4ヶ所施す。脚先端の外側は浅く置け。	—	乱入遺物
14	土師器 壺	覆土	①— ②— ③—	①鉢形 ②深化焰 ③(5.1)窓	平底より体部は直線的に斜方向に開く。内縁立上がり部に窓部、体部に放射状の窓文を施す。	—	
15	石製品 臼玉	覆土	φ1.1cm 厚さ 6mm 重さ 1.1g	—	—	—	123

穴 P₁～P₄の4ヵ所に検出された。P₁は30cm前後の円形で深さ15cm、P₂は30×25cmの梢円形で深さ6cm、P₃は40cm前後の円形で深さ10cm、P₄は長軸60cm、短軸40cmの方形で深さ15cmを測る。竈 東方の焼土と炭化物の分布からこの部分に存在した可能性が考えられる。出土遺物 床面とP₃から出土し、須恵器高台壺(1～3)、土師器小型甕(4)、羽釜(5・6)を図示した。時期 出土した遺物から10世紀代と思われる。

Tab.17 H-45号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①C径 ②幅高 ③底径	①鉢 ②縁高 ③底縁 ④残存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 高台壺	P 3	①(15.8) ② 6.6 ③ 9.3	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④2/3	ハの字状に開く高台を付す。底部は回転せ切りで、立上がり部は斜め回転削り。	43	
2	須恵器 高台壺	覆土	①(13.4) ② 5.0 ③ 6.7	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④1/2	短い角状の高台を付す。底部は回転せ切り。体部は内凹して上り、中位で外反して開く。	—	
3	須恵器 高台壺	床面	①(13.4) ② 5.0 ③ 7.8	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④1/4	短い太高の窓を付す。底部は斜めに窓いえりの字口縁に移行する。脚部は斜め回転削り。	27	
4	土師器 小型甕	P 3	①(10.6) ②(8.5) ③ 7.8	①鉢形 ②深化焰 ③(5.1)窓 ④(4.5)脚	直立気味と窓する脚部よりの字口縁に移行する。脚部上位は横、中位下は縫の差削り。	40, 41	
5	土師器 羽釜	床面	①(19.6) ②(14.1) ③—	①鉢形 ②深化焰 ③(5.1)窓 ④(4.7)脚	脚部上位で窓り、口部部周ぐ内側する。脚は小さく上方に突出する。脚部中位下は縫の差削り。	16, 17, 22, 23	
6	須恵器 羽釜	床面	①(17.3) ②(4.6) ③—	①鉢形 ②深元縫 ③底焼 ④(4.7)脚	内窓より脚部から縫部は直線的に斜方向に開く。内縁立上がり部に窓部、体部に放射状の窓文を施す。	9, 32, 42	

H-46号住居跡 (Fig.12)

位置 38トレント X126、S131～132グリッド 主軸方向 [N-67°E]。形状等 M-1よって大半を破壊され、北西隅から西辺の一部が残存する。東西(4.48)m、南北(1.94)m、現壁高37.5cmを測る。面積 (4.46)m² 床面 残存部はほぼ平坦。竈 不明。重複 北方でH-47と重複し、本住居跡が古いと考えられる。出

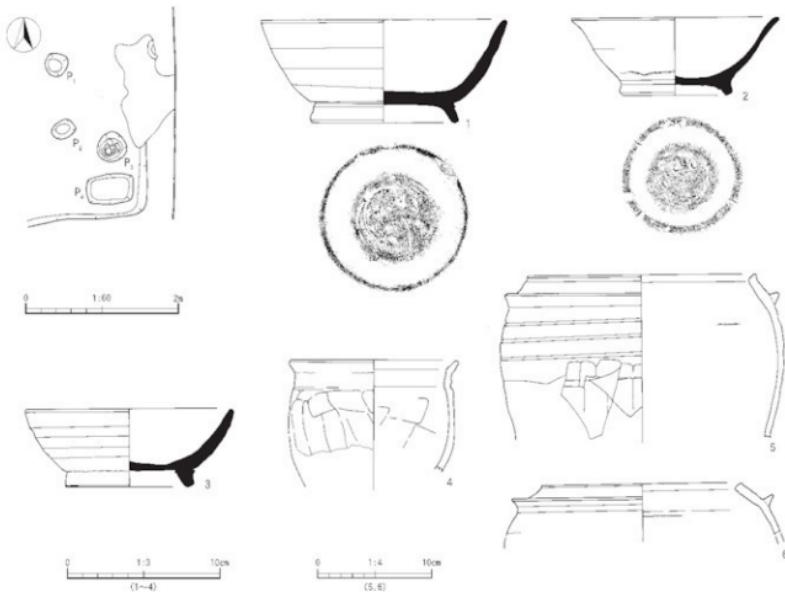


Fig.36 H-45号住居跡・出土遺物

土遺物 僅かに北西の床面で土師器片を検出した。
時期 詳細は不明であるが、出土遺物から6世紀前半とみられる。

H-47号住居跡 (Fig.12)

位置 38トレイン X126、S130~131グリッド 主軸方向 [N-73°E]。形状等 H-46と同様に大半をM-1によって破壊され、北西隅から西廻の一部が残存する。東西(0.58)m、南北(2.40)m、現壁高は南西部で36cm。面積 (3.46)m² 床面 残存部はほぼ平坦。柱穴 北西隅の一角所に検出されたが、本住居跡かH-48に伴うかは不明。周溝 不明。竪 不明。重複 北西部でH-48、南方でH-46と重複し、本住居がH-48より古いがH-47より新しいと考えられる。出土遺物 覆土中より僅かな土器片が出土。時期 H-48より古い6世紀後半代と思われる。

H-48号住居跡 (Fig.12)

位置 38トレンチの北西部 X126、S130グリッド 主軸方向 N-64°-E 形状等 東方がM-1により壊され、西方が調査区外となるが方形形状を呈すると考えられる。東西(2.06)m、南北(2.98)m、現壁高46cmを測る。面積 (4.5)m² 床面 ほぼ平坦。竪 不明。重複 南東部分でH-47と重複するが、本住居跡が新しい。出土遺物 僅かに床面から土師器の片断等が出土した。時期 詳細は不明であるが、出土遺物から、7世紀代と思われる。

VII その他の遺構と遺物

H-49号住居跡 (Fig.37 PL.14)

位置 39トレント西方 X110~112、S47~49グリッド 主軸方向 N-85°-E 形状等 調査区内で竈が設置されている東辺、西・南辺の一部を調査した。隅丸方形形状を呈すると思われる。東西4.20m、南北3.6m以上、現壁高37cmを測る。面積 (12.32)m² 床面 竈前面に堅緻面が広がり、ほぼ平坦。柱穴 未検出。周溝 南西コーナー部に連続し、幅20cm前後、深さ5cmを測る。竈 東壁中央付近に構築され、灰褐色粘質土を構築材としている。未調査であるが、粘質土範囲から主軸方向N-86°-E、全長(124)cm、最大幅(136)cmを測る。貯蔵穴 南東隅に設けられ、52×50cmの円形、深さ65cmを測る。重複 なし。出土遺物 竈前面に出土した土器破片(1)と須恵器の破片、覆土中より円面鏡?(2)が出土した。時期 出土した遺物から6世紀と思われる。

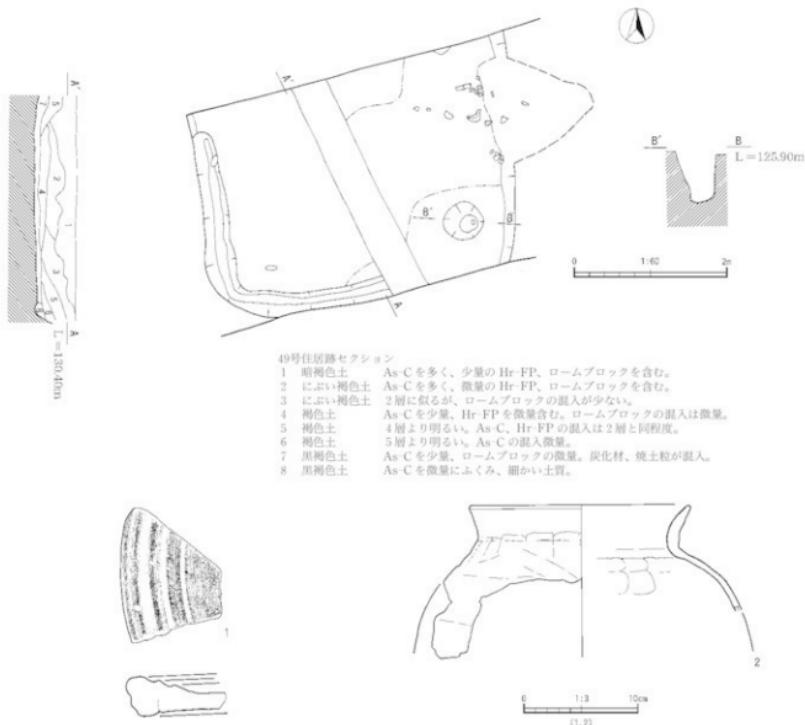


Fig.37 H-49号住居跡・出土遺物

Tab.18 H-49号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①寸径	②断面 ③底径	④断面 ⑤底径	⑥断面 ⑦底径	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	瓦質	覆土	① — ② — ③ —	④ —	⑤ —	⑥ —	表面は口縁部から徐々に内側に向けて低くなる三重の凹文が観る。側面の下端に指圧圧痕と接合痕が残る。		假?
2	土師器 壺	覆土	①18.7 ②(13.0) ③ —	④ —	⑤ —	⑥ —	球形状の底部を呈すると考えられ。口縁部は短くやや外反し、口部をとがり気味とする。颈部～胴部上半を縦割り。	9,11	

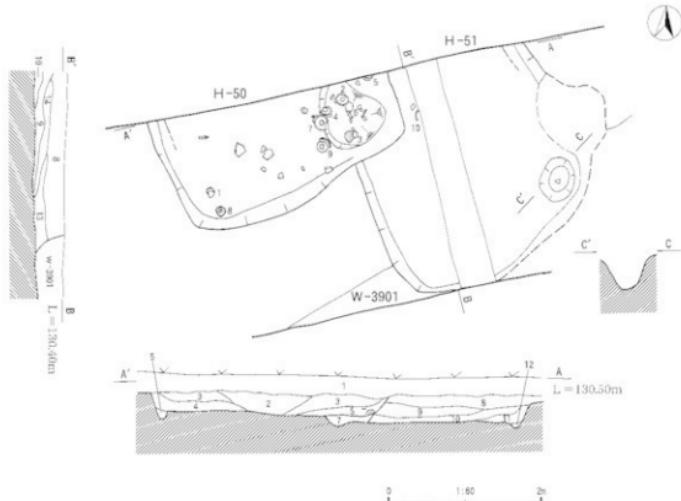
1 壁穴住居跡と出土遺物

H-50住居跡 (Fig.38・39 PL.14)

位置 39トレンチ中央付近 X114、S48グリッド 主軸方向 N-65°E 形状等 住居の南半分ほどを調査した。東西3.12m、南北(1.83)m、現壁高62.5cmを測る。面積 (4.02)m² 床面 ほぼ平坦。柱穴 未検出。竈 東壁に構築されたと考えられる。貯蔵穴 南東隅に設けられ、80cm前後の歪んだ円形で浅い皿状を呈し、深さ18cmを測る。重複 本住居跡より古い51号住居跡と東方で重複する。出土遺物 貯蔵穴と南壁沿いに完形の遺物が多く出土した。須恵器壺(1)、須恵器高台碗(2~5)、須恵器高台皿(6~8)、灰釉陶器段皿(9)を図示した。時期 9世紀頃と思われる。

H-51号住居跡 (Fig.38・39 PL.14)

位置 39トレンチ中央付近 X114・115、S47・48グリッド 主軸方向 N-69°E 形状等 住居の南西隅と北辺が調査区外。東西2.92m、南北(3.22)m、現壁高28cmを測る。面積 (7.72)m² 床面 ほぼ平坦。柱穴 未検出。竈 東壁の中央付近に構築材である灰褐色粘土を検出した。貯蔵穴 南東隅に設けられ、60×45cmの楕円形、深さ37cmを測る。重複 西辺で50号住居跡、南辺の上面をM-1が走行する。出土遺物 貯蔵穴と50号住居跡と重複する付近で須恵器と土師器が出土。土師器壺(10)を図示した。時期 50号住居跡より古い8世紀代と考えられる。



50・51号住居跡セクション

- | | | | |
|----------|---|-----------|--|
| 1 細色土 | Ae-B を含む。 | 8 暗褐色土 | Ae-C を多く、Hr-FP を微量に含む。粘性なくボソボソした土質。 |
| 2 暗褐色土 | Ae-B、埴土粒を微量、As-C を少量含む。粘性や
や有り、ボソボソした土質。 | 9 黒褐色土 | As-C を少量、Hr-FP を微量に含む。ロームブ
ロックと褐色土を少量混ざる。 |
| 3 暗褐色土 | 2層より細い、As-C を多く、Hr-FP を微量に含
む。やや粘性有り。 | 10 褐色土 | As-C を少量、ロームブロックを微量に含む。 |
| 4 褐色土 | As-C を少量、炭化材を極微量含む。 | 11 黑褐色土 | As-C を少量、ローム程を微量に含む。 |
| 5 細色土 | As-C を少量、炭化材、埴土粒を多く含む。 | 12 にじみ褐色土 | 6層に似る。 |
| 6 にじみ褐色土 | ローム粒を多く含み、細かい土質。 | 13 黒褐色土 | 粗い土質で、As-C を微量に含む。 |
| 7 暗赤灰色土 | 炭化材、埴土粒を多く、灰は微量に含む。 | 14 黒褐色土 | やや細かい土質で、As-C を多く、Hr-FP を微量
に含む。 |

Fig.38 H-50・51号住居跡

VIII その他の遺構と遺物

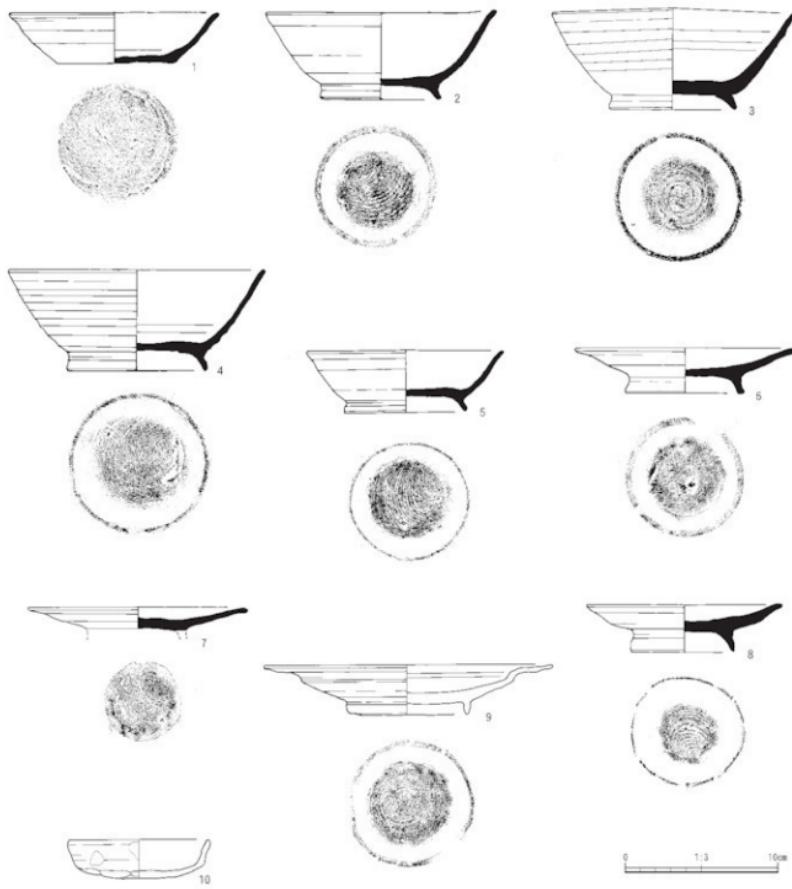


Fig.39 H—50·51号住居跡出土遺物

Tab.19 H-50·51号住居跡出土遺物觀察表

No.	細胞名	出材	①頂部 ②側面			③側土 ④側面 ⑤側面存度	細胞の特徴・整型・調節技術	登録番号	備考
			①頂土	②側面	③側土				
1	須毛根 杯	床面	⑩(13.6) ③(3.7)	③(3.3) ③(7.5)	①細胞 ③伏化 ④死化	②漏斗形 ③死化	底部は回転系切り未調整。体部は直線的に開く。	2	
2	須毛根 高台輪	貯藏穴	⑪(14.8) ③(7.4)	②(5.8) ③(4.0)	①中粒 ③細胞 ④死化	②漏斗形 ③黒墨 ④完熟	短く直角気味の輪台を付す。体部は円柱状に内し、口縁部は波状や反るが、底部は回転系切り未調整。	17	
3	須毛根 高台輪	貯藏穴	⑪(15.6) ③(7.9)	②(6.5) ③(4.0)	①中粒 ③(に)漏斗形 ④死化	②漏斗形 ③(に)漏斗形 ④死化	ハの字形に高台を付す。体部は直線的に斜方に開く。口縫部はやや歪む。底部は回転系切り未調整。	22	
4	須毛根 高台輪	貯藏穴	⑪(16.4) ③(8.7)	②(6.5) ③(4.2)	①細胞 ③死化 ④死化	②漏斗形 ③死化 ④死化	高台外側が丸みを帯びる。底部は回転系切り未調整。体部は二つの谷のみで直線的に開く。	23	
5	須毛根 高台輪	床面	⑪(12.6) ③(7.7)	②(4.0) ③(7.7)	①中粒 ③死化 ④死化	②漏斗形 ③死化 ④完熟	底部は回転系切り未調整。底部外側と体部の外側に未が付着。底部内面には凹溝があることから呼称か?	29	

1 積穴住居跡と出土遺物

No.	器種名	出土 層位	①口径 ②底径	②高さ	①削土 ②焼成 ③色調 ④焼成度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
6	須恵器 萬古皿	貯蔵穴	①14.2 ②7.4	②2.9	①彫刻 ②漆元絞 ③灰白 ④0/2	ハの字状に開く高台を付す。体部は緩やかに内湾し、口縁部を水平気味とする。底部は回転未切り未調整。	15, 20	
7	須恵器 萬古皿	貯蔵穴	①14.2 ②—	②(1.5)	①彫刻 ②漆元絞 ③黄灰 ④萬古	高台は削がれる。体部は水平気味に開く。底部は回転未調整。底部外面に墨書きがあるが判読不能。	12	
8	須恵器 萬古皿	床面	①12.6 ②6.5	②3.1	①彫刻 ②漆元絞 ③黄灰 ④完形	文ある高台で先端部が尖る。体部は緩やかに口縁部を水平気味とする。底部は回転未切り未調整。	3	
9	灰釉陶器 段皿	床面	①18.6 ②—	②3.2	①彫刻 ②彫刻 ③灰 ④0/3	体部中位の外側面に明顯な段を有し、口縁部は水平気味に開く。底部は回転未削り整形。底部内面に径8cmの重焼痕有。	11	光ヶ丘1号窯式
10	土師器 环	床面	①8.8 ②—	②2.4	①彫刻 ②焼成焰 ③にいき 楊 ④完形	底盤は平底氣味とし、体部は内側して立てる。中位で削れ。口縁部は直立気味とする。口縁部には油ヶ穴付着する。	31	

H-52号住居跡 (Fig.12)

位置 39トレンチ東方 X118、S 47グリッド 主軸方向 N-37°-E 形状等 調査区内で住居跡の北東隅部分を調査。東西(1.90)m、南北[1.5]m、現壁高1cm前後を測る。面積 (0.86)m² 床面 調査部分は住居跡の堅緻面と考えられ、その上面まで耕作が及んでいる。柱穴・竈・貯蔵穴 未検出。出土遺物 なし。時期不明。

H-53号住居跡 (Fig.12)

位置 39トレンチ東方 X118-119、S 47グリッド 主軸方向 N-53°-E 形状等 住居の北東隅部分を調査。東西(2.10)m、南北0.95m、現壁高27cmを測る。面積 (1.07)m² 床面 調査部分では平坦。周溝 調査部分で全周し、幅20cm前後、深さ5cm前後を測る。柱穴・竈・貯蔵穴 未検出。出土遺物 なし。時期不明。

H-54号住居跡 (Fig.12)

位置 39トレンチ北東隅付近 X119、S 46+47グリッド 主軸方向 N-43°-E 形状等 住居の南西部分を調査。東西(1.50)m、南北1.82m、現壁高45cmを測る。面積 (0.93)m² 床面 調査部分では平坦。周溝 調査部分で全周し、幅15cm前後、深さ3cm前後を測る。柱穴・竈・貯蔵穴 未検出。出土遺物 僅かに土師器と須恵器の小片が出土した。時期 不明。

H-55号住居跡 (Fig.40)

位置 40トレンチの西北隅 X166、S 49グリッド 主軸方向 ほぼ南北 形状等 南東部を主体として半分掘を調査。東西[2.70]m、南北(1.13)m、現壁高16cmを測る。面積 (3.03)m² 床面 ほぼ平坦。周溝・柱穴 未検出 竈 南壁の中央付近に設置され、南壁より30cm程舌状に張り出す。燃成部中央に支脚として川原石を立てさせ、袖部に川原石を設ける。焚き口部分には炭化物が分布する。主軸はN-165°-E、全長75cm、最大幅90cm、焚口部幅58cmを測る。貯蔵穴 南東隅に設けられた梢円形の掘り込みが考えられる。長軸64cm、短軸50cm、深さ29cmを測る。重複 竈の右袖部分でB-6号掘立柱建物跡の柱穴P₁₃と重複し、本住居が新しい。出土遺物 窟内から土師器甕(1)と貯蔵穴より土師器環(2)、北西部で瓦片等が出土。時期 出土遺物から9世紀代と考えられる。

H-56号住居跡 (Fig.41 PL.15)

位置 40トレンチの西寄り X166・167、S 49・50グリッド 主軸方向 N-88°-E 形状等 トレンチを南側に拡張して全体を検出した。形状は、東西に長い丸井形を呈し、規模は東西4.02m、南北3.10m、現壁高35cmを測る。面積 12.19m² 床面 平坦で堅緻面が広がる。周溝 ほぼ全周し、幅20~25cm、深さ3~5cmを測

VII その他の遺構と遺物

柱穴 未検出 窟 東壁の中央部に設置され、袖先端部に凝灰岩を設け、燃成部には構築材として使用した平瓦、左袖部の前面に長さ40cm幅20cmの凝灰岩の切り石が横たわっていた。主軸はN-89°-E、全長68cm、最大幅115cm、焚口部幅56cmを測る。
貯藏穴 未検出 重複 本住居跡より古いB-5・6号掘立柱建物跡と新しい溝状遺構M-4106が南東部で重複する。
出土遺物 瓦・土師器・須恵器の破片が点在して出土。 窟より出土した置き竈片(1)、床面出土の土師器鉢(2)、土師器壺(3)を図示した。
時期 出土遺物から8世紀後半と考えられる。

H-57号住居跡 (Fig.13)

位置 41トレンチの南 X166、S 54・55グリッド **主軸方向** N-74°-E **形状等** 北辺の一部を調査し、その大半は調査区外となる。東西(3.20)m、南北(1.65)m、現壁高36cmを測る。**面積** (3.88)m² **床面** 溝水がひどく、明確な堅密面は把握できなかった。**周溝・柱穴・窓・貯藏穴** 未検出。**出土遺物** 覆土中より少量の土器片が出土。
時期 不明。
備考 本遺構は住居跡とする明確な根拠に乏しく、溝の可能性も否定できない。

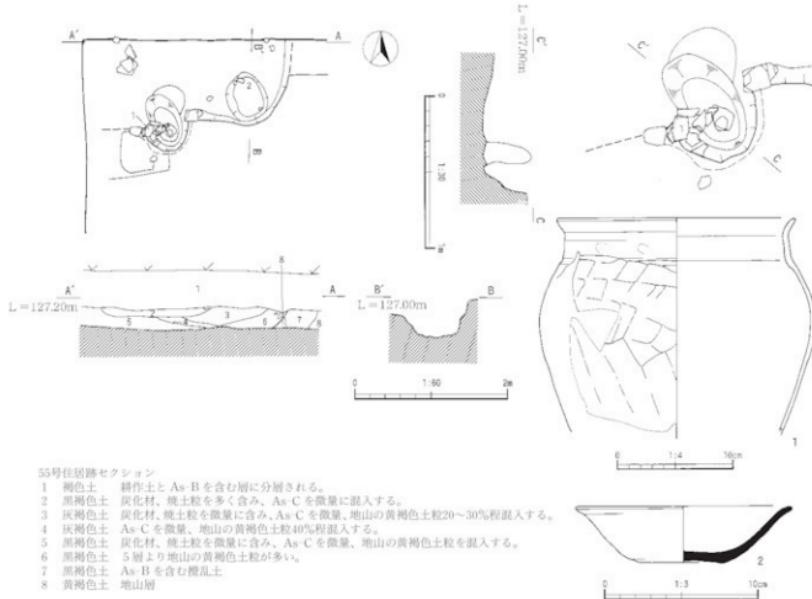
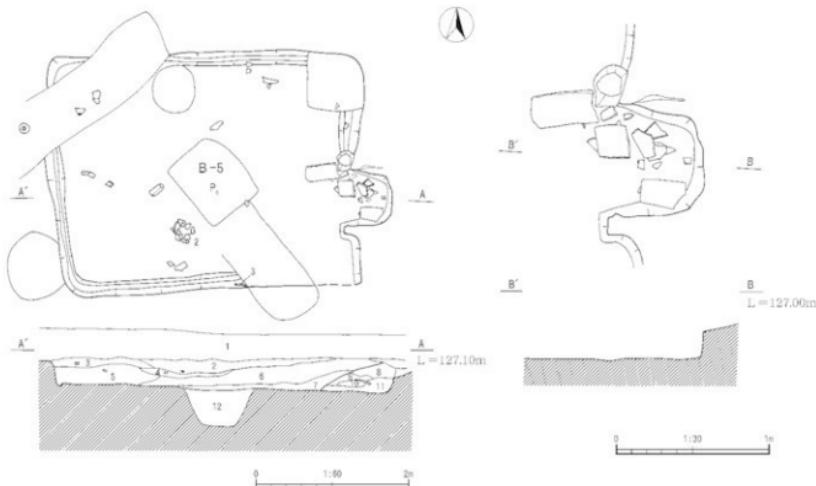


Fig.40 H-55号住居跡・出土遺物

Tab.20 H-55号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 場所	①寸 合		②高 度		③形 態		器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
			①径	②厚	③径	④高	⑤色調	⑥保存度			
1	土師器 裏	窓内	(1)(29.4)	(2)(18.7)	(1)中径	(2)側面	(3)にい焼	(4)1/3	側面部上半で背が張り、口縁下位は直線的に内傾し、上半は外反するコの字口縁。肩部横・下位斜位の削削を施す。	5, 7, 8	
2	土師器 环	窓穴	(1)(18.7)	(2)(3.6)	(1)中径	(2)側面	(3)にい焼	(4)1/3	底部より緩やかに内湾し、口縁部は外反する。底部回転角切りを調整。	6, 1, 2	



56号住居跡セクション

- 1 棕色土 精作土と As-B を含む層に分層される。
- 2 黒褐色土 As-B 混土層。
- 3 黑褐色土 2層より明るく、炭化材・焼土・ローム粒を微量に混入する。
- 4 黑褐色土 炭化材・焼土を極微量含み、ローム粒は3層より多く入る。
- 5 黑褐色土 ローム粒の混入がどの層よりも多い。
- 6 黑褐色土 As-C, ϕ 1 cm程のロームブロックを若干の混入する。
- 7 黑褐色土 6層より若干暗い。ローム粒の混入は微量。
- 8 黑褐色土 6層より明るく、As-C・ロームブロックの混入は微量。電
- 9 床褐色土 粘質土で焼土ブロックを若干含む。電
- 10 床褐色土 粘質土。電
- 11 棕灰色土 土を主体とする。焼土ブロックを多く含み、下層でカーボンが堆積。
- 12 黑色土 ロームブロックと黑色土を互層に突き固めている。B-5号掘建柱建物跡の柱穴P。

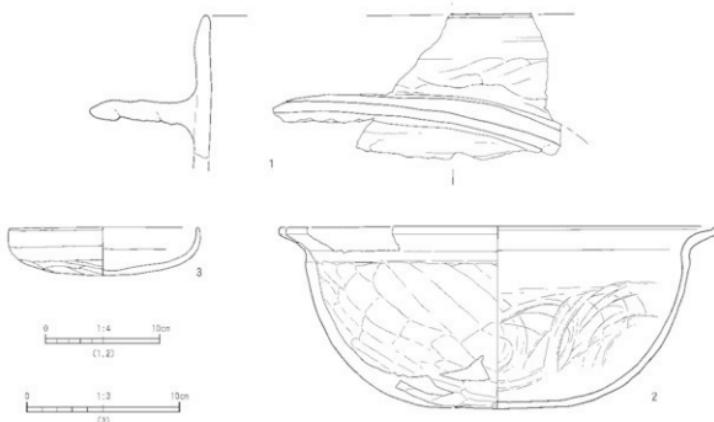


Fig.41 H-56号住居跡・出土遺物

VII その他の遺構と遺物

Tab.21 H-56号住居跡出土遺物観察表

No	器種名	出土 層位	①C位 ③底径	②標高 ④遺存度	①陶土 ②焼成 ③色調 ④口縁部片	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土製品 窯き壺	窓内	① —	②(11.2)	①和粘 ②酸化焰 ③浅黄褐 ④口縁部片	窓口の周縁に3~4本の粘土紐を貼り付けて底とする。残存する底の長辺部が7cmを測る。	23, 29	
2	土師器 鍋形土器	床面	①(37.2) ③ —	②15.6 ④ —	①細粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④1/3	平底から側へ内凹した縁部は水平気味に開き、口部内部が強く突出する。側部外面は斜位削削面、内面は円状の荒削きを連続する。	4, 34	
3	土師器 壺	床面	①(12.0) ③ —	②3.1 ④ —	①細粒 ②酸化焰 ③にいわ ④完形	扁平気味の丸底を呈し、口縁部は直立気味に内済する。底部は手持削削面を施す。	37	

H-58号住居跡 (Fig.42 PL.15)

位置 42トレンチの中央やや西寄り X187~188、S116~117グリッド 主軸方向 N-91°-E 形状等 住居の北半分ほどを調査 東西(2.89)m、南北(1.30)m、現壁高21cmを測る。面積 (3.21)m² 床面 調査部分では平坦。周溝・柱穴・竈・貯蔵穴 未検出。出土遺物 北西隅に潰れて出土した土師器甕 (1) を図示した。

時期 出土遺物から8世紀代と考えられる。

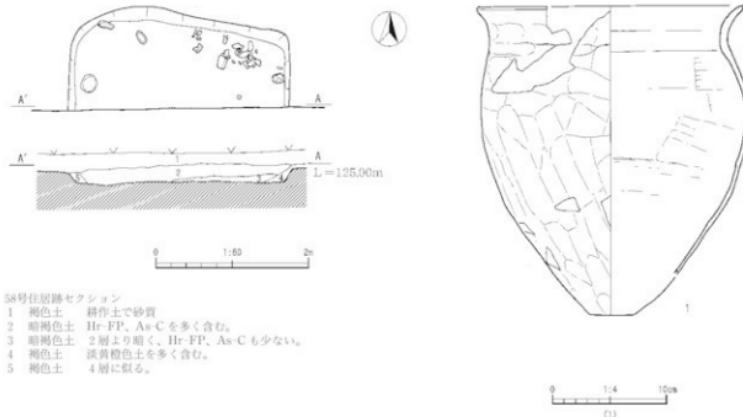


Fig.42 H-58号住居跡・出土遺物

Tab.22 H-58号住居跡出土遺物観察表

No	器種名	出土 層位	①C位 ③底径	②標高 ④底径	①陶土 ②焼成 ③色調 ④口縁部片	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 甕	床面	①22.7 ③(3.8)	②26.4 ④ —	①細粒 ②酸化焰 ③にいわ ④1/2	側部は屈曲の深いコの字状を呈し、側部上半から底部に向けて窄まる。側部上半が傾斜、下半を縦に整形を施す。	1, 2, 4	

H-59号住居跡 (Fig.12)

位置 42トレンチの東端 X190、S116~117グリッド 主軸方向 N-72°-E 形状等 南西隅部分を調査。東西(1.57)m、南北(2.50)m、現壁高17cmを測る。面積 (2.72)m² 床面 ほぼ平坦。周溝・柱穴・竈・貯蔵穴 未検出。出土遺物 須恵器の甕片と土師器壺 (PL.15) が出土した。時期 出土遺物から6世紀代と考えられる。

1 穂穴住居跡と出土遺物

H-60号住居跡 (Fig.43 PL.15)

位置 43トレンチ南方 X147、S110-111グリッド 主軸方向 N-63°E 形状等 北東隅と西壁の一部を検出し、調査区の西壁沿いにローム土の埋土が住居を破壊している。東西(4.32)m、南北(5.0)m、現壁高17cmを測る。面積 (13.09)m² 床面 調査部分では平坦。周溝 検出された壁沿いに廻る。幅20cm前後、深さ12cmを測る。柱穴・竈・貯蔵穴 未検出。出土遺物 調査区の東壁沿いの床面に須恵器高环(1)、中央部分に散在して土師器焼片等と埴輪の小片、覆土から出土した須恵器焼片(2)を図示した。時期 出土遺物から6世紀と考えられる。

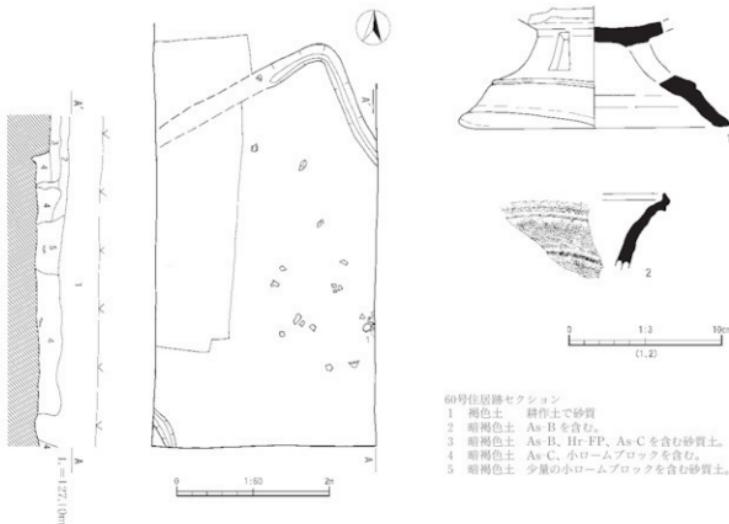


Fig.43 H—60号住居跡・出土遺物

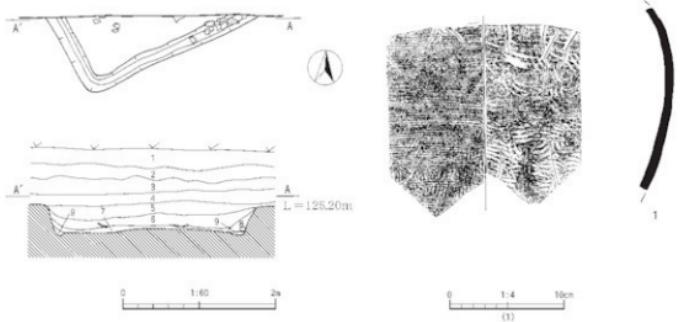
Tab.23 H=60号住居跡出土遺物觀察表

No.	細菌名	出土位	①目群 ②種群	③菌相 ④菌種	⑤細菌 ⑥菌相	⑦成菌 ⑧存有度	菌種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	直頸乳酸菌 環球	床面	① (37.7) ③ 17.4	③細菌 ④灰白 ⑤細菌	② 霉菌 ③ 灰白	⑥ 成菌 ⑧ 存有度	接種地部は大きく垂み、三方に透かし孔を残す。	6.8	
2	直頸乳酸菌	覆土	① — ③ —	①細菌 ②霉菌 ③灰白 ④細菌 ⑤細菌 ⑥菌相 ⑦成菌 ⑧菌種	② 霉菌 ③ 灰白 ④ 菌種 ⑤ 細菌 ⑥ 菌相	⑧ 存有度	口縫部は厚く直立気味に伸び、口縫部をらせら。下端を突出させる。外縫を窄めに区画し、波状紋を施す。		

H-61号住居跡 (Fig.44 PL.15)

位置 44トレンチ X160・161、S139・140グリッド 主軸方向 N-62°-E 形状等 調査区で南西隅部分を調査。東西(2.40)m、南北1.33m、現壁高35cmを測る。面積 (1.39)m² 床面 調査部分では平坦。周溝 調査部分で全周し、幅15cm前後、深さ5～10cmを測る。柱穴、竈、貯蔵穴 未検出。出土遺物 土師器壺、甕片と須恵器壺片、東方の周溝部分に編み石が出土し、須恵器壺片(1)を図示した。時期 出土遺物から6世紀後半代と考えられる。

VII その他の遺構と遺物



- 61号住居跡セクション
- 1 褐色土 精作土で砂質
 - 2 斜褐色土 As-B を多く含む。
 - 3 黒褐色土 細まりあり、粘性を帯びる。As-C を主体に15%含む
 - 4 黑褐色土 細まりあり、粘性を帯びる。As-C を主体に20%含む。
 - 5 黑褐色土 4層より細い。細まりあり、粘性を帯びる。As-C を主体に25%含む。
 - 6 黑褐色土 3層に似る。
 - 7 黑褐色土 細まりあり、粘性を帯び、As-C を僅かに含む。
 - 8 黑褐色土 7層より明るい。細まりあり、粘性を帯びる。As-C を僅かに含む。
 - 9 黑褐色土 7層に似る。

Fig.44 H-61号住居跡・出土遺物

Tab.24 H-61号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①CT性 ②底径	③高さ	④壁厚 ⑤底面度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 蓋	覆土 (3)	①— ③—	②— ④—	⑤— ⑥— ⑦— ⑧—			

2 その他の出土遺物

33トレンチ (Fig.45 PL.16)

調査区の中央から東方の伽藍内に出土した瓦片とともに検出された羽口片と宝珠形の摘みを有する須恵器蓋を図示した。

Tab.25 33トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①CT性 ②底径	③高さ	④壁厚 ⑤底面度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土製品 羽口	覆土	最大口径8.8 孔径2.1~5cm	長さ 12.8	①繊維 ②無化焰 ③粗 ④—	送風口先端部から中位まで円筒形を呈し、末端部が膨広がりとなる。		
2	土製品 羽口	覆土	最大口径7.0長さ (7.8) 孔径2.1~2.5cm	7.0	①繊維 ②無化焰 ③粗 ④—	送風口先端部から中位までが残存すると考えられる。	190	
3	須恵器 蓋	覆土	①— ③—	②2.6	④粗	宝珠状の摘みを付す。		

34トレンチ (Fig.45 PL.16)

主なものは、C軽石をまじえる黒褐色土から出土した須恵器小型丸底壺(1)、調査区北の中門北縁で瓦と共に伴して出土した壙(5)と須恵器台付椀(6)、堅穴状遺構から出土した砥石(7)、攪乱土中より出土した寛永通宝(8)を図示した。

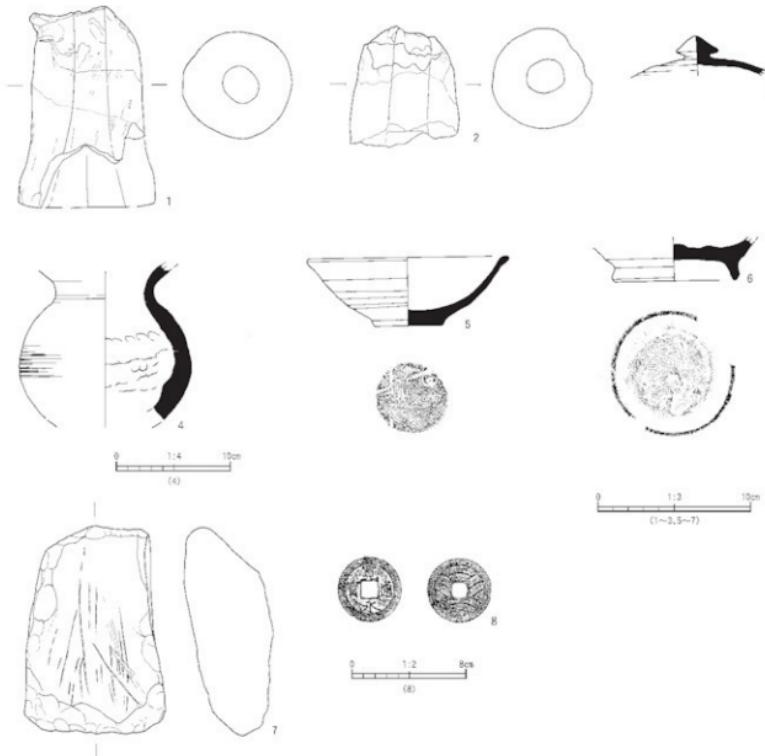


Fig.45 33・34トレンチ出土遺物

Tab.26 34トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土 位置	①口径 ②高さ ③底径	④断土 ⑤表面 ⑥底面	器種の特徴・整形・調整技術	登錄番号	備考
1	須恵器 环	覆土	①13.0 ②4.4 ③4.4	①中粒 ②深元焰 ③灰白 ④1/2	小壺より底より縦やかに内削し、体部はやや外反気味に開く。内面に特部に灯芯痕。底部は円柱状切り未調整。		
2	須恵器 高台碗	覆土	①— ②(2.8) ③7.6	①粗粒 ②深元焰 ③灰白 ④体部欠	直立気味に内削する高台を付す。底部内面は底部側軸未調整。	122	
3	須恵器 丸底盤	c.黑	①(12.0) ②(3.5) ③—	①中粒 ②深元焰 ③灰	球形側部を呈し、側面から口縁部は外反して開く。側部の内部は厚く、内面側面圧痕が残す。側部紙大径部分は平行側面を施す。		
4	石製品 砾石	堅穴状 通構	長さ13.4 厚さ5.7 重量 9.0	①— ②— ③— ④—	瘤状を呈する。縱向側面を研磨面とし、他面はでこぼこの凹凸で、1面のみ刃研ぎが残る。石材は	2	
5	古鏡 寛永通寶	覆乱土	①3.2 重さ 5.1g	①— ②— ③— ④—	当四銭 背十一波 文政4～8年鑄造		

図示漏れ遺物と41トレンチ出土遺物 (Fig.46 PL.16)

38トレンチ出土の須恵器高環片が漏れを生じていたので掲載し、41トレンチ溝状遺構、柱穴上面と拡張区から出土した遺物を図示した。

VII その他の遺構と遺物

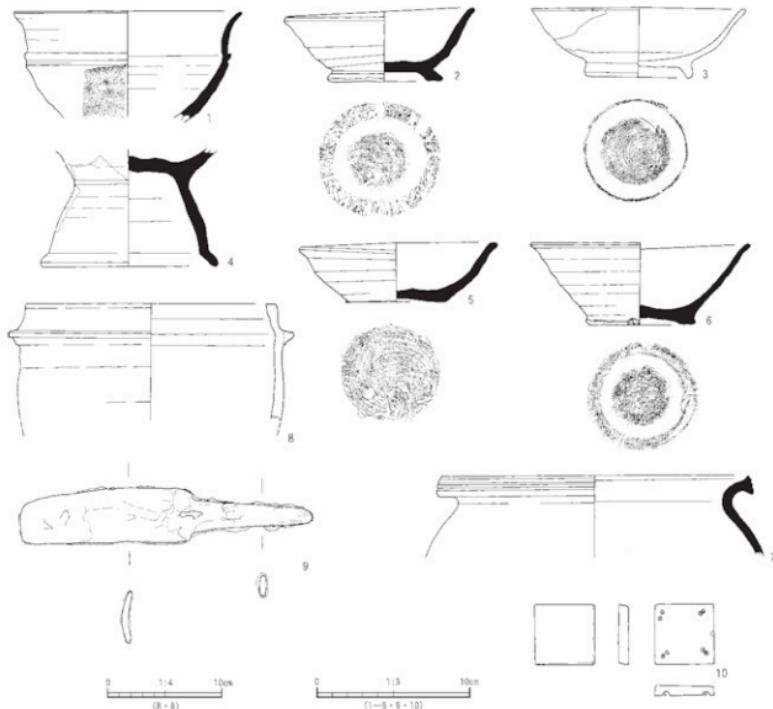


Fig.46 トレンチ出土遺物

Tab.27 トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土層位	①Q径 ②幅高 ③底径	①陶土 ②焼成 ③色調 ④保存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 高环	33T	①(14.5) ②— ③—	①相紺 ②深元焰 ③灰白 ④(2/3)	体部下部は捏塑整。中位に棱を有し、口縁は直立気味に外反する。棱下に波状紋を有す。		
2	須恵器 高台碗	W-4	①12.2 ② 4.4 ③ 7.0	①粗粒 ②深元焰 ③灰白 ④(2/3)	丈夫で底面は広いハの字状に開く高台を付す。体部は強く内済し、口縁は外反して開く。底部側縁系切り未調整。	2.6	
3	灰釉陶器 高台碗	W-4	①(13.6) ② 4.5 ③ 6.4	①細粒 ②深元焰 ③灰白 ④(3/5)	外縁が丸みを呈する三日月高台を付し、体部はスムーズに内済し、口縁部は移行する。底部は側縁系切り未調整。	4, 7, 9	大原2号式
4	須恵器 ？脚部	W-4	①— ② 7.4 ③(11.0)	①中粒 ②深元焰 ③灰白 ④脚部片	体部との接合部が凹れ、脚部は短くハの字状に開く。高形香器の脚部か？		
5	須恵器 环	W-6	①12.8 ② 4.8 ③ 6.2	①中粒 ②深元焰 ③灰白 ④(5/6)	底部より繊やかに内済し、体部はやや外反して開く。底部回転系切り未調整。		
6	須恵器 高台碗	W-6	①(14.0) ② 5.2 ③ 6.7	①粗粒 ②深元焰 ③灰黄 ④(2/3)	短く綺麗な高台より直線的に開く体部とする。体部の内部は比較的薄く、外縁に縮縫目を明顯に残す。	5	
7	須恵器 甕	W-6	①(26.4) ② 7.0 ③—	①中粒 ②深元焰 ③黄灰 ④(3/3)	内済して丸みを呈する肩部より、大きく外反する口縁部に移行する。口縁部の両端部を突出させ、外縁に2~3条の沈線が附る。	2	
8	羽筆	P4145 上面	①(21.6)②(10.6)	①粗粒 ②熟成化焰 ③灰黄 ④(1/4)	鶴は台形状を呈し、口唇部を平坦とする。		
9	鉄製品	P4128 上面	長さ18.7 幅3.5		鍛状の鉄製品で、刃部は鋸やかな「く」の状とする。		
10	石製品 覆瓦	覆土	辺3.8~3.9cm 厚さ6.5cm 重24.6g		側面がやや斜めに加工され、研磨されない側面に4個のかぎ孔を穿っている。石材は蛇紋岩。		

IX まとめ

21年度の調査目的は、①回廊の範囲確認、②中門の範囲確認、③金堂南側施設の範囲確認、④寺域の確認であった。まとめとして、これらの調査結果を整理し、若干の検討を加え今後の課題を明らかにしたい。

1 成果と課題

(1) 遺構

①回廊（南面回廊）

平成19年度調査では19トレンチで検出された版築状土層から南面回廊の位置が推定された。翌20年度では、28~31トレンチの4ヶ所の調査区を設定したが、いずれも回廊に関連する遺構は検出されなかつたが、27トレンチで検出B-3号建物が南回廊である可能性が考えられたため、その東側延長部分の調査を31aトレンチで行った。その結果、南面回廊の可能性が非常に高くなつた。これらの成果を踏まえ、本年度は、西側の回廊範囲確認を目的として、33トレンチを設定した。

33トレンチ調査結果

○回廊の南西部、南面と西面が交わる内側部分の版築土が検出された。

○版築は比較的簡易な作りであり、南面回廊の検出面は黄橙色粘質土であった。

○版築のコーナー部に検出された川原石は、礎石据付跡の根石の一部と見られ、18トレンチのP₂と15トレンチのP₄の柱筋にほぼ一致する。

○版築幅は礎石据付痕から、3尺ほどの張り出すことから18尺の5.4mと考えられる。

○西面回廊には、東西に走行する溝が検出されたが、雨落しか暗渠かは不明である。

○回廊南西隅の礎石据付痕から、南北回廊の規模は81mとなつた。

②中門

平成20年度に実施した推定中門跡の検出を目的とした29トレンチ調査では、全面が擾乱により削平され、遺構は検出されなかつた。しかし、南面回廊が27トレンチと31aトレンチの調査によりその可能性が高まつたことにより中門跡が、昭和56年の7次調査-6、平成19年の17トレンチの東側に推定されたので34トレンチを設定した。

34トレンチ調査結果

○東側部分の南側は近現代の擾乱が著しいが、中央部分に中世以降と考えられる堅穴状遺構が検出された。

○西側部分では南北に9m以上の版築が確認された。版築土はAs-Cを含む黒褐色土かHr-FA上に50cm前後の堆積が確認され、検出面は黄橙色粘質土であった。

○北側では東西方向に瓦が集中し、その下部から溝状の掘込みと柱穴が検出された。この遺構は雨落しか基礎の北側に施された板敷痕もしくは木造基壇の羽目板据付痕の可能性が考えられる。

○西壁沿いから南壁付近に川原石が検出された。礎石据付痕の根石の一部の可能性が考えられ、中門の西側柱と想定される。

③金堂南側施設

○35a・35bトレンチを設定し調査し、35bトレンチで瓦片を含む擾乱土の下でHr-FAを確認した。

調査結果

○金堂に係わる白色粘土の広がり、17トレンチで検出されたS83+2.9mラインの版築土は確認できなかつた。

Ⅸ　まとめ

④伽藍内施設

○36地点はB—2号建物跡の東西規模を確認するため、ボーリング調査を実施したが、版築土は無い。

○37地点はB—2号建物跡と対称となる建物の存在を確認するためにボーリング調査を実施したが、版築土は無い。

調査結果

○B—2号建物跡の規模は、南北7.7m、東西12.5m以内と想定される。

⑤寺域

○38トレンチは、寺域の南東で過去に金剛製飾金具出土地点付近に設定した。六世紀以降の竪穴住居跡が8軒、近世の溝跡を検出したが、寺域に関連する遺構は検出できなかった。

○39トレンチは、寺域の北西に設定した。竪穴住居跡6軒と、中世の土坑墓、時期不明の溝跡などを検出したが、寺域に関連する遺構は検出できなかった。

○40・41トレンチは、寺域の北東に設け、40トレンチは東西方向、41トレンチは40トレンチの西端より南方に向とし、L字形に連結する調査区を設定した。竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、柱穴、土坑、溝跡を検出したが、寺域に関連する遺構は検出できなかった。

検出された掘立柱建物跡は、寺域の北方から北東方向に検出された建物群の一部であり、遺構の重複関係が顕著であった。その一例として8世紀代の2号住居跡と重複する東西軸の梁行2間×桁行3間以上の掘立柱建物跡（B—6）と3間×3間の布掘り工法の掘立柱建物跡（B—5）を検出した。柱穴には瓦を礎板にしたもの、転石を使用するものが見られた。土坑からは基壇化粧の部材に使用されたと角閃石安山岩の切石が出土した。

○42トレンチは、縁軸水注等が出土した南側隣接地に設定した。9世紀前後の竪穴住居跡が2軒、溝状遺構を検出したが、寺域に関連する遺構は検出できなかった。

○43トレンチは、推定中門の南側に設定した。古墳時代の竪穴住居跡が1軒、近世以降の竪穴状遺構3基を検出したが、寺域に関連する遺構は検出できなかった。

○44トレンチは、銅挽瓦出土した付近に設定した。竪穴住居跡が1軒を検出したが、寺域に関連する遺構は検出できなかった。

調査結果

○寺域に係わる溝跡、築地、柱跡等の施設は、検出されなかった。

○40・41トレンチで検出された2棟の掘立柱建物跡は、寺域の北方から北東に広がる建物群の一部である。

○55・56号住居跡と重複関係から、①布掘り工法のB—5号掘立柱建物跡→②東西軸のB—6号掘立柱建物跡→③56号住居跡→④55号住居跡の新旧関係が確認された。

(2) 遺物

総量としては、瓦を主体とする遺物がコンテナパット48箱ほど出土した。注目される遺物としては、以下のものが確認されている。

○40トレンチ2号住居跡出土の置き竈片と鍋状土器があります。祭祀的調理に際して用いたと推定され、寺に關係する僧侶の存在を示唆していると考えられる。

○41トレンチのD—4101号土坑とD—4102号土坑より角閃石安山岩の切石が出土した。同様の切石は、昭和54年度の第6次の調査で金堂とP₁、平成18年度のW—10、同20年度の25トレンチからも出土しています。基壇化粧に使用された可能性があり、D—4102号土坑出土のものは葛石と考えられる。

2 結語：今後の課題

(1) 各建物の配置・規模

○回廊 19年度の調査で東西規模が79.7mであることが判明した。南北規模については、今回の33トレンチ調査で西回廊内面の桁行の柱筋に一致する礎石据付痕が検出され、南面回廊と交わる部分であることが判明した。この位置で南面回廊を復元すると、81mとなった。→20年度の復元より1.4mほど短くなり、より正方形に近い回廊になった。

回廊の版築幅は、礎石据付痕から3尺ほど出ることから回廊建物幅12尺に両側6尺を足した18尺の5.4mと推察される。

○中門 34トレンチ調査により中門の一部を検出した。検出された部分は北辺の西より部分と考えられる。検出された礎石据付痕は西側梁行部分に相当し6m(20尺)の柱間を測り、東西の推定中軸線から6.3m(21尺)となる、飛鳥・白鳳時代の中門は2間×3間の規模されることからシンメトリーの建物を想定すると2間の梁行が柱間10尺の20尺、3間の桁行が21尺の倍の42尺となり、その柱間は14尺となる。建物は東西12.6m、南北6mの身舎となり、基壇の出を8尺とするとその規模は17.4×10.8mとなる。

中門と西側で取り付く南回廊の調査結果から、版築の地堀底面レベルが同じであり、版築土に共通の黄橙色(粘質)土を使用することから一連の事業と考えられる。

○北方建物群 40・41トレンチ調査により検出された掘立柱建物跡と竪穴住居跡、溝跡の重複関係から、伽藍と異なる方位をとる西偏する掘立柱建物跡が主軸を東西方向とする掘立柱建物跡より古い結果となった。西偏する掘立柱建物跡については、創建時以前の古様相を呈するものと考えられているが、柱穴に礎版として瓦を使用する事例から、創建時以後のものも存在する可能性がある。

(2) 結語：今後の課題

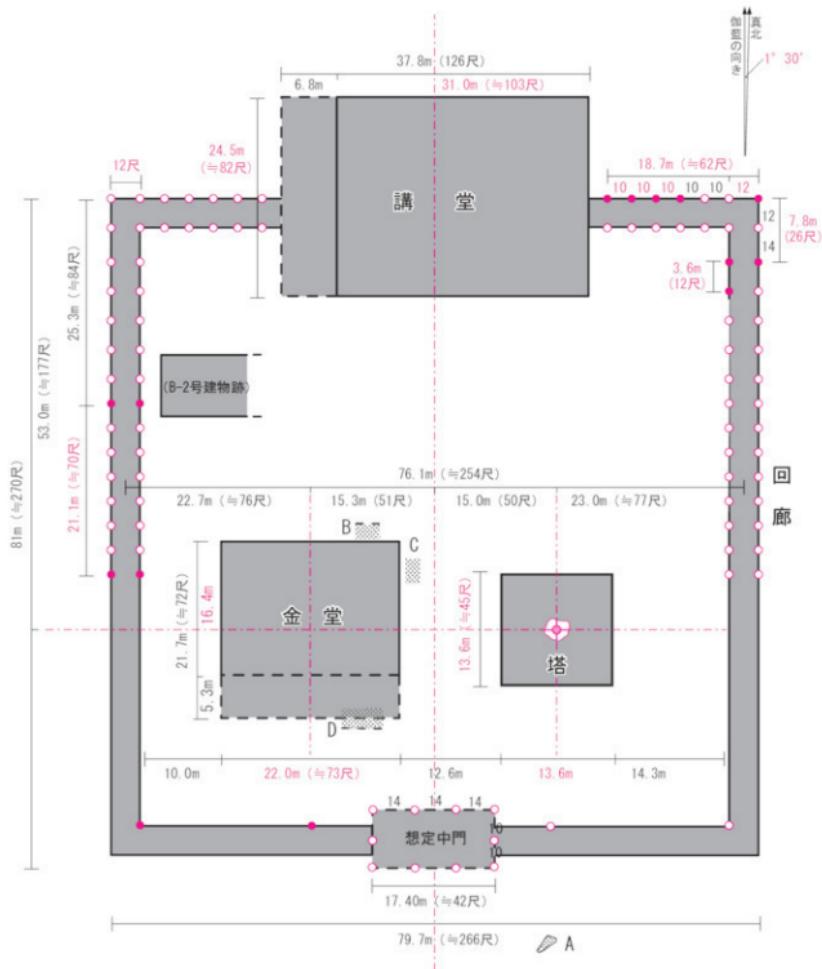
今回の調査で中門についてもほぼ確定できる遺構が34トレンチ調査で検出され、主要伽藍については概ねその配置を把握することができた。今後の課題としては、①中門の規模を解明、②伽藍内の鐘楼・経楼等の関連施設、東回廊の規模確認、③参道や南大門の施設、④北方建物の性格を含めた中心伽藍外の建物・関連施設等の解明、⑤塑像出土土坑の遺物・遺構の解明、などが挙げられる。

【主要参考文献】

石川克博	1987	「山王庵寺の創建期について－素井八葉蓮華紋軒瓦をめぐって」『群馬県史研究』26
伊勢崎市教育委員会	2002	「上植木庵寺・上植木庵寺瓦室」
井上雄雄	2009	「山王庵寺の創建と衰微」『山王庵寺』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
栗原和彦	2004	「山王庵寺の石造物と塔跡」『信濃』56-9
	2006	「山王庵寺出土「放光寺」銘文字瓦をめぐって」『群馬文化』288
群馬県史編さん委員会	1986	『群馬県史 資料編2 原始古代2』
群馬県歴史考古学同人会	1982	「第3回関東古瓦研究会資料」
住谷修	1982	「上野瓦集」西毛編
津金沢吉茂	1983	「古代上野国における石造技術についての一試論」『群馬県立歴史博物館研究紀要』4
角田文衛爾 滝川政次郎	1991	「上總國分尼寺」「新修國分寺の研究」第2巻 磁内と東海道
奈良国立文化財研究所	2003	「古代の官衙遺跡」 I 遺構編
奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館	1980	「日本古代の鶴尾」
福島武雄	1921	「日絕神社境内の大礎石」「土毛及上毛人」53号

Ⅸ　まとめ

- | | | |
|---------------|---------|----------------------------|
| 前橋市教育委員会 | 1975 | 「文化財調査報告書」第5集 |
| | 1976 | 「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」 |
| | 1977 | 「山王庵寺跡第3次発掘調査概報」 |
| | 1978 | 「山王庵寺跡第4次発掘調査概報」 |
| | 1979 | 「山王庵寺跡第5次発掘調査報告書」 |
| | 1980 | 「山王庵寺跡第6次発掘調査報告書」 |
| | 1982 | 「山王庵寺跡第7次発掘調査報告書」 |
| | 2007 | 「山王庵寺—平成18年度調査報告」 |
| | 2009 | 「山王庵寺—平成19年度調査報告」 |
| | 2010 | 「山王庵寺—平成20年度調査報告」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査課 | 1995 | 「大屋敷遺跡III」 |
| | 2000 | 「山王庵寺—山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書—」 |
| | 2000 | 「上野国分尼寺寺域確認調査」 |
| | 2000 | 「元總社宅地遺跡・上野国分寺尼寺寺域確認調査II」 |
| | 1983～97 | 「元總社明神遺跡」I～XIII |
| | 2000～05 | 「元總社遺跡群」元總社小見遺跡ほか |
| | 2006～ | 「元總社蒼海遺跡群」(1)～(30) |
| 前原 豊 | 1998 | 「よみがえる白鳳の寺 山王庵寺」『群馬文化』254 |
| 松田 猛 | 1984 | 「山王庵寺の性格をめぐって」『群馬県史研究』20 |
| 右島和夫 | 1994 | 「總社古墳群の形成過程」『東国古墳時代の研究』学生社 |

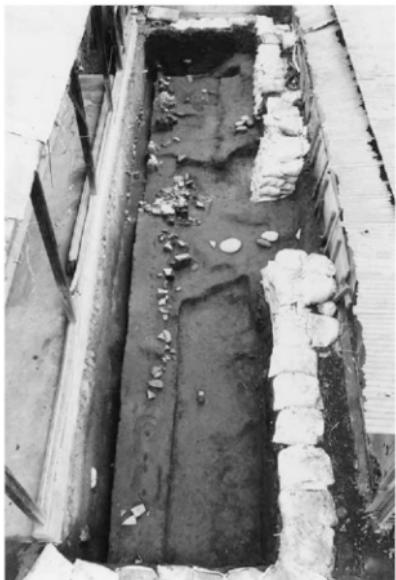


凡例

- 1 長さの単位 … mと尺（1尺=30.0cmで算出）。
単位の表示が無いものは尺。
2 赤字は調査で判明した数値。黒字は推定。
3 ○…推定の柱位置。
●…調査で確認された柱位置。
4 A …19トレンチで検出した版塗土。
B～D …金堂黒色土版塗の範囲。

Fig.47 山王庵寺伽藍復元図

写 真 図 版



1 33トレンチ遺物出土状況(西から)



2 33トレンチ完掘状況(西から)



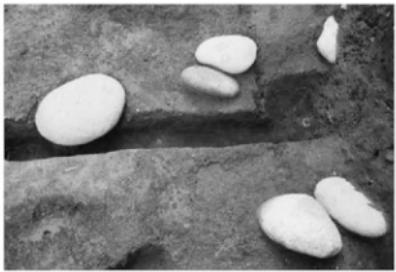
3 33トレンチ遺物出土状況(南東から)



4 33トレンチ遺物出土状況(近影)



5 33トレンチ礎石据え付け痕根石(北から)



6 33トレンチ礎石据え付け痕根石近影



1 33トレンチ北壁断面



2 33トレンチ版築との境断面



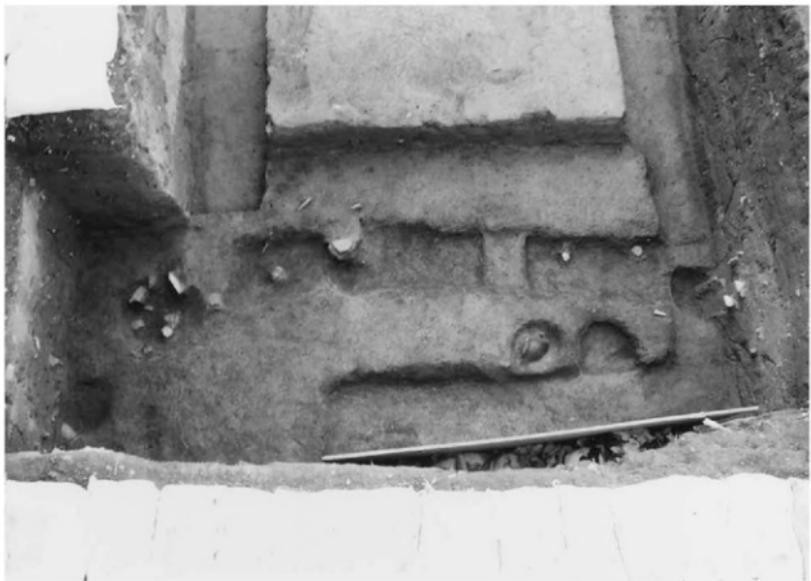
3 34トレンチ完掘状況(北から)



4 34トレンチ西壁北側断面(近影)



5 34トレンチ中門版築断面



1 34トレンチ中門北縁辺の状況(北から)



2 34トレンチ調査区全景(北から)



3 34トレンチ中門北縁辺の瓦等出土状況(北から)



4 34トレンチ南方礎石掘え付け痕根石(北から)



1 35a トレンチ全景(南から)



2 35b トレンチ全景(南から)



3 38 トレンチ全景(西から)



4 43号住居跡(38T南西から)



5 39 トレンチ全景(西から)



1 49号住居跡(39T西から)



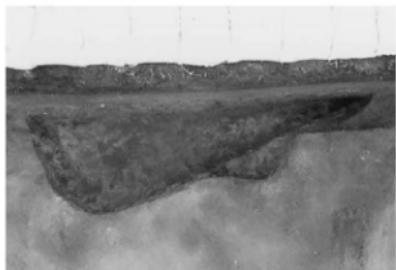
2 50・51号住居跡(39T西から)



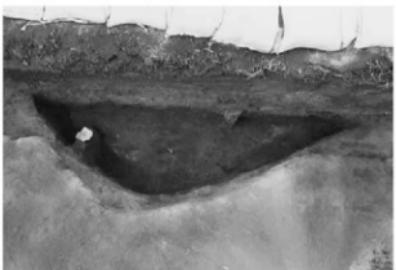
3 50号住居跡遺物出土状況(39T南から)



4 同住居跡遺物出土状況近影



5 53号住居跡(39T南から)



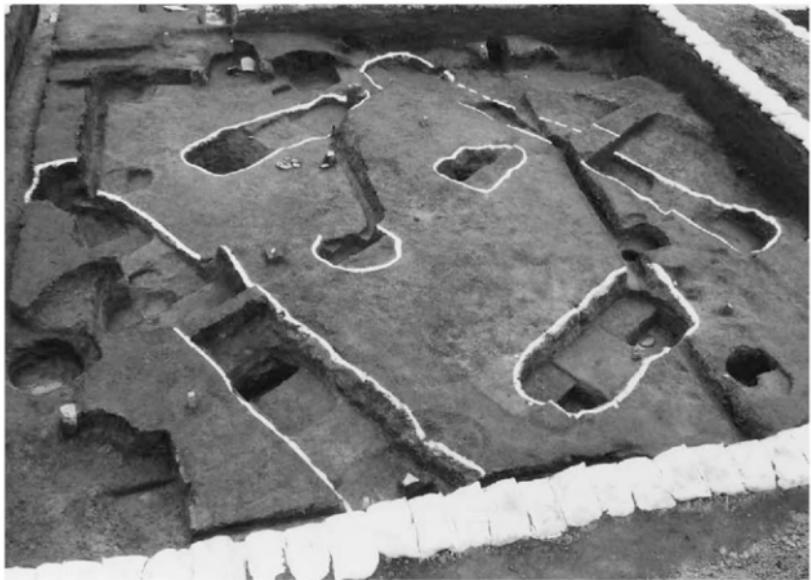
6 54号住居跡(39T南から)



7 B-5号掘立柱建物跡(40T北西から)



8 同建物跡P₁₁・P₁₂の布堀り(40T南から)



1 B-5号掘立柱建物跡全景(40T西から)



2 B-6号掘立柱建物跡全景(40T西から)



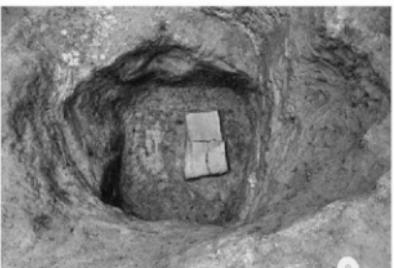
1 B-5号掘立柱建物跡P₁₂セクション



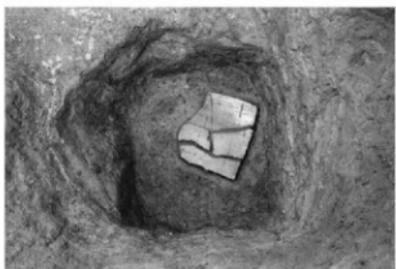
2 P-4131・4132(41T南から)



3 P-4132礎板瓦出土状況(真上から)



4 P-4132礎板瓦下面出土状況(真上から)



5 P-4132礎板瓦上面出土状況(真上から)



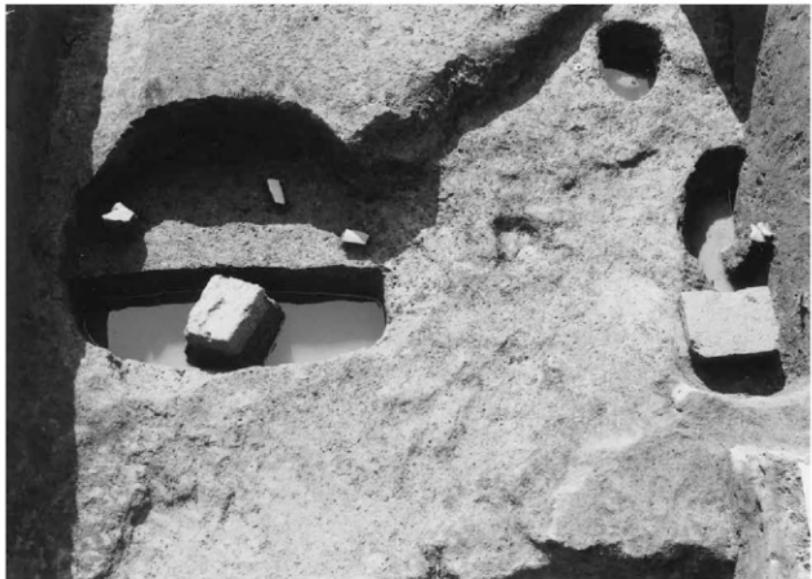
6 B-6号掘立柱建物跡P₂₃



7 D-4101切石出土状況(真上から)



8 D-4102切石出土状況(北から)



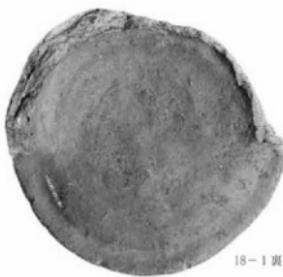
1 D-4101・4102切石出土状況(41T北から)



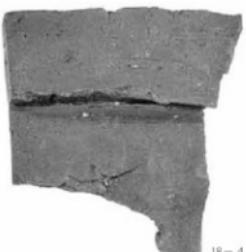
2 44トレンチ調査区全景(北から)



18-1 表



18-1 裏



18-4



18-6



18-7 瓦当面



18-7 四



18-7 凸



20-1 四

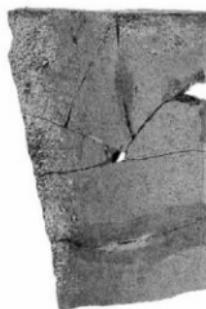


20-1 凸

礎板瓦下面



2表



2裏

礎板瓦上面



3表



3裏



20-3凸



20-3凹



20-2凸



20-2凹



41トレンチ



33トレンチ



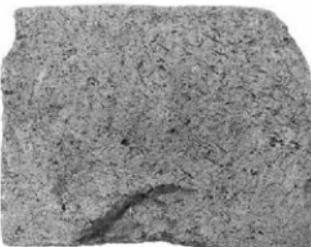
22-1



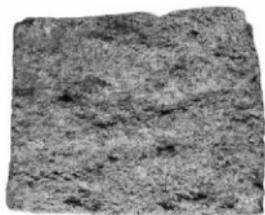
22-3



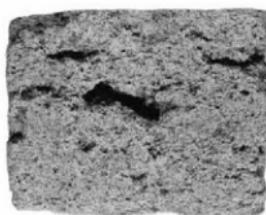
22-6
文字瓦



D4101出土切石



D4102出土切石



文字瓦·切石

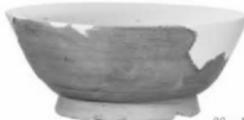




35-12
(H-40)



35-13
(H-44)



36-1
(H-45)



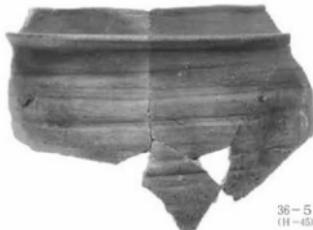
36-2
(H-45)



36-3
(H-45)



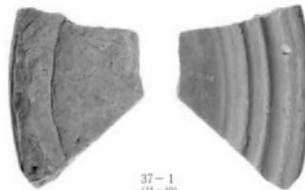
36-4
(H-45)



36-5
(H-45)



37-2
(H-49)



37-1
(H-49)



39-1
(H-50)



39-2
(H-50)



39-3
(H-50)



39-4
(H-50)



39-5
(H-50)



39-6
(H-50)



39-7
(H-50)



39-8
(H-50)



39-9
(H-50)



39-10
(H-50)



40-1
(H-55)



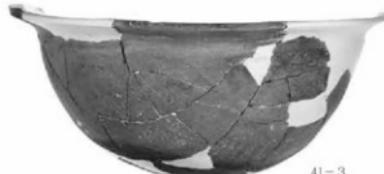
40-2
(H-55)



41-2
(H-56)



41-1
(H-56)



41-3
(H-56)



14-1
B-5号掘立柱建物跡P上面



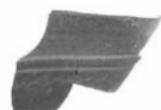
42-1
(H-56)



(H-56)



43-1
(H-60)



46-1
(トレンチ)



(H-61)



(H-61)



44-1
(H-61)



46-2
(W-4104)



46-3
(W-4104)



46-7
(W-4106)



46-4
(W-4104)



46-6
(W-4106)



46-8
(41トレンチ)



46-5
(W-4106)



45-4
(34トレンチ)



45-5
(34トレンチ)



45-6
(34トレンチ)



45-1
(33トレンチ)



45-2
(33トレンチ)



45-7
(34トレンチ)



46-10
(41トレンチ)



35-15
(H-44)



46-9
(41トレンチ)

抄 錄

フリガナ	サンノウハイジ
書名	山王庵寺
副書名	平成21年度発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	山王庵寺範囲内容確認調査報告書
シリーズ番号	IV
編著者名	山下歳信・福田貫之・栗原和彦
編集機関	前橋市教育委員会文化財保護課
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2011年2月17日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		位置 (旧日本測地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 綏			
サンノウハイジアト 山王庵寺跡	前橋市總社町 総社2408番地 ほか	10201	19A135	36°23'53"	139°02'06"	20090824 ～ 20091224	640.5m ²	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な検出遺構	主な出土遺物	特記事項
山王庵寺跡	寺院跡	古墳～ 奈良・平安	中門跡・回廊跡、掘立 建物跡2棟、竪穴住居 跡21軒、溝跡、土坑、 柱穴	瓦(軒丸・丸・平瓦)、 土師器・須恵器・灰釉 陶器、繩羽口・鉄滓・ 金属製品	中門跡：版築、北縁辺の 施設、礎石据付痕。南西 隅回廊を検出。回廊南北 規模81m。寺域北方に広 がる掘立柱建物跡。
		中世以降	土坑墓1基、溝		

山王庵寺範囲内容確認調査報告書W

山 王 庵 寺 平成21年度調査報告

平成23年2月18日印刷
平成23年2月21日発行

編集・発行／前橋市教育委員会文化財保護課
印刷／朝日印刷工業株式会社